

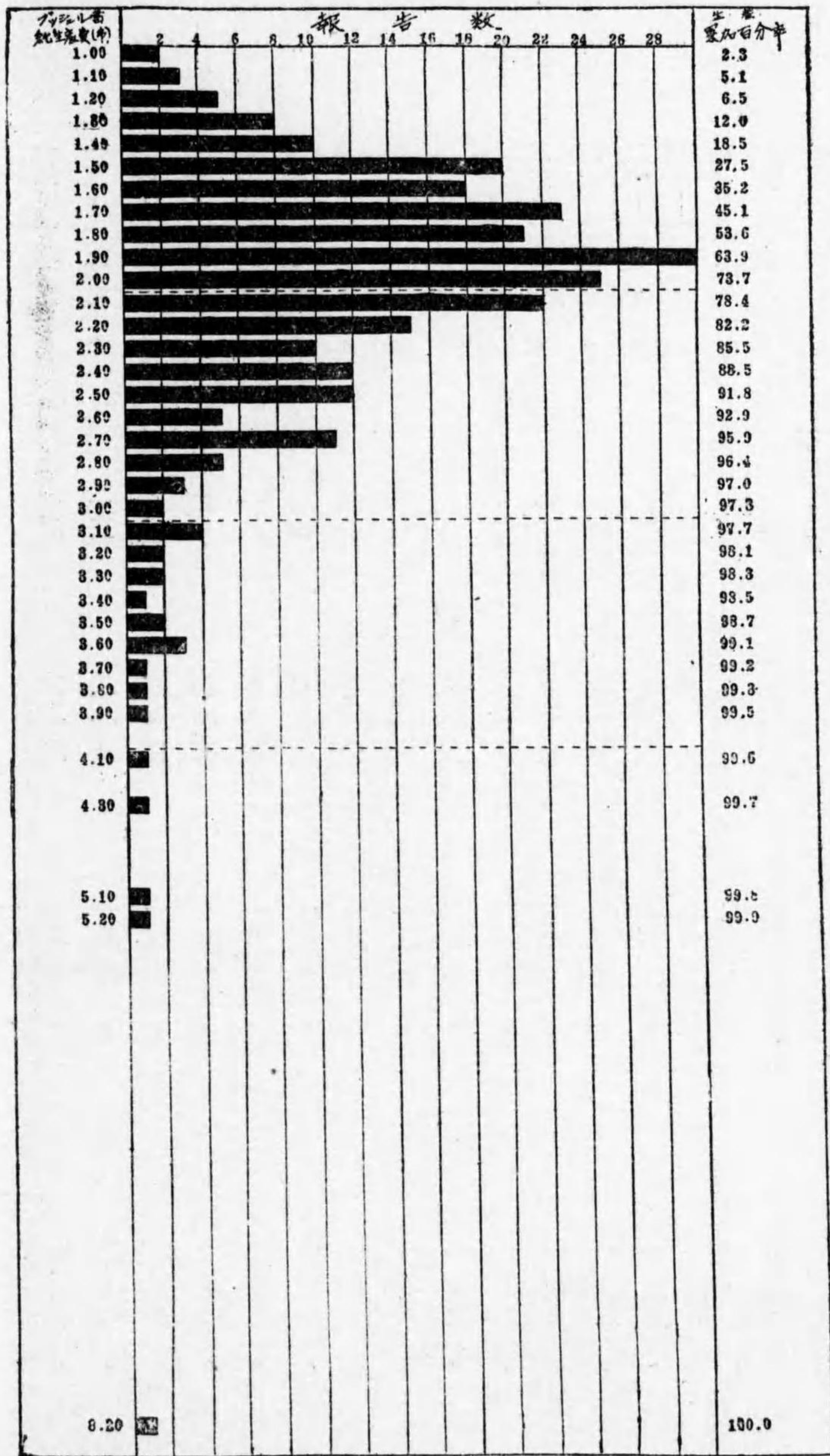
更に冬時小麦に就いて二百八十四栽培者の報告によれば次表に示す通りであつてブツシエル當りの生産費は最低九十六仙最高八、二四弗を示し平均は一、八七弗に當つてゐる。其の内七割五分以上は二弗以下の生産費を以て十分であつて三弗以上に該當するものは概ね例外とも見らるべく、此等は皆收穫不能に陥れる割合の多きに歸因することは春時小麦の場合と同様である。

冬時小麦 (二百八十四栽培者の報告)

收穫率順次	栽培者數	累計百分率	平均收穫率	ブツシエル當り平均原價
二—二、九	ブツシエル 二	〇、三	二、五	六、五五 弗
三—三、九	一	〇、四	三、四	四、三五
四—四、九	一	〇、六	四、九	三、六〇
五—五、九	三	一、一	五、六	三、三七
六—六、九	三	一、五	六、四	三、四二
七—七、九	七	三、三	七、五	二、八九
八—八、九	一四	六、五	八、二	二、四七
九—九、九	二二	九、一	九、六	二、三九
一〇—一〇、九	一四	一一、一	一〇、五	二、二六

一一—一一、九	二二	一四、五	一一、三	二、一七
一二—一二、九	二二	二二、三	一二、四	一、九七
一三—一三、九	二三	二八、五	一三、四	二、〇六
一四—一四、九	一八	三五、四	一四、五	一、九七
一五—一五、九	二二	四三、三	一五、四	一、九〇
一六—一六、九	一八	四九、四	一六、四	一、八二
一七—一七、九	二四	五九、九	一七、五	一、六一
一八—一八、九	二七	七〇、〇	一八、五	一、八〇
一九—一九、九	一一	七三、六	一九、五	一、七六
二〇—二〇、九	二八	八二、三	二〇、五	一、五五
二一—二一、九	一五	八九、六	二一、四	一、五六
二二—二二、九	一二	九四、三	二二、二	一、四九
二三—二三、九	六	九六、四	二三、四	一、六五
二四—二四、九	四	九八、二	二四、二	一、二九
二五—二五、九	四	九九、二	二五、二	一、四七
二六—二六、九	一	九九、五	二六、八	一、四九
二七—二七、九	一	一〇〇、〇	三〇、〇	一、四六
二九 以上	均			一、八七





以上の如くして稍々長きに亘つて合衆國に於ける小麦生産費に就て研究を進めたが此等を以て直ちに合衆國全般の而も最近の生産費と見ることは誤解を惹起し易い。何となれば右の如きは著名なる小麦生産地の一部分を統計作成上特に調査せるものたるのみならず、右調査報告は一九一九年を以て基礎とせるが故に平常に於ける生産費とは可成の相違を來すに非ずやと考へらるゝ點も少なくない。然し一面には經濟界の變動、物價の異同により他面小麦收穫率は時を異にし、所を同ふせざるによつて常に變動して止まざるものであるから生産費については到底正確にして不變不動なる一定額を期待することは困難である。即ち其の一例として前記各州の平均小麦收穫率及び生産原價をBureau of Agricultural Economicsの發表せるものに求むれば

	一九一三年度	一九二〇年度	一九二二年度	
カンサス州	收穫率	ブツシエル	收穫率	ブツシエル
ネブラスカ州	當り原價	一、〇二弗	當り原價	一、二五弗
ミソリー州	收穫率	ブツシエル	收穫率	ブツシエル
北ダコタ州	當り原價	一、〇二弗	當り原價	一、二五弗
南ダコタ州	收穫率	ブツシエル	收穫率	ブツシエル
ミネソタ州	當り原價	一、〇二弗	當り原價	一、二五弗
	一五ク	〇、九九ク	九ク	一、九九ク
			一四ク	一、〇〇ク



従つて前述の合衆國農務省の調査の結果になる生産費も亦大いに参考上價值あるものと言はねばならぬ。又最近合衆國が加奈陀小麥の壓迫の爲めに、所謂農民救済政策の一つとして、小麥輸入税の改正を行はんとするの議が盛であつた一九二三年末より一九二四年當初に當つて彼の Wheat Council の會長たりし Anderson 氏が種々調査の結果、當時合衆國の小麥生産費は平均一ブツシエル當り一、五七弗となせるも亦参考とするに足るであらう。兎に角、所により年により著しき變化あるにもせよ、最近は一ブツシエルの生産費が常に一弗を遙かに超過することは争はれぬ事實とせねばならぬであらう。

### 第七項 合衆國の小麥需給關係

合衆國の如く地積廣大無邊而も小麥栽培に好適の位置を占め其の生産高が世界に冠絶するものあるにも拘らず、住民の數比較的僅少であり其の國內消費量が常に生産高に及ばざる國に於ては、當然剩餘小麥は海外に輸出されざるを得ない。而して其の輸出數量が巨大なるの事實が合衆國をして小麥界の雄たらしむる所以に就ては既說せる所に屬する。等しく支那、印度の如きも數億ブツシエルの小麥生産高を有するにも拘らず、世界小麥界に左程重要な地位を占めざるは共に其の内地消費高多額に昇つて剩餘小麥が、殆き言ふに足らぬによるものである。前數項に亘つて合衆國の小麥生産状態の百般を論せる所以のものは一に皆懸つて合衆國が相當多額の剩餘を有し世界各國の不足を補足する地位にあるが爲めと言つてもよい。

果して然らば合衆國は年々幾何の小麥を剩餘として世界の小麦不足國に供給するやは當然研究されねばならぬことである。是此に合衆國の小麥需給關係なる項を設け総括して一言せんとする理由に外ならない。乍然合衆國に於ける小麥の如く其の生産額、消費額乃至は其の他の需給の數量が膨大なるものにあつては、明確に需給の状態を述ぶることは殆んど不可能のこととせねばならぬ。又假定特定年度の需給に就ては特に詳細なるものを得るに難からずとするも之を以て常に累年の需給關係を決定することは甚だしき誤謬を惹起する懼なしとしない。

由來定期間の供給の總量は該期間の總生産高、輸入總量並びに前期より持越されたる數量の總和である。而して生産は一定の期間連續的に行はれ、輸入は該期間を通じて順次行はるゝ。故に供給のみに着眼し之を標準とせば供給數量は時日の経過と共に彌々増加し同期間の最終に於て其の極に達す。反面需要の側より觀察すれば小麥の如き主要食糧品は日夜消費し去られて止まず、加ふるに海外の需要に應じて小麥のまゝ或ひは其の製品となつて刻々輸出せらる。従つて一定期間に於ける需要量も漸次増加の度を高め、終に該期間の終了する時、供給總量の場合と同様に其の最高需要數量を示す。

然るに此の如きは夫々専ら需給の一方面にのみ着眼しての立論であつて、我々の日常生活上乃至經濟生活上には此の需要供給の兩者は決して切斷して考慮せらるゝものではない、需給の關係は影の形に添ふが如く密接不可離のものとなせねばならぬ。若し兩者を全然切斷して論ずることが出来たとすれば一國內の需供關係は何等の困難なくして其の真相を捕捉することが出来るであらうが、此くの如きは實際的問題として何程の利益あるやは稍々



疑はしいものであらう。殊に小麥の如く其の生産地域が全世界を蔽ひ、而も夫が主要食糧品たる關係よりして最も重要な國際的商品と認識せられ、獨り其の生産高が年により異同あるのみならず、其の國際的移動乃至は國內移動が或ひは國際經濟界の順逆により就中金融状態の好不況によつて重大なる影響を受けるが如きものにあつては、需要供給の關係は相錯雜し、到底其の真相を捕へんとするが如きは至難の業なるのみならず、其の概要を知らんとして尙得べからざるものがある。彼の合衆國政府が毎年一定の期日を定めて同國の小麥保有高を調査する場合に其の實例を發見することが出来る。

更に此に考慮すべきは其の商品としての價格の如何である。換言すれば相場の關係に外ならない。獨り小麥のみならず苟くも商品たる以上皆一樣に所謂相場なるものによつて支配せられて刻々新なる需給の關係を發生することは此に言ふ迄もないと思ふ。小麥の如く我々人類の生活上一刻も欠くべからざる必需品に於てさへも價格の高低によつて稍々甚だしき程度に需要量を増減し、其の影響が供給にも及ぼすことは枚擧に遑ない程の實例で滿されてゐる。其の最も甚だしき最近の例を示せば一九二四年末より一九二五年當初に亘つて小麥の相場が世界的に大暴騰を示せる時、我國の如く小麥を主要食糧とせず謂はば副食物とせる國に於ては勿論、歐米諸國の如く小麥を以て主食物とする國に於てさへ其の消費が激減せることは識者を待たずして明らかに認められた事實である。又小麥の價格と需給の關係も、常に此の兩者の問題以外に出でずと見るは大なる誤であつて、小麥價と他の物價就中其の代用食糧品の價格との關係が如何なる割合にあるやも亦小麥の需給を定むる重大なる要素となる。

右の如きは單に經濟上の現象であるが、此には又通例測定することの出来ない心理的の現象も發露せられて需要供給の關係は益々複雑化するゝこと疑ひない。此の如く需要供給を決定する諸因子が相錯雜し、其の相關的變動を其の常態とするは謂はば動的需給關係であり、正に我が經濟社會の需給状態の實相である。反之既に一言せるが如く一定期間の供給、需要の兩者を夫々總括的に累算し總需要、總供給の外觀を示すものは靜的需要關係とも言ひ得る。以下合衆國の需給關係を述ぶるに當つては理論上前者の動的需給關係を述ぶることが至當ではあるが未だ小麥移動、市場に就ても説明せざるが故に、此には主として後者なる靜的需給關係を説くに止め、後章折に觸れ前者に言及したいと思ふ。

#### (イ) 供給

一ケ年に於ける合衆國の小麥總供給量中、最主要なるものは該年度の小麥生産量であり遠き昔日のことは別とするも一九〇〇年以降、最近に至る二十有餘年の平均生産額を求むれば約七億四千二百萬ブツシエルであつて一九〇四年の如き未曾有の不作なりし時代に於ても、而も五億五千二百萬ブツシエルを生し一九一五年の如きは優に十億を突破せる状態なるが故に、人口其の他の事情を考慮するも近き將來に小麥供給量が國內需要量に達せざるが如きことを生ずることは先づないと言ふことが出来やう。

既に合衆國の小麥作付反別の項にて詳論せるが如く、歐洲大戰亂の如き大事變の惹起せられ其の影響が經濟界には勿論、一般社會に及ぼされざる限り同國の小麥作付反別數は大體六千萬エーカー内外と見て差支ないと信ず



る。其の隨當り收穫率は各種の事情影響を參酌するに近年の平均は十四ブッシェル内外に該當するが故に、先づ平年作の小麥生産量は八億ブッシェル乃至八億五千萬ブッシェルと見て大過ない。勿論作付反別に増減あり或ひは收穫率に高低を來すが如き場合は右の推算と合致しないことは言ふ迄もない。

次に獨り小麥のみならず總べて農産物は其の收穫の終了せる後當然 *Loss in cleaning* と *Unmerchantable grain* を生ずるものであるから總生産量より當然右の數量を控除したものを以て純生産量とせねばならぬ。然るに合衆國に於ては加奈陀に於けるが如く *Loss in cleaning* 及 *Unmerchantable grain* が平均總生産高の幾パーセントに該當するや信すべき統計なきも此れを各小麥生産國の例の如くに概略五パーセント乃至六パーセントとするも尙平年の合衆國の純生産量は依然として八億内外を保つ。

而して總供給高の一部を構成するものとして考慮せらるべき持越高は所謂商業上の *Visible Supply* 製粉業者手持高、穀倉會社の在庫高、並びに農家の保有高等を合算せるもので此等の算出は種々なる關係よりして、正確の數字を求むることは全く不可能であるが、合衆國政府の毎年發表せる所を基礎とすれば、大体前年度生産高の約一割であつて八千萬ブッシェル乃至九千萬ブッシェルを常態とし一億を超過せるは二十世紀に入りてより、一九〇六、一九〇七、一九一六、一九二〇の四ヶ年であつて、主として前年度の麥作豐作なりしが爲め國內消費乃至は對外輸出が之れに伴はざるに歸因するに外ならない。

最後に同じく小麥總供給量の一要素たる輸入小麥は一九一〇年以前は殆き問題とするに足らなかつたのである

が、同年以後殊に一九一四、一九一五年頃より隣國加奈陀に於ける小麥栽培が長足の進歩をなし、安價なる小麥を供給するに至つて合衆國の輸入は大いに増大し、一九一七年、一九二〇年の如きは夫々三千百萬ブッシェル、五千七百萬ブッシェルの多きに達し、一九一四年以降の平均にても約三千萬ブッシェルを示してゐる。(第二章、第三節、第六項北米合衆國との關稅關係參照) 此等の各要素を以て成る小麥總供給量は別表に示せるが如く、一九〇〇年より一九〇八年迄のものは年々七億七千七百萬ブッシェルにして一九〇九年乃至一九一三年迄は七億七千萬ブッシェル、一九一四年乃至一九二〇年に及んで一躍九億三千七百萬ブッシェルに達してゐる。而して今後も特殊の事情の突發せざる限り大体其の供給數量は一九二〇年代のものと推算して大過ないと思ふ。

(ロ) 需 要

需要總量は之れを國內消費量、種子用數量、持越高、對外輸出の四に大別することが出来る。而して通例國內消費量と稱するものは食糧としての消費高に種子用、雜用を合算せるものであつて合衆國に於ける一年一人當り五、三ブッシェルなることは既に第一章に於て述べたる所に屬する。食糧としての消費量は小麥生産額の増減乃至は價格の高低あるに従つて多少の變動あることは前述の如く否定し得ないが、其の主要食糧品たる關係より其の消長も比較的輕微であつて、大体年額五億ブッシェル内外なることは次表に示せるが如くである。又種子用として消費せらるゝものは作付反別の増減によつて著しく支配せらるゝにもせよ、最近の統計表によれば九千萬ブッシェル以内であつて、前者の食用消費と合算して六億ブッシェルを突破するが如きことは先づないと見て差支な



い。従つて總供給量より右の消費額を控除せるものは當然輸出用並びに次年度への持越高となるものであるが、持越高は既に供給の項に説明せるが如く毎年概算八千萬ブツシエル内外とせば其の殘餘は輸出餘力と見ることが出来る。合衆國に於ける小麦輸出の詳細は章を改めて小麦の國際的移動を論ずる場合に説明するが故に此には之を省略し、只近年の平均輸出數量が二億五六千萬ブツシエル(粉をも含む)なることを記すに止むる。以下合衆國農務省、商務省の發表せる同國の小麦供給明細表を示すこととする。

供給數量表

(單位百萬ブツシエル)

前年度よりの持越高	前年度よりの持越高		合計	收穫高	輸入高	總供給高
	小麦供給量	食料用貯蓄量				
一九〇〇年度	四六	三九	五一	一三六	六〇三	七四〇
一九〇一年度	三一	二九	三一	九一	七八九	八八〇
一九〇二年度	二〇	二六	五二	九八	七二五	八二四
一九〇三年度	一六	一九	四三	七八	六六四	七四二
一九〇四年度	一四	二一	三七	七二	五九七	六七二
一九〇五年度	一四	一九	二四	五七	七二七	七八四
一九〇六年度	二六	二九	四六	一〇一	七五七	八五九

一九〇七年度	四七	三三	五五	一三五	六三八	五二〇	七七四
一九〇八年度	一五	二〇	三四	六九	六四五	四五七	七二五
一九〇九年度	一〇	一八	一五	四三	七〇〇	一八一	七八六
一九一〇年度	一二	三七	三六	八五	六三五	一、一四七	七二一
一九一一年度	二四	三四	三四	九二	六二二	三、四一四	七二七
一九一二年度	二二	三一	二四	七八	七三〇	一、二八二	八〇九
一九一三年度	三〇	二五	三六	九一	七六四	二、三八四	八五七
一九一四年度	一六	二八	三二	七六	八九一	七〇五	九六八
一九一五年度	八	一八	二九	五五	一、〇二六	七、一八八	一、〇八八
一九一六年度	四三	四六	七四	一六三	六三七	二四、九二五	八二五
一九一七年度	一五	一七	一六	四八	六三七	三一、二一五	九一六
一九一八年度	一	八	八	一七	九三	一一、二八九	九四九
一九一九年度	九	一九	一九	四七	九三八	五、四九六	一、〇二一
一九二〇年度	一八	三六	五〇	一〇四	八三三	五七、三九八	九九四
一九二一年度	八	二六	五七	九一	八一四	一七、二五二	九〇三



年度	需要數量表	種子量	輸出量	持越高	國內消費	總需要高
一九二三年度	一八	二八	三三	七八	八六八	一九、九四五
一九二二年度	二九	三六	三六	九七	七八六	二七、九五九
一九二一年度	七五	二一六	九一	三五八	七四〇	一、〇一一
一九二〇年度	七五	二三五	九八	四七二	八八〇	
一九一九年度	七七	二〇三	七八	四六六	八二四	
一九一八年度	七三	一一一	七二	四七六	七四二	
一九一七年度	七四	九八	一〇一	四九五	六七〇	
一九一六年度	七三	一四七	一三五	五〇四	七八四	
一九一五年度	七三	一六三	六九	四六九	八五九	
一九一四年度	七〇	一一五	四三	四八七	七七四	
一九一三年度	七五	八八	八五	四九六	七四五	
一九一二年度	八〇	六九	九二	四八〇	七二一	

(單位百萬ブツシエル)

一九二三年度	一八	二八	三三	七八	八六八	一九、九四五	九六六
一九二二年度	二九	三六	三六	九七	七八六	二七、九五九	一、〇一一
一九二一年度	七五	二一六	九一	三五八	七四〇		
一九二〇年度	七五	二三五	九八	四七二	八八〇		
一九一九年度	七七	二〇三	七八	四六六	八二四		
一九一八年度	七三	一一一	七二	四七六	七四二		
一九一七年度	七四	九八	一〇一	四九五	六七〇		
一九一六年度	七三	一四七	一三五	五〇四	七八四		
一九一五年度	七三	一六三	六九	四六九	八五九		
一九一四年度	七〇	一一五	四三	四八七	七七四		
一九一三年度	七五	八八	八五	四九六	七四五		
一九一二年度	八〇	六九	九二	四八〇	七二一		

(註) 右二表は合衆國政府の發行せる諸年鑑に準據せるも版を異にするに依つて同一年度に於ける數字に多少の相違あるが故に主として一九二二年版一九二三年版の Agricultural Year Book に據つた。



## 第三節 加奈陀

北米合衆國に亞いで小麥生産上一方の雄たるものは加奈陀とせねばならぬ。加奈陀が小麥生産國として世界に其の令名を轟かせるに至つたのは寧ろ近年のことではあるが、其の地勢、土壤、氣候、風土を考慮すれば今後更に異數の大發展を遂ぐるであらうことは衆目皆一致する所である。此の點既に説明せる北米合衆國と大いに趣を異にするものありと言はざるを得ない。即ち合衆國に於ては小麥栽培に就き漸次悲觀的狀態に進みつゝあることは種々の議論あるにもせよ事實上否定し得ない所であらう。於此か爲政者が大聲叱呼して農村の振興を叫び、就中小麥生産者の保護には甚大なる注意を傾注しつゝある此等の事實に徴しても其の間の消息を窺ふに必ずしも困難ではないのである。

惟ふに合衆國は今や其の人口一億を超過し、其の主要食糧たる小麥の消費量の如きも莫大の數に達し、時に或ひは需要の數量が供給高を超過せんとする趨勢に向ひつゝあることは、合衆國が小麥生産國として就中小麥供給國としての地位を脅かし、往々にして悲觀論者を出す著しき一因であらう。他面尙同國には小麥栽培に適合する土地廣大なるものあるにもせよ、其の開発、開墾せらるゝと時を同じうして、既に小麥栽培地として耕耘せられつゝありしものが、他種農産物の栽培に轉換せらるゝこと、彼の東部地方、南部地方と同様なる傾向あることは否定し得ざるべく、此くては一方に於ける作付段別の増加も他方の減少を補足するに留つて、到底異常の大發展を

遂ぐることは先づ困難とせねばならぬ。是れ合衆國の小麥生産の將來に對する悲觀の第二因である。殊に同國の人口増加率が稍々甚だしきものあるを考慮すれば、小麥の需要は今後益々増加すべく、供給は之れに伴はずしてやがて供給不足に陥るに非ずやとの疑念を生ずる又故なしとしない。

加之、合衆國の小麥栽培に關し看過し得ざる致命的の打撃とも稱し得るものは、地價が漸次異常の騰貴を來せることではなからうか。地價の騰貴は要するに土地に對する投下資本の膨脹を意味する。投下資本の膨脹は即ち利息の増大、換言すれば地代の累加を來すこととなる。之やがて小麥生産費の膨脹を招き、小麥栽培が果して收支償ふを得るや否やの問題となる。若し世界的な小麥相場にして軟弱なるが如き場合、先づ第一に大打撃を受くるものは、即ち同國小麥栽培者とせねばならぬ。彼の一九二三年下半年より一九二四年上半期に亘つて、小麥價が世界的に低落せる時如何に同國政治家が農民救済の爲めに奔走せしやは此に論を要しないことである。又爲めに政府の補助を求めんとするもの又は同國內の産出に懸る小麥に對し、一定の價格を保證せしめんとする法律案が議會に提出せられたること百を以て數ふる程なりしに依つても、其の一端を窺ふに足ると思ふ。

抑々小麥の如く比較的安價なる農産物にして、而も多大の耕耘地を要し、更に其の收穫量の如きも専ら天候其他の外界の力に依つて左右せらるゝこと多きものにあつては、其の經營上地代の低廉なることを第一要件とせねばならぬ。従つて合衆國の如く人口の増加、資本の充實に伴つて地價の騰貴して止まざる所に於ては、小麥生産が採算上不引合に陥るにあらずやと懸念せらるゝこと必ずしも虚空の言ではないであらう。



然るに反之加奈陀の如きに至つては總面積實に約三百萬方哩の大きを示し、歐州全土よりは少しく狭いにもせよ合衆國に比すれば其の上位にあり、然も農耕地に適合すと學者の推定せる面積は優に三億噠に達し、而して現に耕耘されつゝあるものは僅かに其の六分の一にも及ばずとせば、將來の發展を豫想し得らるゝは勿論、現在の地代が極めて低廉なるべきことは論を俟たぬことを言はねばならぬであらう。是加奈陀が合衆國に比し現今小麥栽培地として少なくとも經濟上數等有利なる地位にあるを説明して餘りあるものと考へる。

由來加奈陀が世界に其の存在を認めらるゝに至つたのは、其の豊富なる木材、無盡藏とも稱せらるゝ魚類、併せて其の礦産物、就中ユーコン地方の金礦發見に依ると言ふも過言ではないであらう。乍然其の林業たると漁業たると、將又礦業たるとを問はず資本力、勞働力を要することは勿論であるが、該事業の性情として最も粗放的たることを免れない。顧るに、或ひは植民地と稱せられ、或ひは開拓中のものと稱せらるゝ地方に於て、先づ最初に着眼せらるゝものは前記の諸業を出でないであらう。否前記の諸業が該地方の開發を促進せしむると言ひ得る。而して漸く人口の加増を來し文化の程度向上するに従つて、此に勞働力の充實と資本力の蓄積とは相俟つて適當たるべき土地を求めて農業を興し、之を企業化せんとするの傾向を生ずる。此の傾向に對しては時の古今たると洋の東西を問はず、皆其の轍を一にせるものとして差支ない。而して又彼の加奈陀も現在此の階梯にあるものと見ることが出来る。

先きにも述べたるが如く、加奈陀は北緯五十五度以南に約三億噠の耕地を求め得べく、而も其の豊饒なる地味と

適當なる氣候は絶えて久しく不間に附せられ、其の殖民以來既に二世紀に垂んとするにも拘らず尙僅かに五千萬噠の耕地を有するに過ぎざるはそも何故ぞや。惟ふに人口の稀薄と資本力の缺乏の二者に求むるの外はないであらう。現在加奈陀の全人口は未だ九百萬に及ばず、一方哩の密度辛じて二人なる状態を見ても如何に人口の稀薄なるや、換言すれば勞働力の缺乏せるやを知るに充分である。又其の資本力の缺乏せるは社會的の各般の設備の不完全、就中鐵道其の他の交通機關の施設に重大なる缺陷あるを以ても明らかである。乍然最近に至つて加奈陀の人口は逐年異數の膨脹を示し、殊に合衆國より移住するもの多きを加へ今や従前の如く甚だしき勞働力の缺乏を訴ふるを聞かざるに至り、又資本力に對しては爲政者が大いに合衆國乃至は英本國の投資の誘引に努め、未だ満足すべき状態には非ざるにもせよ、漸次改善されつゝあるは否定し得ざる所であつて、殊に鐵道其の他交通機關の施設には全力を傾注し、今や勞働力の輸送、農産物の積送に殆き全く従前の如き不便は除去せられたるが故に、俄然農業が確乎たる基礎を獲得することを得、大いに發展の途上にあることは見易き事實である。

殊に小麥栽培業に就て論ずれば、各種の條件が極めて有利なるものであり今や旭日昇天の概あり、之れを合衆國の、時に或ひは悲觀的前途を有するものと比すれば誠に興味津津たるものがある。此合衆國の小麥を説きて直ちに加奈陀の小麥を述べんとする所以の一である。他面加奈陀は合衆國と其の境を同ふし合衆國北部と加奈陀南部は總べての點に於て酷似し研究上極めて便利なることは其の二である。即先きにも論ぜるが如く合衆國の小麥栽培地は漸次東部、並びに南部より北部、西部に移り今や Kansas を中心として南北 Dakota, Minnesota, Washington



地方が合衆國に於ける小麥栽培の中樞をなすつゝある時、此等の諸州と隣接する加奈陀南部の Manitoba, Saskatchewan, Alberta, British Columbia は其の廣大無邊の沃野を擁し、而も小麥栽培上前者に優るも決して劣らざる好條件の下にありとせば、今後此等加奈陀諸州が世界の小麦界の牛耳を握ること必ずしも遠き將來を待つ迄もな  
いと思はるゝ。従つて先づ現今に於ける小麦界の雄たる合衆國を説き、次いで將來の覇者たる加奈陀を研究せんとする、又必ずしも故なしとしない。

果せる哉一九二三年度に於て加奈陀は果然四億七千萬ブツシエルの小麦實收を挙げ、其の輸出餘力の莫大なる點よりして終に宇内に冠絶するに至つたのである。唯強ひて其の遺憾とさるゝ點を挙げれば前述の資本力勞働力の缺乏なる點なるべけれども、此等は漸次改善せらるべく其の生産小麦の品質の如きは製粉上決して合衆國のものとして遜色なく、却つて數等優秀なるものある事實に徴すれば、加奈陀小麦の前途誠に洋々たりと云ふの外ないであろう。更に最近の統計に依つても知り得らるゝが如く、加奈陀の物産中、材木は年産三億五千萬圓、水産物一億圓礦産物四億圓なるに比し、農産物は優に十億圓に近く内小麦産額が四億圓を突破するを見ても如何小麦の生産が重要な地位を占めつゝあるやを如實に表明してゐるものと言ふことが出来やう。

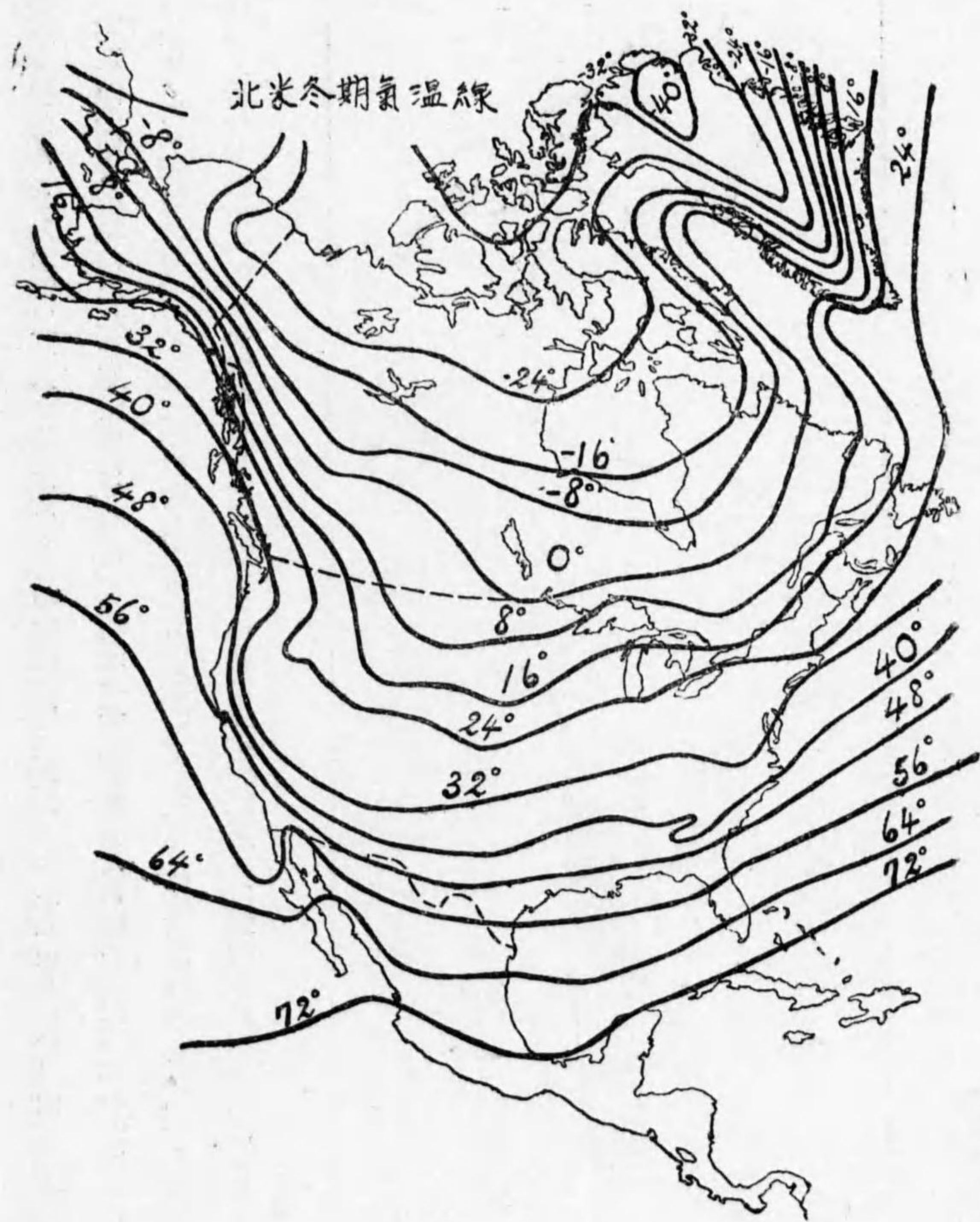
### 第一項 加奈陀に於ける小麦の分布状態

加奈陀に於ける小麦の主要生産地がマニトバ州 (Manitoba) サスカチエワン州 (Saskatchewan) アルバータ (Alber-

ta) の三州なることは既に一言せる所なるも其の他に尙著名なるもの無しとしない。由來加奈陀は東西三千哩、南北二千哩、而も山嶽の之れを遮斷するものなく、唯北半が氣候寒冷なる爲め未だこれを使用するに途なきに過ぎざるが故に、小麦耕作地が南半全土に散在し夫々著名の産地をなせるは理の當然である。今小麦栽培上最も重大なる關係を有する氣温降雨量を標準として説明を加へ其の分布状態並びに作付段別生産高に論及することとする。







前圖に示せるが如く加奈陀の大部分は冬期間平均温度零度以下を示し、只僅かに西部太平洋沿岸地方が北太平洋暖流の影響を受け、又東部大西洋沿岸地方がメキシコ灣流によつて温暖なるに過ぎない。従つて小麦栽培の適否より論ずれば先づ一部分を除いては大體に於て冬時小麦には不適當であつて寒冷の候の過ぎるを待つて栽培する春時小麦に適合するものとせねばならぬ。是前記の冬期間も稍々温暖なる Quebec, Ontario, British Columbia 地方に多少冬時小麦が栽培せられるゝに過ぎずして、他の小麦大生産州が殆き全部春時小麦栽培地たる所以である。又降雨量を標準とする時加奈陀の中部を占むる Manitoba, Saskatchewan, Alberta が春時小麦に適合することを知らり得らるゝであろう。即ち此等の地方は冬期間の雨量極めて僅少であつて、就中 Saskatchewan, Alberta の如きは年平均して五吋以下であり稍々雨量多しとさるゝ Manitoba に於ては十吋を超過することは稀有である。故に小麦の性情として發芽當時相當多量の水分を要する點に満足を與へることが出来ない。然るに一度春陽の期に達すれば雨量は俄然多きを加へ年平均十吋以上二十吋に及ぶ。之れ小麦の發芽の最適の湿度と云ひ得べく同地方が春時小麦に適することは蓋之當然と言はねばならぬ。宜なる哉之れを實際に徴するも前記三州俗に "Three Prairie Provinces" と呼ばるゝものより全加奈陀小麦産額の約九十%を産出し而も殆き全部春時小麦である。

反之東部海岸地方の如きは冬期も氣候稍々温暖なること前述の通りなるが故に、冬時小麦に適すべき一要素は具備するも降雨量に着眼すれば必ずしも最適の地とすることは出来ない。即ち晩秋より翌春に亘つての雨量は年平均として二十吋以内にして小麦の發芽には相當有利なるにもせよ、春陽の期に達すれば雨量は俄然三十吋以上



を示すが爲めに所謂小麦の成長期としては不適當とせねばならぬ。是即ち東部地方が冬蒔小麦を栽培しつゝあるも、尙其の産出額が少量に過ぎざる一因であろう。

更に既に合衆國の項に於て述べたるが如く、加奈陀に於ても最初に開發せられたる東部海岸地方は假令小麦栽培に適合するにもせよ、寧ろ更に高價なるべき他種農作物の植付に使用すること經濟上有利なる關係よりして、漸次小麦の栽培は西方諸州に局限せられんとする現象あるは同地方の冬蒔小麦不振の第二因である。以上で氣温雨量の關係が加奈陀の小麦栽培に如何なる影響を及ぼすかの大略は知り得たと思ふが、更に參考の爲め具體的に加奈陀政府の發表せる一九二二年度並びに一八八八年乃至一九〇七年に至る平均溫度、降雨量其の他の統計表を示せば次の如くである。

地名	一九二三年				一八八八—一九〇七年	
	平均溫度	最高溫度	最低溫度	平均溫度	雨量	合計雨量
○ブリテイッシュ、コロンビア州	(。ハ零下)					
ウイクトリア	四、八	五、四	二、〇	八、六	五〇、〇	五〇、三
ヴァンクーヴァー	三、四	三、五	一〇、〇	八、〇	五〇、一	四九、一
カムループス	三、〇	六、四	七、〇	一〇、〇	四七、九	四七、七
○アルバータ州						
カルゴリー	二、三	六、一	三、九	九、〇	四〇、九	三七、四
エドモントン	一、九	六、五	三、〇	八、六	三八、七	三六、七
○サスカチエワン州						
バットルフオード	一、四	六、三	三、〇	八、八	三七、九	三五、四
プリンスアルバート	一、〇	六、九	四、〇	八、八	三五、三	三三、一
クアペーニ	一、三	六、九	三、〇	九、〇	三六、八	三五、五
○マニトバ州						
ミネドサ	九、五	六、四	〇、七	八、八	三三、七	三三、一
ウイニペツグ	三、二	六、七	一、三	九、六	三三、八	三三、九
○オンタリオ州						
ポートアーサー	一、六	六、三	三、〇	九、五	三六、六	三五、七
ホワイトトリヴァー	八、六	五、三	〇、五	九、〇	三三、二	三三、三
バリーサウンド	一、九	六、八	〇、七	九、二	四〇、二	四〇、三
ササンプトン	二、五	六、三	〇、四	八、七	四一、七	四三、八
トロント	二、六	七、七	一、二	九、六	四三、七	四三、五



キングストン	二四九	六五七	一三〇	九二〇	四二四	四三七	二七	三〇	二七	二一〇	二二	三二
ペムブローク	一九三	六五一	六〇	九三〇	四〇八	四〇五	一九三	一〇〇	〇	二九	二	八二
オツタワ	二〇〇	六六四	三二〇	九五〇	四一七	四三〇	二五	一〇	〇	二五	二	三
○クエベック州												
モントリアル	三三〇	六六〇	三三〇	九二〇	四二八	四二二	三〇	五	一九〇	四二	二九	三
クエベック	一七八	六三二	二八〇	八九〇	三八八	三八七	三三	五	一四〇	四四	九	〇
シャープブローク	四〇三	六三一	二四〇	九〇〇	四〇四	四〇二	三五	八	一〇〇	四五	八	二
ファザイポイント	一四八	三三一	二九〇	七八〇	三三九	三五	一	三〇	八	七	〇	三

○ニューブランズウィック州

シャザム	一七八	六〇二	三五〇	九五〇	三七六	四〇三	三三	一	七七	〇	三〇	八
フレデリクシオン	一九八	六一三	三三〇	九三〇	三九四	四〇五	二六	五	一〇〇	〇	七	五
セントジョン	三三三	五七五	一五〇	八五〇	三九七	四一六	三三	二	三〇	〇	四	八
○ノヴァスコチア州												
ヤーマウス	二九二	五六五	一〇	七三〇	四三二	四〇二	三三	二	八	〇	四	六
ハリファックス	二六五	六〇八	五〇	八七〇	四三三	四四四	四二	七	一〇	〇	五	八

シドニー	二四八	五八四	一五〇	八三〇	四〇三	四三三	四〇	八	三三	〇	五	九
○プリンスエドワードアイランド州												
チャールロット	三三〇	六〇〇	三三〇	八七〇	四二二	四二二	三三	三	七	〇	四	五

此くて概略ながら加奈陀の如何なる地方に小麦が栽培せらるゝやを知り得ると思ふ。次に更に一步を進めて作付段別数の變遷、小麦産出額を歴史的に研究し、併せて現在の状態に説き及ぶこととする。小麦が初めて加奈陀に移植せられたのは十八世紀の末葉とせられてゐるが、確實なる記録は之れを求め難い。而して移植の地はオンタリオ附近なるべく、當時の産出量は極めて僅少のものであり、此に特筆する程のものではない。降つて一八二八年に至つて初めて二百萬ブシエルを收穫することを得た。其の後累年の小麦産出高に就ては確かなる文献はないが、一八五〇年代頃よりは假令小量づつなりとも歐洲、就中英本國へ向けオンタリオ湖を通じて軟質赤小麦が輸出せられるゝに至つたことは明らかなことと稱せられてゐる。

乍然當時にあつては先きにも述べたるが如く、小麦栽培は専ら東部地方の氣候溫暖なる地方に限られ冬時小麦が主要なるものであつて、春時小麦に適合せるマニトバ州、サスカチエワン州、アルバータ州地方の如きは小麦栽培地としては殆ど夢想だも許されぬものとせられてゐたのである。其の理由の一としては加奈陀が未だ勞働力資本力共に極めて貧弱なりしにも依ることは勿論であるが、他にも重要な原因なしとしない。即ち加奈陀の開発が佛人の努力によつて着手せられたることは言ふ迄もないが、十八世紀の末期に至るまでは未だ開拓の時日



を經過すること僅少であつた爲めにオンタリオ以西にまで手を出すことは殆んき全く不可能であつたのである。他面當時加奈陀には英國政府保護の下に加奈陀開發に雄飛せんとしたハドソン灣商會 (Hudson Bay Company) は一六七〇年、チャールス二世の特許を受けてオンタリオ以西全州を掌中に握つてゐた。而して該ハドソン灣商會は自己の目前の利益を測るにのみ努めて他を顧みる暇を有しなかつた。其の一例を擧ぐれば、若し加奈陀西部地方が開發せられ、農民の移住すること多きを加ふれば自己商會の繁盛は他に奪はるゝ懼あつたが爲めに、事更に苦肉の策を弄して加奈陀西部は全然不毛の地であつて農業勃興の如きは望み得ないと宣傳したるが如きである。當時加奈陀西部の事情に精通すと一般に認められてゐたハドソン灣商會の宣傳は、見事に其の効を奏して西部地方の開墾なることは全然世人の注意を惹くに至らずして時日を経過した。此れ西部諸州が未開のまゝ永年放置せられて顧みられなかつた原因の一とせねばならぬと信ずる。

然るに其の後一七六三年英佛戰爭の結果、巴里條約によつて加奈陀全土が完全に英領に加へられ漸次各種の領土會社がオンタリオ州以西の開発に注目するに至つたが尙遠くマニトバ州、サスカチエワン州、アルバータ州には及ぶべくもない状態を持續して十九世紀の中葉に至つたのである。顧るに當時隣國たる合衆國に於てさへ未だ小麦栽培及び其の他の農業は全土に普及せず強ひて加奈陀の開墾を痛切に感じなかつたことも其の理由たるを失はないであらう。此の時に當つて、一八〇七年マニトバ州が新に區劃せられ、以後順次サスカチエワン、アルバータ等が加奈陀聯邦に加入するに及んで、漸く爲政者の注意を集中するに至つた。又従つて殖民の奨励、農業の

振興も大いに叫ばれて小麦生産の如きも逐次隆昌の域に達し一九〇〇年には遂に前記三州の小麦生産高は二、三、四、五、六、八、五、九、ブッシェルを算し、英國小麦市場に於てマニトバ小麦 (Manitoba wheat) の名を知らるゝに至つたものである。然し未だウイニペックに居住する者と雖も其の西部地方が全く荒廢の地であつて農耕には不適當と固く信じてゐる者もあり、又其の小麦産額も東部地方の産麥高に比すれば約二分の一にも達しなかつたにもせよ漸次西部、北西部地方の開発が進捗するに従つて、加奈陀の小麦生産高は俄かに大激増を示し一九〇一年には全産額九一、四二四、〇〇〇ブッシェルとなり、内約一五、〇〇〇、〇〇〇ブッシェルは海外輸出に當てられ、一九〇三年には終に全産額一億ブッシェルを突破し、一九〇五年には約一億千五百萬ブッシェルの生産となり、海外輸出も約五千萬ブッシェルに激増し大いに將來を囑望せらるゝに至つた。

今二三の實例を以つて當時の加奈陀小麦栽培の進歩の跡を示すに、時は一九〇五年である、米國の投資者の若干名が親しく加奈陀西部地方を視察し、從來稱へられてゐた種々の流説が根底より誤まれるを觀破し、當時其の顧問たりし加奈陀實業家の大反對ありしにも拘らず、二百萬畝の土地を購入し直ちに其の一部を耕作して小麦を栽培し、多きは一畝に付き三十ブッシェル少くとも二十ブッシェルを擧げ得たるの好成績を得たのである。同様なる投資がアルバータの南部に於ても一資本家によつて企てられ、初め四千畝の土地を一畝に付て五弗の割にて購入し、一九〇六年晩秋に先づ内百七十畝を耕作して冬蒔小麦を播種せるに、一九〇七年收穫の結果一畝當り七弗の利益を擧げ得るのである。爲めに一瞬にして地價は一畝に就き十五弗にまで暴騰した程であつた。此の如き



は僅かに其の一例に過ぎぬが此くて、加奈陀西北部地方の眞價が認めらるゝや陸續として合衆國より、又は東部加奈陀より移住するものを生じ、就中北米合衆國に於けるイリノイス州、イオワ州、ミネソタ州、ダコタ州等農民が既に小麦栽培に對する幾多の經驗と必要なる資本とを有するものが、其の郷里を去つて此の地に移住せるは同地方開發の一大福音なりと言はざるを得ない。若し合衆國人の移住なかりせば加奈陀西北部の開發は少なくとも二十有餘年は遅れたであらうと米國の或る著名なる學者が言つてゐるが誠に至言と言はねばならぬ。而して此の事實は合衆國のイオワ州、ミネソタ州に於ては人口が大いに減退せるによつても知り得るべきである。此くも同地が多數の移民を吸収し得たことに就ては此に見逃し難い一理由がある。夫は加奈陀の地價が當時極めて低廉なりしことと小麦市場が相當完備せるとによる。即ち合衆國に於ては一畝の地價少なくとも四〇弗より一〇〇弗に及び到底農民が自由に之れを購入すること困難なるに反して加奈陀に於ては當時最高にても一五弗を出すことなく安きは一弗乃至二弗なりしを見れば右の如く移民の多數に上りしことも亦自明のことと云ひ得らるべく、更に當時既に小麦が従前に比し相當高價を維持しつゝありしが故に、農民の利益も益々多きを加へ、且つ市場としてウイニベック (Winnipeg) を有するが故に合衆國西部の開發當時の如く地方の穀物商の爲めに壓迫せられて利益の大部を之等商人に奪はるゝが如きことなかりしによる。即ち合衆國西部地方に於て開發當時五年を要せしことは當加奈陀に於て僅に一ヶ年を要するのみなりしと稱せらるゝを見ても亦當時の開發の如何に迅速なりしを知り得らるゝ所である。爾來スリー、ブレイリー、プロヴインセス (Three Prairie provinces) が小麦栽培地

として最適當なることが天下に證明せられ、且又其の生産小麦も製粉用として極めて重寶なることが知らるゝに及んで益々斯業の進歩發達を促し、又同時に從來缺乏を告げつゝあつた資本金、勞働力の補給の如きも相々有利となつて一九〇九年には全麥生産高は一億五千萬ブッシェルの多きに達し一九一一年には二億超過、一九一五年には四億超過、爾來年の豊凶によつて増減必ずしも一定せざるにもせよ寧ろ増加の趨勢を辿つたものと見得らるべく、只一九一八、一九一九の兩年に二億台を割りしのみであつて一九二四年度の如き大凶作に際しても能く二億六千萬ブッシェルの産出高を示してゐるのである。今表を以て全加奈陀小麦生産高及び Three Prairie Provinces 生産高を加奈陀政府統計局並びに Northwest Grain Dealers' Association の發表せるものを列記すれば次の如くである。

年 度	全加奈陀小麦生産高	スリーブレイリープロヴ インセス小麦生産高
一九〇一年度	九一、四二四、〇〇〇	六三、三〇〇、〇〇〇
一九〇二年度	一〇〇、〇五一、〇〇〇	六五、〇〇〇、〇〇〇
一九〇三年度	八四、五八三、〇〇〇	一五二、〇〇〇、〇〇〇
一九〇四年度	七四、八三四、〇〇〇	五七、〇〇〇、〇〇〇
一九〇五年度	一一三、〇二二、〇〇〇	八六、三〇〇、〇〇〇
一九〇六年度	一三一、六一四、〇〇〇	九四、五〇〇、〇〇〇



一九〇七年度		ブツシエル	七〇、六五〇、〇〇〇	ブツシエル
一九〇八年度	一一二、四三四、〇〇〇	〃	九五、二八〇、〇〇〇	〃
一九〇九年度	一六六、七四四、〇〇〇	〃	一一九、七五〇、〇〇〇	〃
一九一〇年度	一四九、九八九、〇〇〇	〃	一一三、二五〇、〇〇〇	〃
一九一一年度	二一五、九一八、〇〇〇	〃	一七七、一〇〇、〇〇〇	〃
一九一二年度	一九九、二三六、〇〇〇	〃	一七六、八六〇、〇〇〇	〃
一九一三年度	二〇六、五七五、〇〇〇	〃	一八一、九〇〇、〇〇〇	〃
一九一四年度	一五八、二二八、〇〇〇	〃	一四〇、〇三一、〇〇〇	〃
一九一五年度	四二六、七四六、〇〇〇	〃	三〇七、二三〇、一九一	〃
一九一六年度	二六二、七八一、〇〇〇	〃	一六〇、〇一五、〇〇〇	〃
一九一七年度	二三三、七四二、〇〇〇	〃	二〇五、六二〇、〇〇〇	〃
一九一八年度	一八九、三〇一、〇〇〇	〃	一五九、九一八、〇〇〇	〃
一九一九年度	一九三、二六〇、〇〇〇	〃	一六〇、七六一、〇〇〇	〃
一九二〇年度	二六三、一八九、〇〇〇	〃	一三〇、二六〇、〇〇〇	〃
一九二一年度	三〇〇、八五八、〇〇〇	〃	二五一、六五五、〇〇〇	〃

右に示せるが如き小麦生産高を得る爲めに使用せらるゝ作付段別数は大體に於て年々増加の傾向を示してゐることと言ふ迄もないが殊に一九一〇年代よりは其の増加率甚だ顯著なるものがあると言ふことが出来る。其の詳細を示せば、

一九二二年度	三九九、七八六、〇〇〇	〃	三八五、〇四三、〇〇〇	〃
一九二三年度	四七四、一九九、〇〇〇	〃	四二八、六七五、〇〇〇	〃
一九二四年度	二六二、〇九七、〇〇〇	〃	一三五、六九四、〇〇〇	〃
一九一一年度	一一、二〇一、〇〇〇	エーカー		
一九一二年度	一〇、九九七、〇〇〇	〃		
一九一三年度	一一、〇一五、〇〇〇	〃		
一九一四年度	一〇、二九四、〇〇〇	〃		
一九一五年度	一五、一〇九、〇〇〇	〃		
一九一六年度	一五、三七〇、〇〇〇	〃		
一九一七年度	一四、七五六、〇〇〇	〃		
一九一八年度	一七、三五四、〇〇〇	〃		



一九一九年度	一九、一二六、〇〇〇	エーカー
一九二〇年度	一八、二三二、〇〇〇	〃
一九二一年度	一三、二六一、〇〇〇	〃
一九二二年度	一二、四二三、〇〇〇	〃
一九二三年度	一二、六七一、〇〇〇	〃
一九二四年度	一二、〇五六、〇〇〇	〃

であつて最近に於ては先づ二千萬畝を降るが如きことは萬々ない状態であり却つて幾分づつなりとも増加すべきことは以下論ずる所によつても明らかとせねばならぬ。就中スリー、ブレイリー、プロヴィンセス (Three prairie provinces) の作付反別の増大は稍々驚くに足るものがあると思ふ。(第二項参照)

第二項 スリー、ブレイリー、プロヴィンセス (Three prairie provinces)

前項にも示せるが如く加奈陀に於ける全小麦生産高とスリー、ブレイリー、プロヴィンセスの小麦生産高とを對比することのみによるも、能く小麦栽培上スリー、ブレイリー、プロヴィンセスが如何なる地位を占めつゝあるやを知るに十分だと思ふ。顧るに十九世紀の末葉に當つて加奈陀が漸く其の生産せる小麦に餘剰を來し、此れを海外に輸出するに至りし當時は加奈陀の小麦地帯がオンタリオ (Ontario) を中心とする一帯の地であり、冬時小麦たりしことに就ては既に論及せる所に屬する。従つて西部諸州が開發せらるゝこと今日の如からざりし時代にオン

タリオ (Ontario) が加奈陀小麦に就て牛耳を握りしことは争はれざる事實であつて、現在に於ても尙オンタリオは前記のスリー、ブレイリー、プロヴィンセスを除外すれば加奈陀第一の麥産州に當り、其の作付反別の如きも八十萬畝以上に達し、他のクエベック (Quebec) フリタインシ、コロンビヤ (British Columbia) ニュー、ブランズウィック (New Brunswick) ノヴァ、スコチア (Nova Scotia) プリンス、エドワード、アイランド (Prince Edward Island) の小麦作付反別全部を合算するも、尙これに及ばざるものあるは流石に昔日の儼なしとしない。

然しながらオンタリオ州 (Ontario) の偉を以てしても現在急激の進歩を遂げて尙餘裕綽々たるスリー、ブレイリー、プロヴィンセスに比すれば全く雲泥の差ありと言ひ得らるべく、これを全然度外視するも何等の痛痒を感じない程である。即ち作付反別を標準とすればオンタリオ州 (Ontario) の如きは全加奈陀小麦作付反別の僅かに三%に過ぎない。従つて現今加奈陀小麦と稱すれば皆期せずしてスリー、ブレイリー、プロヴィンセス (Three Prairie Provinces) 即ちマニトバ (Manitoba) サスカチエワン (Saskatchewan) アルバータ (Alberta) 三州のものと考えらるゝ程である。今念の爲めに最近に於ける加奈陀全州の小麦作付反別数を州別に掲げスリー、ブレイリー、プロヴィンセスの地位を示せば、

(加奈陀統計局發表)

州名	一九二三年度	一九二四年度
プリンス、エドワード、アイランド (春時)	三〇、七五六 畝	二八、六四二 畝



ノヴァ、スコチイア	(春蒔)	一二、七三七	九、二三六
ニユー、フランスウィック	(春蒔)	一四、四六〇	一一、六一六
クエベック	(春蒔)	七四、四七八	六九、〇〇〇
オンタリオ	(春蒔)	一一一、六〇一	一〇一、四〇一
	(冬蒔)	七二七、三〇七	七二二、三六六
マニトバ	(春蒔)	二、九一五、九一五	二、四五九、四〇八
サスカチエワン	(春蒔)	一二、七九一、〇〇〇	一三、〇三三、〇〇〇
アルバータ	(春蒔)	五、〇八八、三八三	五、五三七、三三四
	(冬蒔)	八四、二六〇	三六、四七九
ブリテイッシュ、コロンビヤ	(春蒔)	三一、二一〇	三一、九〇一
	(冬蒔)	一四、一三九	一五、三二七

先きに加奈陀に於ける小麦栽培は今やスリー、プレーリー、プロヴィンセス (Three Prairie Provinces) のみに着眼するも必ずしも差支ないと言つたが右の統計表によつても如實に證明せられたと思ふ。扱て本項に於て前記三州の小麦植付状態を論述するに當つて、此等三州が果して小麦生産上如何なる地位を占めつゝあるやを大略知る必要がある。

顧るに近來 Saskatchewan が他の二州 Manitoba, Alberta に比して斷然優越の地位にあることは衆目の皆等しく認むる所であつて此に異議を挟む餘地はない。只 Manitoba, Alberta に就ては稍々事情の異なるものあるを

認めざるを得ない。即ち二十世紀の初期加奈陀の西方開發運動が其の緒についた時代、前記三州中最も東部の既に開發された地方に近いマニトバ州 (Manitoba) が其の天然の地の利と、其他の好條件の爲めに最初に小麦栽培地として名聲を天下に轟かし其の生産さるゝ小麦は所謂マニトバ小麦 (Manitoba Wheat) として製粉上に重要視せられ、今尙小麦取引界に重きを爲すは一般に認められてゐる事實である。以來時日の経過と共に加奈陀の西部開發運動は彼の合衆國に於ける Westward movement と同様に逐次異常なる大發展を遂げ、マニトバ州に隣接するサスカチエワン州 (Saskatchewan) は言ふ迄もなく更に其の西部なるアルバータ州 (Alb. a.)、ブリテイッシュ、コロンビヤ (British Columbia) 州に迄及ぶに至つた。

於此加奈陀の新開地に於ける小麦栽培の中樞點も必然移動を來してマニトバ州 (Manitoba) よりサスカチエワン州 (Saskatchewan) に移り、今や嘗つて前者が小麦生産の一大中心地としての令名は其の西隣州たるサスカチエワン州並びにアルバータ州に壓倒されんとする傾向を生じたのである。此の如き小麦栽培地の移動に重大にして密接不可離の關係に立つ經濟的並びに其他の自然的條件に就ては既に屢々繰返した所と略々同様であるから此には重複するを避けることゝするが只最近右三州が幾何の小麦生産高を擧げつゝあるや、又其の變遷の経路は如何なるものなるやを知らんが爲めに、加奈陀政府統計局の發表せる統計表を示し次いで各州の細論に入ることゝする。

最近に於ける三州の小麦生産高表

(單位ブツシエル)

年 度	マニトバ州	サスカチエワン州	アルバータ州
一九一五年度	九六、六六三、〇〇〇	一一四、七九四、〇〇〇	四三、五七五、〇〇〇



一九一六年度	三〇、四三九、〇〇〇	一一一、八六四、〇〇〇	四一、五〇〇、〇〇〇
一九一七年度	四二、六八九、〇〇〇	一一七、八九三、〇〇〇	五二、九九二、〇〇〇
一九一八年度	四八、一四二、〇〇〇	九二、四九二、〇〇〇	二四、七五一、〇〇〇
一九一九年度	四二、五〇九、〇〇〇	八八、二二一、〇〇〇	三七、一〇六、〇〇〇
一九二〇年度	三七、五四二、〇〇〇	一一三、一三五、〇〇〇	八三、四六一、〇〇〇
一九二一年度	三九、〇五四、〇〇〇	一八八、〇〇〇、〇〇〇	五三、〇四四、〇〇〇
一九二二年度	六四、〇七四、〇〇〇	二四〇、四八〇、〇〇〇	六一、八八二、〇〇〇
一九二三年度	三二、八〇四、〇〇〇	二五二、六二二、〇〇〇	一六六、八三四、〇〇〇
一九二四年度	四一、四六四、〇〇〇	一三二、九一八、〇〇〇	六一、三二二、〇〇〇

前記加奈陀三州に於ける小麦栽培地はマニトバ州 (Manitoba) のウイニペック市 (Winnipeg) より北米合衆國の北部たるノース、ダコタ州 (North Dakota)、モンタナ州 (Montana)、と境を接して西方約千哩、北方三百哩に亘る一圓の地帯を限度として各所に散在するものに當る。即ちマニトバ州 (Manitoba) の南西部地方、サスカチエワン州 (Saskatchewan)、アルバータ州 (Alberta) の南半は此に該當する。但し現在此等の小麦栽培地は俗に Canadian northwest の小麦地帯と稱せらるゝものであるが、此の Canadian northwest に類するものは後に説明するが如く地理上更に廣大なる地域を指すものと言ふことが出来る。一例を示せばサスカチエワン

州の如きは北緯五十五度の附近に於ても優に相當の小麦栽培行はれ其の生産を唯一の原料とする製粉工場の如きも數多設立せらるゝ程である。従つて將來 Canadian Northwest の小麦地帯は現在に指稱せらるゝ地域を遙かに超越して、更に北方乃至西方に擴大せらるべきは今より豫測するに困難ではない。

三州中最も東部に偏せるマニトバ州 (Manitoba) に於ては其の主要小麦生産地は其の南西部地方とする。而してウイニペック湖に北流するレッド、リヴァー (Red River) 沿岸地方は所謂レッド、リヴァー谿谷 (Red River valley) を形成し東西、夫々二十哩乃至三十哩の幅を有して坦々たる平原をなし、農耕には最適の地の如く見ゆるも實は然らずして此の地を以て小麦栽培地と見るは誤りで、現在にても只牧草地として著名なるに過ぎない。勿論レッド、リヴァー (Red River) の上流地方に當り、合衆國の北ダコタ州、ミネソタ州の西部に接して幾分高台をなせる部分には相當農耕も行はれ、稍々多量の小麦栽培が行はれ世にレッド、リヴァー小麦 (Red River wheat) と稱せらるるものは即ち之れに當るが、實際上レッド、リヴァーの小麦は大部分同河の上流地方を占むる合衆國土より生産せられるもので、隣接する加奈陀よりは極めて小部分を産するに過ぎない。此のレッド、リヴァーより西方に進むこと約三十哩の地點に及んで、土地は漸く隆起して丘陵をなし、漸次ロッキーマウンテン山系に連なるものであるが、此の丘陵地方こそ小麦栽培の一大中心をなし、世に所謂マニトバ小麦 (Manitoba Wheat) を生産し、他のアッシニボイネ河 (Assiniboine River) が東流してレッド、リヴァーの下流に注ぐ附近と共に、小麦生産地としては著名なるものと言はねばならぬ。



此の著名なる小麦地帯は進んで隣州たるサスカチエワン (Saskatchewan) に浸入し、其の南東隅より北西方に方向を取り、約四十五度の角度を以て進みサスカトーン市 (Saskatoon) バットルフォード市 (Battleford) を中心とするサスカチエワン谷 (Saskatchewan Valley) を横断しサスカチエワン河 (Saskatchewan River) に面するプリンス・アルバート (Prince Albert) 地方に出で、更に北方に及び迂回してアルバータ州 (Saskatchewan) に面する。

該小麦地帯はアルバータ州 (Albert) のエドモンド市 (Edmond) 地方に至るも未だ切斷せられず、同地より廻轉して南下し、同州の南西部に進み終に冬時小麦地帯を形成し、合衆國のモンタナ州の小麦地帯と合する。而して此の半圓形をなす小麦地帯に包圍せらるゝサスカチエワン州 (Saskatchewan) の南西隅及びアルバータの南東部は、所謂乾燥地帯をなし、數年前までは全然農耕に不適當として顧みられなかつたのである。然るに今や漸く灌溉の施設の行はるゝあつて事實上乾燥地の範圍は幾分縮小せられ小麦栽培の如きも行はるゝに至つた。今後同地が小麦栽培地として如何なる地位を占むるかは現在全く未知數の域を脱しないが兎に角等閑に附し得ざるものとなりつゝある。右に述べた廣大なる三州の小麦地帯は殆ど全部春時小麦の栽培地であり、冬時小麦地としては僅かにアルバータ州南部の一部分に過ぎない。而して此の春時小麦栽培地の面積は現今實に二千萬畝にも達し、加奈陀全國の小麦栽培地積の九割以上にも達してゐることは既に前述せる通りである。顧るに前記三州が小麦栽培の好適地なることを認めらるゝに至つてより歳星を経たること、未だ僅かに三十年に満たざるに其の小麦生産高が優に四億ブッシェルを突破したるが如きは全く世界に其の類例なきことに屬する。而して此の如き好成绩を得たる所以のものは多々あるべけれども、其の最も重要にして看過し得ざることは概して同地が小麦栽培に最も適當せる氣候と其の他の有利なる自然的條件を具有せることである。若し氣温、降雨量、土壤の各要素一となりとも小麦栽培に適せざるものありとせば、加奈陀は小麦界に今日の重きをなすこと全く不可能なりしは此に論ずる迄もない。然るに該三州は幸にして農耕に適し、就中小麦栽培に最適なりしことは、獨り加奈陀のみならず世界の小麦供給上に一大光明を與へたものであり、然も今後共に同地方に尙小麦栽培地に使用さるべき未耕地が一億數千萬畝あるの事實よりすれば、當三州が今後更に一段と小麦栽培上に大進展をなすべきことは殆ど既定の事實とも見ることが出来る。殊に次項にも論ずるが如く同三州が新開地なるにも拘らず、收穫率極めて高きことは益々同地前途の有望なるを暗示するものであらう。

### 第三項 播種並びに收穫

加奈陀小麦の大半が春時小麦たることに就ては前諸項の説明により明らかにされた。従つて本項に於ては専ら春時小麦の播種、收穫を説くを主とし、冬時小麦に就ては一言するを以て足りるであらう。由來合衆國其の他の諸國に於て晩秋乃至初冬に播種せらるゝものは概ね冬時小麦と稱するを常とするも加奈陀に於ては此の點趣を異にし秋時小麦 (Fall Wheat) と呼ぶ。然し其の實質に於ては全然前者と同一であつて特に秋時小麦の異名を用ふる必要はないと思ふ。故に以下秋時小麦も冬時小麦と見做して説明を加ふることとする。

加奈陀にあつては冬時小麦の播種の時期は必ずしも一樣ではない。所を異にするに依つて遅速あるべく、又略



同一個所にあつても氣候の順逆によつて差異を來す。乍併大體に於て九月下旬より十月に亘り遅くも十一月下旬迄には全部の播種を終了する。若し此の時期を經過する時は獨り降雪、降雪の稍々甚だしきものあるのみならず、土壤凍結して播種するも發芽に必要な溫度並びに水分を缺くが故に、先づ播種には不適當としなければならぬ。即ち前章でも既に述べたるが如く、降雪甚だしく寒氣凛烈の場合は土壤は霜柱と共に數寸盛り上り、地中の種子を外部に露出せしめて其の發芽を不能ならしめたる例は稀ならざるが故に、冬蒔小麦の播種の時期に就ては栽培者の等しく苦心する所である。彼の播種後地面に藁を蔽ふが如きは主として此の霜害を豫防せんとするに外ならない。而して一度發芽せるものは激烈なる降雪のない限り能く此に對抗し、春陽の期を待つて成長するを常とするが此の冬期間の霜雪の害は相當大なるものがあると言はねばならぬ。即ち次の如し。

冬蒔小麦霜雪害程度表

年 度	オンタリオ州	アルバータ州	ブリテイッシュコロンビヤ州	加奈陀全體
一九一四年度	一九%		一六%	一八%
一九一五年度	七%		六%	七%
一九一六年度	六%		五%	五%
一九一七年度	二五%		一五%	二四%
一九一八年度	五六%		一〇%	五一%

一九一九年度	五%	七%	五%
一九二〇年度	四%	一%	四%
一九二一年度	一一%	五%	一〇%
一九二二年度	一〇%	一五%	一〇%
一九二三年度	六%	一三%	七%
一九二四年度	四%	一〇%	四%
平均	一五%	九%	一四%

其の最近十ヶ年の平均霜雪害は一四%に當つて北米合衆國の三、八%に比すれば遙かに上位にあるが、其の地理的關係よりして止むを得ないことである。殊に一九一七、一九一八の兩年に加奈陀の冬蒔小麦が成績極めて不良なりし所以のものは、一に懸つて霜害の甚大なりしによるものであり夫々二割四分、五割二分の被害を蒙つてゐる。而も此の霜害は同地の春蒔小麦地に往々襲來する收穫期のものとは異つて其の大半は晩秋より冬期を通じてのものである。換言すれば此の兩年共に春期以後は左程天候も不順にあらざりしにも拘らず、冬期の霜害は痛く收穫高に影響して大減少を示せること既に掲げたる表を参照するも明らかであつて、冬蒔小麦に對して冬期間の霜害の如何に恐るべきやを示して餘りあるものと思ふ。勿論獨り冬期間のみならず其の他成長期、發穗期、開花期、乳種期、結實期に於ても共に天候の如何とは密接不可離の關係にはあるが、小麦の如く比較的強靱なる



植物は發芽當時さへ無難に經過すれば、其の後に於ける多少の天候の不順には能く對抗し得らるゝものである。要するに加奈陀冬時小麦の霜害は大體冬期間に限るとも言ふことが出来る。此くて七月下旬に至れば結實期も經過して合衆國のミシガン州、ウイスコンシン州等より少しく遅れて收穫に着手せらるゝことゝなるが其の最も繁忙を極むるは通例八月上旬とする。此の場合、若し收穫に先だつて強烈なる降霜、降雨あれば一般小麦の收穫に於けると同様一穴損害を受けねばならぬのではあるが例年の經驗によれば七月下旬より八月に亘つて往々北米合衆國並びに加奈陀の春時小麦地帯を襲ふて大害を與ふるが如き降霜は既に述べたるが如く同冬時小麦地帯には襲來せざるが故に、未だ其の爲めに大激減をなせる例には乏しい。

斯の如くして同冬時小麦地帯で收穫せらるゝ小麦の生産高は大體二千萬ブツシエル乃至三千万ブツシエルであつて品質は必ずしも不良ではないが、軟質白小麦に屬する關係から製粉上左程重要と言ふことは出来ない。彼の春時小麦たるマニトバ小麦等に遠く及ばないものあるは寧ろ當然であらう。最近に於てこそ加奈陀の小麦と呼ばば直ちに春時小麦を聯想するが、其の昔には右述べた冬時白小麦が唯一の製粉原料であり、歐洲へも相當に輸出せられ重要缺くべからざるものとされてゐたことは事實である。然るに近來製粉工程乃至使用機械が大いに改善せられ、加之加奈陀に於ては其の西方開發運動が急激に進展するに及んで今や冬時小麦は殆ど其の存在を忘れられんとしてゐることは止むなきことゝせねばならない。

次に加奈陀小麦の九割以上を占むる春時小麦は例年の經驗に據れば主として四月中旬より五月中旬迄の間に播種を行ふものである。時に或ひは氣候の關係よりして著しく遅るゝこと一九二四年度の如きことあるも其の結果

は極めて不良と言はなければならない。従つて若し右に示せるが如き播種適當期を逸するが如き場合あれば、收穫期も之れに準して當然遅るゝことゝなり彼の八月の霜害を受くる懼甚だ大と言はねばならぬ。即ち春時小麦は前述の冬時小麦の如く七月下旬より八月上旬の間に收穫終了するものとは、大いに趣を異にして常に其の刈込は八月より九月に亘るが故に其の早霜を受くべき蓋然率は後者に比し遙かに大と言はざるを得ない。而して其の實例も亦此に枚擧するの遑あらざる程である。故に春時小麦の栽培者は此の收穫期の危険を豫め慮り、春陽の期到れば出來得る限り早く播種に着手し、收穫期を早からしめんと努むる。若し不幸にして四月、五月の氣候にして寒冷なるが爲め到底播種に適せざるが如き場合には、必ずや廣大の耕地は放棄するの餘儀なきに至るべく又假令播種を敢行するも好結果を期待し得ざることゝは、既に北米合衆國の項に詳説せるが如くであり、其の損害の莫大なること此に述べる迄もないであらう。右の如く播種の時期如何が其の收穫高と重大なる關係あるものとせば加奈陀の春時小麦地帯に就て年度割に果して如何なる時期に播種が行はるゝやを加奈陀政府統計局の發表せるものに従つて左に列記するも又無益の事ではないと思ふ。而し同表は四月中旬に播種せられたる割合であつて、殘餘は五月乃至六月上旬迄に播種さるゝ割合である。

四月中に播種を終了せる割合(州別、年度別表)

年 度	クエベック州	オンタリオ州	マニトバ州	サスカチワン州	エワン州	アルバータ州	ブリテイッシュコロンビヤ州	平均
一九一四年度	五%	二四%	五七%	七九%	八八%	〇%	四八%	二一九



一九一五年度	五五%	七三%	九三%	九四%	九一%	八九%	九四%
一九一六年度	二%	四%	二六%	三六%	八〇%	六六%	二七%
一九一七年度	一%	二八%	一三%	五%	二七%	二〇%	一三%
一九一八年度	一〇%	六八%	九四%	八五%	九二%	六六%	六〇%
一九一九年度	〇%	二九%	四〇%	六二%	七七%	四五%	六〇%
一九二〇年度	一%	二三%	六%	四%	二%	二二%	一一%
一九二一年度	一九%	五二%	三四%	二一%	五八%	六九%	三二%
一九二二年度	二〇%	三三%	五〇%	一七%	三八%	五〇%	二八%
一九二三年度	〇%	一三%	一%	一八%	五二%	三二%	一七%
一九二四年度	〇%	二二%	一%	一五%	一一%	四四%	一一%

以上に示せる統計表には直接表示せられざるも加奈陀の春蒔小麦に就て先づ最初に播種せられる、地方は大略ブリテイッシュコロンビヤ、アルバータの二州であつて、四月一日より七日迄に着手せらるゝを常とし、之に亞いでハサスカチエワン、マニトバ、ユオンタリオ諸州の南部地方とせねばならぬ。而して四月中旬に及べばクエベック州にても播種を開始せらる。其の最も遅るゝはニューフランスウイック、ノバスコチア、プリンスエドワードアイランドで四月末乃至五月上旬を以て通例播種の第一步とする。右の如く各地方毎に大體其の播種の時期は

一定してはるるが再三述べたるが如く氣温其の他の自然的條件が未だ播種に適合せざるによつて稍々甚だしい遅速を來すことはマニトバ州の例によるも明らかであらう。即ちマニトバ州に於て一九〇三年以來一九二四年迄に各年度別に播種第一日を見るに一九二〇年の三月三十日を最も早きものとし、一九二四年の五月七日が最も遅いものである。其の詳細は次表の如し。

播種期	日	年	度
三月三十日	—	四月七日	一九一〇、一九一五、
四月八日	—	四月十四日	一九〇六、一九〇八、一九一八、
四月十五日	—	四月廿一日	一九〇三、一九〇五、一九二一、一九一三、
			一九一六、一九一七、一九一九、一九二〇、
			一九二一、一九二二、
四月廿二日	—	四月廿八日	一九〇四、一九二二、一九二三、
四月廿九日	—	五月七日	一九〇七、一九〇九、一九二四、

此の播種時日の遅速と收穫高との關係に就ては、既に掲げたる生産高表と對比して容易に理解し得らるが如く概して早く播種に着手せられた年度には其收穫高は多きに達するのである。以上の如く播種時期の遅速乃至は其の結果の如何は別問題とするも、加奈陀の春蒔小麦地帯に於て統計上小麦播種が最も繁忙を極むるは四月二十二



日より五月七日に至る約十五日間であつて其の前後に至るに従つて減少すること次表に示すが如くである。

(加奈陀政府統計局發表)

年 度	四 月					五 月				
	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
一九二三	九三四	四	二〇	二二四	二二八	二四四	一二八	九二	一〇四	
一九二四	一五六六	一四	一八	一四一	五二五	四七五	一七四	一二五	九四	

此の如くして播種終了されたものは一定の水分と温度によつて、發芽するものであるが其の期限は、該播種期の氣温の寒暖によつて差異を生ずることは理の當然とせねばならぬ。然し最近の統計によれば最も早く發芽せるは播種後八日間であつて、其の最も遅るゝものと雖も二週間を経過するは稀である。而して全加奈陀の平均は十一日間であり、一九二三年度の如く播種後天候其の他の條件の良好なるものは全く右平均日數に合致するも、一九二四年度の如く氣候寒冷なるものにあつては十二日間を要してゐる。發芽に際して僅か一日二日の遅速は左程重大視する必要なきが如くであるが、事實は全く之れに反して順次小麦の成長期、發穗期、開花期、乳種期、結實期に重大な影響を及ぼすもので決して等閑に附すべきものではない。今此の發芽日數を各州別に示せば平均ブリンス・エドワード・アイランドは八日間にして發芽しニュー・ブランズウィック、クエベック、マニトバは十日間ノバス・チアは十一日間、オンタリオ、サスカチエウアンは十二日間、アルバータの十四日間である。而して全

加奈陀を通じて發芽の最も多い時期は播種時期の關係よりして五月八日から二十一日に至る約十五日間であつて其の詳細は次表の通りである。

(加奈陀政府統計局發表)

年 度	四 月					五 月				
	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
一九二三	六九五	〇	〇	四	二五	一三七	一八九	二三六	一〇四	
一九二四	一三四八	〇	一	二二	二四	一七四	四七〇	五〇一	一六一	

一旦發芽せるものは所謂成長期、發穗期、開花期、乳種期、結實期の五期を経過して刈取らるゝものであるが大體論としては其の播種期、發芽期の關係よりして太平洋沿岸地方、太平洋沿岸地方の比較的溫暖なる所は成長早く七月上旬乃至中旬に至れば開花期に達するものがあるが、此の如きは皆冬時小麦に屬するもので數量も少なくこれを度外視するも殆んき差支はないと思ふ。其他の諸地方に於ては七月中旬に至つて漸く發穗期に達するに過ぎない。従つて結實も發穗後約一ヶ月を経過する八月中旬とされてゐる。此等の發穗期、開花期、乳種期、收穫期の點に關し加奈陀政府統計局は嘗て極めて興味ある材料を蒐集し稍明細に示せるが故に左に参考の爲めに摘録することとする。

(左の表は二二七頁より順次右へ二二四頁まで続く)



(八)														
收穫初期				收穫繁忙期				收穫終期						
肥 錄 數	一 七 日	八 日 四	一 二 五 日	三 三 日	肥 錄 數	一 七 日	八 日 四	一 二 五 日	三 三 日	肥 錄 數	一 七 日	八 日 四	一 二 五 日	三 三 日
15		2	2	11	11			1	10	2				2
24		1	8	15	14			1	13	4				4
9			2	7	7				7	1				1
10		1	1	8	4			1	3					
7	1		1	5	3			1	2	2				2
4			2	2	2				2					
2	2				6	2	4			11	2	5	4	
22		5	10	7	19			7	12	12				2 10
26	2	5	14	5	22		4	8	10	18				6 12
					4		1	2	1	2				1 1
4		2	1	1	1	1				2				2
7		1		6	3			1	2	2				2
24	2		8	14	22		2	1	19	4				4
15			1	14	5				5					
25		2	18	5	25		1	2	22	2				2
24	2		5	17	8	1		2	5	1				1
25			2	23	18				18					
462		17	145	300	264			23	241	3				3
360	1	21	86	252	198	1	1	19	177	7				7
46		1	12	33	19			1	18					
24	1	2	12	9	19			4	15					
12	3	4	3	2	14	1	4	5	4	11	1		5	5

二二五

(九)														
收穫初期				收穫繁忙期				收穫終期						
肥 錄 數	一 七 日	八 日 四	一 二 五 日	三 三 日	肥 錄 數	一 七 日	八 日 四	一 二 五 日	三 三 日	肥 錄 數	一 七 日	八 日 四	一 二 五 日	三 三 日
2	2				1			1		9	2	3	3	1
3	2	1			10	5	4	1		14	2	4	2	5
2	1	1			3	1	1		1	6	1	4	1	
10	7	1	2		18	4	4	7	3	17	2	4	2	9
19	5	8	5	1	25	3	2	13	7	19		2	3	14
9	5	3	1		16	4	6	4	2	17	1	1	8	7
3			3		10	3	1	6		16	1	2	7	6
2	2				4	2		2		13	1	7	5	
1					2		1		1	4	3		1	
										2			1	1
6	3	1	2		8	4	3	1		8		3	3	2
1	1				2	2				14	8	4	1	1
6	4	2			14	7	4	2	1	17		4	9	4
3	2	1			7	5	1	1		27	8	6	11	2
4	4				5	3		2		3			1	2
3	3				12	10	2			20	1	3	11	5
94	82	10	2		247	148	68	28	3	415	22	79	166	148
38	36	1	1		128	103	21	4		260	20	67	106	67
33	23	9	1		53	20	18	11	4	60		5	19	36
1	1				11	6	5			20		5	7	8
3	1	2			6	1	2	3		18	6	4	5	3

二二四



(八)

發種繁忙期

地 方 名	記 録 数	發種繁忙期			
		一 七 日	八 一 四 日	一 二 五 日	三 三 一 日
プリンスエドワードアイランド	1	1			
ノバスコチア	10	7	2		1
ニュウブランズウイツク	3	2	1		
クエベック					
セントローレンス以北	4	1	3		
セントローレンス以南	11	3	4	4	
東部地方	2		2		
モントリオール地方	2	2			
オンタリオ					
東部地方	3	2	1		
中部地方	4	3	1		
西部地方	2	1		1	
南部地方					
北部地方	1	1			
マニトバ					
東部地方					
北中部地方	1	1			
南中部地方					
北西地方	2	1	1		
南西地方	3	3			
サスカチエワン					
北部地方	26	14	9	2	1
南部地方	13	5	2	4	2
アルバータ					
北部地方	2	1	1		
南部地方					
ブリテイッシュコロンビヤ	1	1			

二二七

月

開 花 期

記 録 数	開 花 期			
	一 七 日	八 一 四 日	一 二 五 日	三 三 一 日
4	3	1		
9	2	4	3	
4	2		2	
6	1	4	1	
17	3	5	5	4
7	2	3	2	
6	2	4		
7	3	3	1	
3	1	1		1
2	1		1	
2		2		
1	1			
3	2	1		
1	1			
4	2	1	1	
5	2	3		
71	46	15	10	
38	28	6	3	1
7	4	2		1
3	3			
1		1		

中)

乳 種 期

記 録 数	乳 種 期			
	一 七 日	八 一 四 日	一 二 五 日	三 三 一 日
6		3	3	
11	2		7	2
10	2	3	3	2
10	1	4	2	3
15		1	6	8
8	2		4	2
11	2	5	4	
8		2	6	
6		5		1
2		1		1
4		1	3	
9	6	3		
9		4	5	
11	6	4	1	
22	7	9	3	3
17	6	3	8	
250	81	85	70	14
153	56	48	44	5
34	8	15	8	3
9	4	2	3	
2		1	1	

二二六



前表に示せる所によるも加奈陀に於ては發穗期、開花期、乳種期、結實期は地方を異にするに従つて稍々著しい差異あるを認めらるゝが、要するに此の如きは播種時期の遅速と、氣候の關係より生ずる必然の結果と言はねばならぬこと既に記述した通りである。殊に其の刈取期が主として八月より九月に亘る事實よりして時に或ひは初秋の降霜に襲はるゝ傾向を有することに就ても先きにも斷片的ながら述べた所に屬するが、右の表に依つても其の虚空の言に非ざるを證明するに足ると思ふ。此の初秋の降霜こそは、加奈陀小麥が刈取られざる以前は其の成績極めて優良なる場合も收穫間際に當つて甚大なる損害を被る重大なる原因と言ふことが出来る。是加奈陀小麥の收穫高が年によつて著しい亂高下を來す殆ど唯一の理由であり、人力を以てしては如何とすることを得ないものである。初秋の降霜害の有無、又霜害ある時は其の程度如何は直ちに該年度の小麥收穫率に決定的に影響することは改めて述べる迄もないことであつて、加奈陀は概して其の被害を受け易い地位にあるのみならず、小麥栽培地としても極めて浅い歴史を有するものなるが故に其の單位面積に對する小麥收穫率は當然低かるべきにも拘らず、實際問題としては全く其の反對に諸小麥生産國に比して常に比較的上位にあることは興味深いこととせねばならない。或る者は加奈陀小麥の將來を論じて同國の初秋に往々降霜あるを指摘して、小麥栽培上致命的の欠點であり多くを期待することを得ないと説いて著しき悲觀論を述べてゐるが、其の霜害云々の點は之れを是認するも、反對に收穫率が常に他に比して高位にある點よりして組することの出来ない論と思ふ。加奈陀の小麥生産高に往々稍々甚だしい高低を來し、收穫率の安定は未だ確信することを得ざる状態にあるは誠に遺憾の極みであるが、此の如きは年を経るに従つて早晚改善さるゝことと信ずる。

由來新開地に於て小麥收穫率の安定を缺く主要なる原因は次の二者とすることが出来る。其の一つは霜害であり、其の二は早魃である。然し此等の諸害と雖も必ずしも絶對的のものではなく、相當の時日を経過するに従つて其の對策を案出し得るか、又は間接的に人口の増加、其の他の事情よりして自然的に其等が除去さるゝことは稀ではない。彼の北米合衆國の北ダコタ州の如きも其の開拓當時に初秋の降霜に悩まされ、其の小麥作に大害を與へたことは引例の煩に耐へない程であつたにも拘らず、現在では世界にも著名なる小麥大生産地として其の名令を馳せ、又同じく合衆國の西部地方の如きは早魃の甚だしきを以て有名なものであり、殊に嘗つて乾燥地として到底農耕には不適當なりとせられた南ダコタが今や有數な小麥産地として名聲を高め、更にネブラスカカンサス、モンタナの各地方も其の開発當時は早魃の爲め小麥生産高は亂高下を示して何等準據すべき基礎はなかつたが現今稍々其の安定を保つに至れるを見れば、人智の進歩し各地方の風土に曉通するに及んで、各種の天然の被害を未然に防ぐの途を考案するか、又は自然的に此等の被害を減少せしむるものとせねばならぬ。右の如き各般の生きたる事實を考慮すれば、加奈陀と雖も今後相當の時日を経過すれば小麥栽培上不利なるものには種々の對策を講ぜらるべく、又従つて收穫高が急増、激減を示すが如きこと、漸次其の跡を絶つに至るのではなからうか。然し如何に人智が進歩すればとて氣候の順否に依る農作物の豊凶の如きは、或る程度以上之れを如何ともすることが出来ないであらうから、加奈陀に於ける降霜、早魃の諸害を徹底的に除去するが如きことは考へ得ら



ないのは勿論である。要するに加奈陀小麦の收穫率は今後と雖も霜害、早魃によつて相當の變動はあるべけれども其の變動の程度は従前の如く甚だしく顯著なるものではないであらう。

翻つて加奈陀が小麦栽培地として世の注目するに至りし以來何程の小麦收穫率を擧げ得たるやの問題は、從來の他の新開小麦栽培地の場合と甚だしく其の趣を異にして、極めて優良なる成績を示してゐると言はなければならぬ。此の點に就ては既に前節に詳論せるが如く同國が小麦栽培上其の先輩たる北米合衆國を遙かに凌駕せるによりても知らるゝ所である。山來新開地に於ける小麦栽培は該新開地を開拓せしめんとする方便に使はるゝものであつて、先きに「處女地開墾者」を以て小麦の異名なりと言つたことに當り、又従つて其の耕作法の如きも大規模粗放的なるを免かれざること合衆國の小麦西進運動を説きたる項と全然同一であり、又氣候、土壤其他の諸事情が最初より小麦栽培に好都合なるべきことを豫期し得ないが故に、其の開墾初期に當つて一噓に付き一〇ブツシエル平均の收穫率を擧ぐることは先づ至難の業とせねばならぬこと數多の過去の經驗に依つても明らかである。然るに當加奈陀に於ては小麦栽培の歴史極めて淺きものあるにも拘らず、全く右の通例を破つたものであらう。即ち氣候、地勢、土壤其他各般の點に於て加奈陀は全く小麦栽培に最も適當するが故に、其の應當り收穫率の如きも北米合衆國、アルゼンチン、濠洲、並びに露西亞等の小麦大生産國に比して一頭地を抜いて其の追従を許さないのみならず、其の豐作なるが如き場合は彼の廣大なる全土に亘つての平均小麦收穫率は三〇ブツシエルに垂んとして獨り英本國と第一位を争ふ程である。勿論此の如きは幾分例外的であつて、平年にあつては英本

國、獨逸の極度の集約的農耕法を採用する國に比すれば遙かに劣るものあるにもせよ、其の他の先進農業國とは正に伯仲の間にある。乍然時に或ひは播種期に當る四五月の天候不順なるにより、又は收穫期たる八月九月に於ける大雨乃至降霜の爲めに、著しく麥作の損傷せられ收穫率が大いに低落することあるも、此の如き例外を除いては先づ成績優良なる點に於て世界屈指となさねばならぬであらう。其の最近十ヶ年間に於ける收穫率を詳細に地方別に示せば次の如くである。  
(加奈陀政府統計局發表)

年 度	加奈陀全國		ブリュッセル			オランダ			ドイツ		
	冬時	春時	冬時	春時	冬時	春時	冬時	春時	冬時	春時	
一九一五年度	二六、五〇	二五、七五	一九、〇〇	一八、五〇	一九、〇〇	二〇、〇〇	二六、二五	二七、七五	三三、二五	二四、七五	
一九一六年度	二二、五〇	一六、七五	一六、七五	一九、五〇	一五、〇〇	二二、二五	一六、二五	二〇、七五	一六、〇〇	一七、〇〇	
一九一七年度	二二、五〇	一五、〇〇	一四、〇〇	一五、七五	一四、〇〇	二二、二五	一九、五〇	二二、二五	三三、二五	一六、七五	
一九一八年度	一九、〇〇	一〇、七五	一〇、〇〇	一三、二五	一九、〇〇	一七、二五	一九、五〇	二二、二五	一八、〇〇	一六、二五	
一九一九年度	三三、七五	九、五〇	一七、〇〇	一九、五〇	一七、〇〇	一六、七五	二四、三〇	一五、六〇	二二、一〇	一四、二五	
一九二〇年度	二四、〇〇	一四、〇〇	一三、〇〇	一九、五〇	一七、七五	二七、〇〇	二四、三〇	一六、六〇	三三、三〇	一三、六〇	
一九二一年度	二二、五〇	二二、七五	一六、七五	一五、五〇	一五、二五	一五、二五	三三、〇〇	二二、〇〇	二〇、一〇	一一、五〇	
一九二二年度	二二、二五	一七、七五	二二、二五	二〇、二五	一七、五〇	一五、七五	二二、九〇	一六、九〇	二二、二五	一九、二五	



年度	サスカチエワン			アルバータ			ブリタニッシュ・コロンビヤ		
	春蒔	冬蒔	全小麥	春蒔	冬蒔	全小麥	春蒔	冬蒔	全小麥
一九一五年度	三五、〇〇	三二、二五	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、五〇	三三、五〇	三三、五〇	三三、七五	三三、七五
一九一六年度	一六、二五	三〇、二五	二五、〇〇	二五、〇〇	三〇、七五	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇
一九一七年度	一四、二五	二〇、五〇	一八、二五	一八、二五	二二、七五	二六、五〇	二六、五〇	二六、〇〇	二六、〇〇
一九一八年度	一〇、〇〇	一五、〇〇	六、〇〇	六、〇〇	二四、七五	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、五〇	三三、五〇
一九一九年度	八、五〇	一五、七五	八、〇〇	八、〇〇	二四、七五	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、七五	三三、七五
一九二〇年度	一一、二五	一八、七五	二〇、五〇	二〇、五〇	一九、二五	一八、七五	一八、七五	一八、〇〇	一八、〇〇
一九二一年度	一三、七五	一七、二五	一〇、二五	一〇、二五	二七、二五	二五、五〇	二五、五〇	二五、二五	二五、二五
一九二二年度	二〇、二五	一三、〇〇	一〇、二五	一〇、二五	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、二五	三三、二五

(註) 加奈陀政府當局の發表せるものは多少數字上の差違あるも斯界の權威者たる Northwest Grain  
 Dales' Association, がスリー・フレリー・プロヴインセスの累年の平均收穫率を發表せるものも  
 亦十分參考となるものと思ふ。即ち次表の如し。

一九〇五年度	二一、六	一九〇七年度	一三、〇
一九〇六年度	一八、九	一九〇八年度	?

一九〇九年度	一七、八	一九一七年度	一四、九
一九一〇年度	一一、九	一九一八年度	一〇、三
一九一一年度	一八、二	一九一九年度	一〇、五
一九一二年度	一八、六	一九二〇年度	一五、二
一九一三年度	一七、〇	一九二一年度	一四、四
一九一四年度	一一、七	一九二二年度	一七、九
一九一五年度	二七、八	一九二三年度	一一、一
一九一六年度	一五、一		

右の表中一九〇七、一九一八、一九一九の三年に收穫率の激減せるは例の播種期に於ける天候の不  
 順と、收穫期に於ける降霜ありしに依るものである。

更に一步を進めて各州別に最近十ヶ年間の收穫率に付き加奈陀政府の發表せるものを示せば、

全加奈陀平均		平均	
冬蒔小麥	二二三、〇ブツシエル	冬蒔小麥	一六、〇ブツシエル
春蒔小麥	一五、八ブツシエル	春蒔小麥	一六、〇ブツシエル
内	譯		



プリンス・エドワード・アイランド	春蒔	一八、〇	ブツシエル	
ノヴァ・スコチア	春蒔	一九、四	〃	
ニュー・ブランズウィック	春蒔	一七、二	〃	
クエベック	春蒔	一六、三	〃	
オンタリオ	冬蒔	二三、一	〃	平均 二二、一
	春蒔	一八、一	〃	
マニトバ	春蒔	一五、二	〃	
サスカチエワン	春蒔	一五、五	〃	
アルバータ	冬蒔	二一、三	〃	平均 一六、八
	春蒔	一六、七	〃	
ブリテイッシュ・コロンビヤ	冬蒔	二五、七	〃	平均 二四、三
	春蒔	二三、七	〃	

であつて其の最近のものは一九二四年六月、政府の發表せる所で次の如くである。(一九二三年度)

全加奈陀

冬蒔小麦	二四、二五	ブツシエル	二〇、二五	ブツシエル
春蒔小麦				

内 譯

地 方 名	冬蒔小麦	春蒔小麦
プリンス・エドワード・アイランド		一七、七五
ノヴァ・スコチア		一九、五〇
ニュー・ブランズウィック		二一、五〇
クエベック		一九、二五
北部地方		二〇、七五
南部地方		一五、七五
東部地方		一九、五〇
モントリオール地方		二一、五〇
オンタリオ	二三、五〇	二〇、二五
東部地方	二一、五〇	二〇、七五
中部地方	二六、二五	一八、七五
西部地方	二二、七五	二一、〇〇
南部地方	二二、二五	一八、七五
北部地方	二九、七五	二三、二五



東部加奈陀	二三、五〇	一九、七五
ブリテイッシュ・コロンビヤ	二八、五〇	二六、二五
マニトバ		
東部地方		
北中部地方		
南中部地方		
北西部地方		
南西部地方		
サスカチエワン		
第一號地方		
第二號地方		
第三號地方		
第四號地方		
第五號地方		

一三六

第六號地方	一九、〇〇	二四、二五
第七號地方	二二、〇〇	一九、二五
第八號地方	二二、二五	二九、〇〇
第九號地方	二一、七五	二八、二五
アルバータ	二四、七五	三三、〇〇
北部地方	二〇、五〇	二七、五〇
中部地方	二六、五〇	三四、七五
南東地方	一七、七五	二六、五〇
南西地方	二四、五〇	三四、〇〇

第四項 品質

小麦の種類は此れを大別するも尙千百を以て數ふる程なることに就ては既に説明せる所に屬する。而して種類を異にするに従つて當然其の品質にも異同を來すが故に、一概に加奈陀小麦の品質如何を論ずるは先づ至難の業とせねばならぬ。殊に同一種のもの同一地方に栽培するが如き場合でさへも年々の氣温、温度の關係よりして品質に稍々甚だしい影響を及ぼすが爲めに、斯界の大家と雖も其の判断に苦むことあるは必ずしも稀ではない。然し只其の概略に就ては各種の試験の結果乃至は經驗によつて良否を判定することが出來ると思ふ。惟ふに兩太平洋



に面する地方より産出さるゝ加奈陀の冬蒔小麦は其の質恰も合衆國の東部海岸地方より生産さるゝ軟質冬蒔小麦に類似し、粉狀質には富んでゐるが含有グルーテンは少量であり其の質の如きも必ずしも製粉上最上とすることが出来ない。従つて其の品質は優良なりとする事は覺束ないと思ふ。只だ強ひて北米合衆國の軟質冬蒔小麦に異なる點を求むれば、加奈陀の前記冬蒔小麦地帯は合衆國の軟質冬蒔小麦地帯に比し北方に偏して幾分氣候も寒冷なるが故に、含有グルーテンの量、質に於て僅少なから優るものあることであるが、此れを以て直ちに加奈陀冬蒔小麦の品質優良なりと斷ずることは早計であり、先づ此の兩者は大同小異に過ぎない。

反之春蒔小麦は所謂ファイフ (Fife) 又はデュラム (Durum) に類屬するもの多きを占むるのみならず、春蒔小麦地帯が概して降雨量少なく且つ寒冷なるが爲めに、其の含有グルーテンは量に於て優れてゐるは勿論、質も亦頗る可良なるが爲めに製粉上より論ずれば、先づ第一位に位するものとされてゐる。就中パン製造には同小麦最も適合し、彼のマニトバ小麦が製粉界に珍重せらるゝを以ても、其の一端を窺ひ知るに難くないと思ふ。従つて我國に於ても通例小麦粉の製造に際しては合衆國、濠洲、加奈陀並びに内地小麦を夫々適當に混合したものを原料としてゐるが、特にパン向の製粉には殆ど全部加奈陀小麦を原料としてゐる程である。然し右述べたるが如きは僅かに加奈陀小麦を概觀しての論であつて春蒔小麦中にも品質劣悪取るに足らぬもののあることは言ふ迄もない。此の點に關して小麦取引の便益を測つて等級別にせるものはあるが、此は後章加奈陀の市場を論ずる項に譲ることとする。

#### 第五項 加奈陀に於ける小麦生産費

小麦生産費の計算の基礎の必ずしも單純に非ざること、及び單位量に對する生産費の金額が一定不變のものに非ずして浮動して止まざるものに就ては、既に合衆國小麥の生産費を論ぜる項に詳論せるが故に此に再説するを避けることとする。一九二三年末合衆國の代議士であり小麦委員會の會長たるアンダーソン氏が北米合衆國、加奈陀の兩國に於ける地價、租税、肥料、勞働賃金、種子料、其他百般の經費を算出して小麦の生産費を算定せる結果に徴すれば、加奈陀の平均小麦原價は當時一ブツシエル七十二仙なるに反し、合衆國の平均小麦原價は一ブツシエル一弗五十七仙なりと斷定せるは有名なることに屬するが、不幸にして同氏の算出の基礎が如何なるものなるやは知るを得ざるも、次に示すものにして信頼するに足るべき統計表と對比して、稍々興味深いものがある。

現在加奈陀に於ける各種の統計に就て最高權威とされてゐる Dominion Bureau of Statistics の前身たりし Census and Statistics office が嘗て一九二一、一九二四の兩年に亘つて加奈陀に於ける主要穀類の生産費を算出したことがあつたが、今日よりして之れを見るに甚だしく時代遅れの感なしとしない。此の點に想到せる加奈陀統計局は一九二三年二月其の支配の下に屬する Dominion Experimental Farms and Stations に命じて小麦の生産費の調査を行はしむることとした。而して其の調査報告書は實に八百七十五通の多きに達し、其の範圍は加奈陀全州に及び比較的正確なるものとされてゐる。勿論農産物の生産費の如きは所を異にし栽培者を異にするにより、



或ひは各年度の作柄乃至は被害の程度如何によつて著しく左右せらるゝものではあるが、只左に掲ぐる加奈陀統計局の調査報告の如きは大數觀察によつて先づ概略の生産費を知るには十分のものと思ふ。

第一表は加奈陀全土に亘る春蒔小麦の一畧當り平均生産原價表

第二表は東部加奈陀並びにフリテツシ・コロンビヤの畧當り平均生産原價(冬蒔、春蒔兩種)

第三表はスリー・ブレイリー・プロヴィンセスの畧當り生産原價表

第四表は地價、地方税、金利の表であり、直接小麦生産費には關係なきが如く見ゆるも、間接的には重要なこと勿論であるから念の爲め掲げた。

第一表 一九二三年度、加奈陀春蒔小麦生産原價表 (畧當り)

東部並びにフリテツシ・コロンビヤ		スリー・ブレイリー・プロヴィンセス	
		連續作	休閑作
耕耘費	四、〇八弗	二、四八弗	四、〇八弗
種子代	二、七八	一、三七	一、四六
播種費	一、〇五	〇、五七	〇、五八
培養費	一、〇〇	〇、五七	〇、七七
收穫費	二、一八	一、七二	一、八八

脱穀費	一、九一	二、四三	三、一〇
精撰費	一、八七	一、三八	一、六七
器具費	〇、六八	〇、五六	〇、六六
地代	三、九三	二、九二	三、八六
合計	一九、四八	一四、〇〇	一八、〇六

第二表 東部加奈陀並びにフリテツシ・コロンビヤ小麦生産原價表 (畧當り弗)

	冬蒔	東部加奈陀	フリテツシ・コロンビヤ	エドワード島	ノバスコチア	ニュー・ブランズウィック
肥料代	四、三四	四、二二	三、一三	五、九四	四、六〇	四、四〇
耕耘費	二、〇〇	二、八四	三、三七	四、〇三	三、七五	三、七五
種子代	〇、八四	一、〇七	〇、五二	一、一三	一、〇五	一、〇五
播種費	一、三四	一、〇七	〇、七二	二、三七	〇、五〇	〇、五〇
培養費	二、〇八	二、一四	一、九四	二、六一	二、八八	二、八八
收穫費	一、六七	一、八〇	一、五六	二、一四	二、五六	二、五六



精撰費	一、七四	一、八三	一、三六	一、七七	一、九五
器具費	〇、七二	〇、六七	〇、六四	〇、九九	〇、八三
地代	四、〇九	三、五六	二、九〇	三、五六	三、四七
合計	一八、八二	一九、一〇	一六、一四	二九、八三	二五、九九

(第二表續キ)

肥料代	二、九六	三、〇三	二、六二	三、四七	三、七四
耕耘費	三、六六	四、三四	四、三六	三、四七	三、七四
種子代	三、〇二	二、〇〇	二、〇三	二、二八	二、一八
播種費	一、四一	〇、八四	〇、七六	〇、八〇	〇、八九
培養費	一、〇八	一、三四	〇、九九	一、一四	一、〇七
收穫費	二、〇五	二、〇八	二、〇二	一、九八	二、五六
脱穀費	一、八四	一、六七	一、五八	三、一〇	三、〇〇
精撰費	一、七二	一、七四	二、〇二	一、九二	二、一七
器具費	〇、六三	〇、七二	〇、六三	〇、四八	〇、八七

クエハツケ  
春蒔

オシタリカ  
冬蒔

春蒔

フリテイツシ・コロソビヤ  
冬蒔

春蒔

地代	三、七一	四、〇九	三、五六	七、三一	七、三五
合計	二二、〇八	二二、八五	二〇、五七	二二、四八	二二、八三

第三表 スリープレリープロウインセスの春蒔小麦生産費(暖當り、弗)

耕耘費	二、四八	二、四八	二、四八	二、四八	二、四八
種子代	一、三七	一、三〇	一、四〇	一、三六	一、三三
播種費	〇、五〇	〇、五〇	〇、五〇	〇、五〇	〇、五〇
培養費	〇、五七	〇、五九	〇、五〇	〇、五〇	〇、五〇
收穫費	一、七二	一、七二	一、七二	一、七二	一、七二
脱穀費	二、四三	二、三三	二、三三	二、三六	二、三五
精撰費	一、三三	一、五〇	一、三七	一、九〇	二、三七
器具費	〇、五五	〇、五七	〇、五三	〇、五〇	〇、五〇
地代	二、三三	三、三六	三、八〇	三、二四	三、四四
合計	一四、〇〇	一六、三三	一三、九六	一八、〇〇	二〇、四三

三州平均

マニトバ

サスカチエワン

アルバータ

連続作 休閑作

连续作 休閑作

连续作 休閑作

连续作 休閑作



第四表 地價、地方税、金利表 (概當り、一九二三年度)

	地價	地方税	金利
加奈陀	四二弗	〇、七二弗	五—一〇%
東部加奈陀	五八	〇、九七	五—一八
プリンス・エドワード島	四三	〇、二五	六—一七
ノヴァ・スコチア	四〇	一、〇〇	六—一八
ニュー・ブランズウィック	三〇	〇、七八	六—一八
クエベック	六一	〇、八九	五—一八
東部地方	五〇	〇、八三	五—一七
モントリオール地方	七八	〇、八七	五—一六
北部地方	五四	一、一〇	五—一八
南部地方	六一	〇、八〇	五—一八
オンタリオ	六五	一、一二	五—一八
東部地方	六九	一、三三	五—一八
中部地方	五一	〇、九四	五—一八

西部地方	六二弗	一、〇二弗	五—一七%
南部地方	七五	一、二七	五—一八
北部地方	五一	〇、五六	六—一八
ブリテイッシュ・コロンビヤ	一〇二	一、〇九	六—一〇
ブレイリー・プロヴィンセス	二七	〇、五二	五—一〇
マニトバ	二七	〇、六七	五—一九
東部地方	三二	〇、七九	五—一八
北中部地方	二二	〇、四三	五—一七
南中部地方	三一	〇、五〇	六—一八
北西部地方	二四	〇、八四	七—一九
南西部地方	二六	〇、五一	七—一九
サスカチエワン	二七	〇、四七	六—一〇
第一號地方	二六	〇、四六	六—一九
第二號地方	三五	〇、三九	七—一八
第三號地方	二二	〇、六九	七—一八



第四號地方	一六	〇、二七	八
第五號地方	二三	〇、四七	七—九
第六號地方	三〇	〇、四五	七—九
第八號地方	三〇	〇、三六	六—九
第九號地方	二三	〇、四二	八一—〇
アルバータ	二六	〇、四一	六一—〇
北部地方	一三	〇、三二	八一—九
中部地方	二六	〇、四五	七一—〇
南東地方	一七	〇、二八	七一—九
南西地方	三四	〇、四二	六一—九

右諸表の費用計算の單位は悉く噸である。従つて一噸當りの收穫率を知らば、單位量に對する生産費を算出することが出来る。而して噸當りの生産原價も年によつて多少の變化あるべけれども、數年の内に著しき差異を生ずるが如きは通例考へ得ざる所であるから先づ大體に於て定額と見るも不都合ではない。然るに各年度に於ける收穫率は既に述べたるが如く天候其他の事情によつて高下すること甚だしきものがあるが故に、噸當りの收穫率多き時は之れに反比例して單位量に對する生産費は低減せられ、收穫率不良の時は反對に騰貴する。今試みに一九

二三年度の加奈陀小麦の平均生産費を計算すれば冬時小麦に就ては平均一ブツシエルに付き八十仙であつて、春時小麦は連續作の場合は一ブツシエルに付き六十九仙、休閑作の場合には八十九仙に當る。尙主要なる春時小麦産出地を標準として其の一ブツシエルの原價を計算すれば次の如くである。

州名	連續作	休閑作
マニトバ州	一、〇〇	一、〇四
サスカチエワン州	〇、七五	〇、七三
アルバータ州	〇、六三	〇、六二

即ち一九二三年度には加奈陀小麦のブツシエル當り生産原價は州別にすると、平均一弗以上に達するものは極めて稀であつて、概ねは一弗に達せざるか、甚だしきは六十仙以下に下るものさへある程である。然し此の如く一ブツシエルの生産費が六十仙以下となるが如きは現在の經濟狀態よりして全く異例であつて、一九二三年度に同國の小麥作が大豊作なりしによるもので、若し平年作なるに於ては冬時小麦に就ては一ブツシエル八十五仙内外春時小麦に就ても一弗を出づるが如きことは稀とせねばならぬであらう。

右に述べた一ブツシエル當りの生産費の實例は主として一九二三年度のもを基礎として摘録したが、尙數十年の長日月に亘つて研究すること、必ずしも興味ない理ではないが、直接將來の加奈陀小麦の生産費に重大なる關係を有しないと信ずるが故に此には細論するを避けたらと思ふ。(Dominion Bureau of Statistics, Canada.)



只此に是非注意を拂ふを要するは北米合衆國政府當局の調査せる加奈陀小麦の生産費に就てである。一九二三年度に加奈陀に於て小麦は大豊作を來し安價なる小麦が滔々として合衆國に流入し、著しく合衆國の小麦栽培者の脅威を醸成した。爲めに合衆國では所謂小麦輸入關稅引上が一般の輿論となり、同國政府も一つは社會政策上並びに農業政策上より、一つは當時の政府當局者の對農民關係より等閑に附すべからずとなし、直ちに合衆國關稅委員會 (United States Tariff Commission) を設けて加奈陀小麦の生産費に關して詳細なる調査を斷行し、又他面合衆國自身の小麦生産費に就ても其の調査を進め、彼我對象して加奈陀小麦の大流入防壁對策資料としたのである。而して右委員會の發表せる調査報告も加奈陀小麦の生産費を論ずる場合亦多大の參考となると信するが故に其の結論のみを左に紹介することとする。

同委員會の調査の範圍は當然加奈陀全土に及んだものではあるが、就中スリー・ブレイリー・ブドウインセスの小麦大生産地のものには多大の努力を拂つて其の蒐集せる調査報告書は九百五十四の多數に上つた程であり、尙ほ之れを以て満足せず更に其の内より嚴撰の結果二百五十六を基礎として加奈陀小麦の生産費を計算し、一九二四年二月十一日此れを一般社會に發表することとなつたのである。其の調査の方式は必ずしも加奈陀政府統計局のものと同段ではないが、結局に於て次表の如きものに到達した。

スリー・ブレイリー・ブドウインセス陸當り小麦生産費表 (陸當り原價、弗)

地方別	記録數	一九一三年全生産費		一九二一—二三年全生産費	
		地代共	地代ヲ除キ	地代共	地代ヲ除キ
マニトバ州	六八				
ドウフィン地方	二六	一五、一七	一二、五二	一六、一二	一三、八三
メリテイヤ地方	二二	一三、六六	一一、一一	一三、九八	一一、八〇
ハミオタ地方	二二	一六、〇七	一三、二一	一六、三一	一三、八〇
サスカチエワン州	九六				
スウィフト・カレント地方	一一	一四、九二	一二、七八	一五、六〇	一三、八一
バトルフォード地方	二〇	一八、三四	一四、〇七	一七、八六	一三、九二
メルフォート地方	二二	一五、三二	一二、四一	一五、一七	一二、五六
ロースタウン地方	一九	二一、五一	一七、三八	一九、七四	一五、九五
アラメダ地方	二四	一二、一八	一〇、六六	一二、四六	一〇、九五
アルバータ州	七八				
ウエスト・ロック地方	一四	二一、九四	一七、七九	二一、二二	一七、四八
ヴェダレヴィエ地方	二二	一七、六一	一四、一五	一六、七三	一三、五九
				二四九	



オルズ地方	一八	一八、一七	一五、五三	一六、五九	一四、二七
レスブリッジ地方	二五	二〇、一三	一六、〇六	一八、四〇	一四、六六

二五〇

スリープレリープロウインセス一ブツシエル當り生産費

地方別	エーカー當り、一 九二三年收穫高		一ブツシエル當り生産費		エーカー當り 一ブツシエル當り生産費	
	地代共	地代キ除キ	地代共	地代キ除キ	地代共	地代キ除キ
マニトバ州						
ドウフィン地方	一五、一	一、〇〇	〇、八一	二二、六	〇、六八	〇、五六
メリタ地方	一〇、六	一、二九	一、〇三	一三、七	一、〇二	〇、八二
ハミオタ地方	二一、三	〇、七五	〇、六一	二二、九	〇、七一	〇、五七
サスカチエワン州						
スウイフト・カレント地方	一六、六	〇、九〇	〇、七五	一七、二	〇、九一	〇、七七
バトルフォード地方	二六、七	〇、六九	〇、五二	一五、九	一、一二	〇、八四
メルフォート地方	一八、九	〇、八一	〇、六四	二二、四	〇、七一	〇、五六
ロースタウン地方	三〇、五	〇、七〇	〇、五六	二二、五	〇、八八	〇、六八
アラメダ地方	一一、九	一、〇二	〇、八八	一一、〇	一、〇四	〇、八九

アルバータ州

ウエスト・ロック地方	四〇、八	〇、五四	〇、四三	三三、二	〇、六四	〇、五一
ヴェグレヴィエ地方	二八、五	〇、六二	〇、四九	二三、五	〇、七一	〇、五五
オルズ地方	三三、三	〇、五六	〇、四七	二四、六	〇、六七	〇、五五
レスブリッジ地方	三〇、二	〇、六七	〇、五二	二〇、二	〇、八六	〇、七〇

北米合衆國關稅委員會の調査に成つた加奈陀に於ける小麦の生産原價を、前に掲げた加奈陀政府統計局のものと比較するに兩者間に多少の差異あるは免れないが、共に一九二二年度を基準とすれば一ブツシエルに付て一弗を突破するが如き地方は極めて稀であり、又此等の地方と雖も一度豊作に會すれば直ちに弗臺を割る情勢にある。近來加奈陀が世界の小麦市場に最重要の地位を占むるに至つたものは、一つは其の巨大なる生産額なることに歸因してゐることは勿論であるが、他面此の低廉なる生産原價を有することは殆き唯一の決定的理由とも言ふことが出来る。従つて加奈陀は一九一〇、一八一八、一九一九の各年度の如き凶作に非ざる限り、其の剩餘小麦の對外輸出により常に莫大の利益を享有し得るものと言はねばならない。此の點に關して北米合衆國は加奈陀と大いに其の趣を異にしてゐる。(第二章第二節第六項參照)

惟ふに合衆國に關稅委員會の如きものが設けらるゝに至つたのも表面種々雜多の理由こそあれ、其の根本的なものは一つに兩國の小麦生産原價に稍々著しい差異あるに立脚するものであり、今後と雖も尙度々此の點に關



して合衆國に種々の運動が起ることは今から豫測するに難くない所である。未だ加奈陀が農業國として就中小麥大生産國として世に認めらざりし時代には合衆國は小麥栽培上、他の何れの國よりも遙かに有利なる條件の下に年々莫大の小麥生産高を示し、世界の穀倉として前途洋々たるものがあり、自他共に其の名實相伴ふて偽なきを固く信じて止まなかつた。然るに俄然二十世紀に入つてより加奈陀が農國として、殊に小麥栽培地として合衆國に優るも劣ることなきを示すに及んで合衆國の小麥栽培の將來には此の時既に一抹の暗影を投けたと言ひ得る。

爾來合衆國に於ては人口の増加に伴つて未開地にして農耕に適するものは殆ど開拓せられ盡し、又従つて地價の如きも騰貴せざるを得ざるべく、漸次小麥生産費の膨脹を示して止まなかつた。此の時に當つて加奈陀の中部、西部の開発事業は漸く進捗し、小麥を安價に大量に生産するに至り、現在尙多數の未開の地を抱有し而も人口の稀薄なる點よりして小麥生産上加奈陀が終に合衆國を凌駕せんとする氣勢を示せるは誠に自然の勢であつて、人力を以ては如何ともすることの出来ない事實である。殊に合衆國、加奈陀は互に其の國境を接し、前者は生産費が後者に比して高く、而も後者が今後益々に斯業の擴張を容易に實現し得らるゝとせば合衆國農民の脅威を感じるは無理ならぬことであり、政府當局が其の對策に腐心するは蓋し當然のことであらう。

此の意味よりして既に稍々久しき以前より、即ち加奈陀の西方開發の業が漸次隆昌を極めんとせし時代より、合衆國は如何にして自國の小麥栽培者を此の強敵に對して保護すべきやは、眞に一刻も看過し得ざる重大問題となつたのである。此の合衆國の對策如何は、間接的に我國の如く海外の小麥を多量に輸入するものに影響するものと多大なるものあることは此に駄辯を弄する迄もない。是項を改めて合衆國の小麥關稅政策に一瞥を與へんとする所以に外ならない。

#### 第六項 北米合衆國との關稅關係

北米合衆國と加奈陀との間に小麥生産費に就て相當の差異あつて、前者の小麥栽培者が著しく脅威を感じることは前項に於て述べた所に屬する。然し獨り小麥のみならず其他の穀類に就ても同様なる事情が既に十九世紀の中葉より東部地方に存在して、當時北米合衆國農業者は加奈陀農業の發展が如何に自國に不利なりしやは稍々痛切に感ぜられた所ではあるが、一八九〇年代以後加奈陀の西部地方の開發運動が着々進捗するにつれて、就中小麥栽培業の旺盛なるに従つて、其の傾向を更に甚だしく感ずるに至つたものである。其の對策の一つとして小麥輸入稅の設定あり、加奈陀も亦其の關稅政策を以つて對抗せんとす企つるに至つた。以下兩國の關稅政策につき小麥に關するものゝみを摘録することは必ずしも興味ないものとは思はれない。

顧みるに兩國間に關稅問題に就て交渉を開始したのは、一八四六年の關稅互惠條約締結の商議にあるが、該會商は種々の事情より意の如く進捗せず、殊に一八五二年に兩國間に惹起せられた漁業權問題の爲めに終に一時決裂するの止むなきに至つた。然るに二ヶ年を経過して一八五四年に至り英國政府の盡力によりて、兩國間に關稅互惠條約は成立し、兩國とも小麥の輸入に關しては無稅とするを原則としたのである。以來十ヶ年は事なくして經



過したが、一八六四年合衆國は種々の理由よりして前記關稅互惠條約を破棄して、一九一一年即ちタフト大統領の時代迄約五十年間其の復活を見なかつた。而して一九一一年の同條約の復活には可成複雑した事情の存するものがある。即ち一九〇九年以來合衆國に於ては Payne-Aldrich Tariff Law が適用せられ、輸入關稅は此を二大別し一を普通輸入稅、他を最高輸入稅とし、加奈陀より輸入せらるゝ小麥に對しては後者を賦課しつゝあつたのである。

然るに此の時に當つてタフト大統領は加奈陀との親善關係を熱望し、共に關稅互惠條約の復活によつて共同の利益に浴せんとし、時の加奈陀の政府黨たる自由黨と交渉の結果漸く一九一一年其の目的を達することを得たのである。併し此の兩國の親善關係も亦一朝にして捨てざるを得ないこととなつた。即ち加奈陀に於ては自由黨の敵黨たる保守黨が同條約の復活を以て、國家を危殆に瀕せしむるものとなし、此を以て唯一の政府攻撃材料として終に自由黨を倒し直ちに同條約を破棄するの舉にでたのである。爲めに兩國間の關稅互惠條約は再び其の効力を失つたが、他面北米合衆國では一九一三年に至つてアンダーウッド (Underwood) の關稅案提出せられ、同案の内容は總べて輸入小麥に對しては一ブッシェルに付き一〇仙、麥粉其の他の小麥製品に對しては原則として無稅とし、只合衆國の小麥粉、其の他小麥製品に輸入稅を賦課する外國よりの右記製品の合衆國輸入に對しては從價一割の輸入稅を課すことにある。然るに右のアンダーウッド案は製粉業者の利害に合致せざるよりして大反對に會し、爲めに修正するの止むなきに至り、原則として小麥も小麥製品も無稅とし、只合衆國産の上記品目に對

し輸入稅を賦課する外國よりの輸入に對しては、夫々輸入稅を課することとなり、終に同年十月三日より有効とせられたのである。此の點表面加奈陀とは何等直接の關係なきが如き觀あるも、實は大いに然らずして加奈陀小麥の輸入に對して間接的ではあるが、大防壓を加へたものと見て差支ない。其の所以は加奈陀は當時合衆國よりの輸入小麥に對しては一ブッシェル十二仙、小麥粉に對しては一バレル六十仙を賦課しつゝあるが故に、合衆國としては加奈陀より輸入せらるべき小麥並びに其の製品には當然輸入稅を課すが故である。以來歐洲大戰亂初期までは兩國の小麥に對する關稅政策には何等の變更もなかつたが、加奈陀は歐洲大亂に關して其本國たる英國を援助する意義よりして軍需品、食糧を補供することとなり、痛く食糧の獲得に腐心することとなつた。而して降つて一九一七年に至つて加奈陀の輿論は食糧品補給に就て漸く沸騰を來し、合衆國よりの輸入小麥其の他に關稅を賦課するが如きは全く策を得ざるものとして、其の撤回を劃策することとなり、其の結果終に一九一九年六月議會の認むる所とはなつたが事實上右の輸入稅撤廢の結果は不成績に終つたと言はねばならぬ。即ち戰時中苟くも交戰國の一員たるものは大いに食糧問題に留意し、合衆國の如きも食糧品の輸出に對しては嚴重なる調査の後許可せらるる有様で、加奈陀の輸入稅撤廢によりて合衆國の小麥が加奈陀に流入するが如きは事實上稍々困難なるものあつたからである。然し加奈陀が合衆國小麥又は其の製品の輸入を無稅とせることは、他日合衆國の小麥界に極めて重大なる事態を惹起した遠因となつたのである。即ち合衆國は一九一三年十月三日より有効とされたアンダーウッド關稅法に依つて、加奈陀小麥の輸入に對して従前の輸入稅を課することを得ずして、全く無稅とせ



ねばならぬのである。換言すれば自國の小麥生産費より遙かに安價なる生産費を以つて足る加奈陀小麥の流入を無條件で許容したこと、なるのである。其の結果の如何なるものありしやは、此に識者を俟すとも殆ど自明のこととて、一九一九年六月加奈陀が合衆國小麥の輸入税を免除せるに歸因して合衆國も加奈陀より的小麥輸入を無税とせるより、一歳を出でずして既に明らかとなつた。即ち一九二〇年に至れば加奈陀小麥は大豊作で、價格の如きも大低落を來し過剰小麥は滔々として無税にて北米合衆國に流入したのである。然し北米合衆國は一九一三年のアンダーウッド法に依つて、合衆國産の小麥に對し輸入税を課せざる國より的小麥輸入には合衆國も亦輸入税を賦課せざることとせるが故に、加奈陀より的小麥輸入に對しても暫く傍觀するの外途の施すものなく、他面安價なる加奈陀小麥のダンピングは米國農民を脅威すること夥しく、此の儘に放任するに於ては著しく同國農民の利益を犠牲に供することとなり、其の結果の恐るべきものあるを看破せる爲め、遂に同年末下院に Forney Bill 提出せられ小麥輸入關稅を一ブツシエルに付き三十仙とせんとした。同法律案は下院通過後上院に於て更に關稅賦課額を三十五仙に修正して通過せしめ、愈々ウイルソン大統領の許諾を得んとしたが、大統領の拒否する所となり最後の一戦に於て破れ又來るべき議會を待つより外、途はないこととなつたのである。此くて一九二一年の臨時議會にも再び同法案は提出せられ農民救濟の急を要することを天下に示し、輿論亦大いに之れに和して、終に五月二十七日所謂緊急法令として其の効力を發生し、爾來外國小麥の輸入に對しては一ブツシエル三十五仙の關稅を課し、加奈陀より安價の小麥が流入するに對抗するに至つた。而して同緊急法令は全く一時的にアンダーウッド

法を補正せる意味に於て有効期間を六ヶ月となし、爾後は依然アンダーウッド法によりものとしたのである。

然るに既に前項にも略述せるが如く、加奈陀と北米合衆國とは小麥生産原價なる根本問題に、重大なる差異あるのみならず、加奈陀の對外輸出餘力が莫大の數量に達する爲め、合衆國小麥栽培者の被る壓迫は一時的効力を有するに過ぎざる右緊急法令を以ては除去するに由なく、一般の輿論は宜ろしく之を永久法たらしむべしと高唱して止まなかつたのである。此くて右緊急法令を永久法令とせんとする議案は、翌年六月下院を通過したるも上院に廻送せられし以來、上院は財政委員會、其他の委員會に其の調査を委ねて時日を経過し、漸く一九二二年八月十九日下院案に二千有餘の修正を加へて通過せしめ、時の大統領ハーディングも亦之れを許諾して同年十月一日より有効となつた。

其の後合衆國に於ける小麥相場は幾分昇騰を辿り、翌年一九二三年三月に及れだのであるが、再び低落に傾き農民の苦衷察するに餘りあるものがあつた。而して終に同年七月に至れば俄然一ブツシエル一弗以下に暴落するに及び加奈陀小麥のダンピングは益々多きを加へ、此に更に猛烈なる農民救濟運動は惹起せらるゝに至り、従つて小麥輸入税引上の論は獨り農村のみに限らず、政治上、社會政策上重要な問題となり、一ブツシエルに付き三十五仙のものを一躍五割引上げ四十五仙とし根本的に外麥のダンピングの餘地をなからしむべしとは一般世間の聲となつたにも拘らず、時の大統領クリーリッジには其の意志毫末もなく、自然の勢に放任せんとせし爲め一時論議沸騰し紛々として底止する所を知らざるものがあつた。輿論の囂々たるに漸く留意してクリーリッジ 大統領が彼



○ U. S. Tariff Commission を設けて該問題に就き、根本的の調査を命じたるは、正に此の秋であつて一九二三年末に當る。爾來委員等は極力合衆國並びに加奈陀の小麥生産上の諸點を研究せること既に前項に於て加奈陀小麥の生産費を論じて之れに言及した通りである。

其の結果北米合衆國は輸入外麥に對して現行法の如く一ブツシエルに就き四十二仙を課税するを適當なりとして、一九二四年四月七日より効力發生することゝなし本日及びことゝなつた。

要之合衆國對加奈陀の小麥關稅問題は、此の兩者が生産費なる決定的分子に著しき相違あると、加奈陀、合衆國、兩國共に小麥生産過剩國なる特殊の關係よりして今後と雖も益々重要視せらねばならぬものと信ずる。合衆國側より觀察すれば安價なる小麥が滔々自國に流入することは獨り農民の疲弊を來すのみならず、其の農業國たるの立場を著しく危殆に瀕せしむる重大事件であり、加奈陀側より見れば等しく其の農業國たる理由より、殊に小麥栽培業が其の第一位を占むるものとせば、當然剩餘小麥を有利に輸出することこそ緊急寸時も等閑に附すべからざる重大事項とせねばならぬものがある。此くて同一生産物を夫々多額に産出し、而も其の根本問題たる生産費を異にし更に全く境を接する兩國間の關係は今後共に益々複雑を來すべきこと今よりして豫見するに難くないと思ふ。合衆國が數次の小麥關稅率引上によつて能く加奈陀小麥の流入を防壓し得るや否やと、加奈陀が此の比較的高率の關稅を物ともせず、依然合衆國に對し輸出の途を見出すやの問題は、今後とも興味の多大なるものあるを肯定せざるを得ない。

### 第七項 加奈陀に於ける小麥の需給關係

小麥の如く食糧品として寸刻も缺く能はざるが如き必需品にして其の需要供給の關係が刻々變化して止まることなきものにあつては、所謂動的需給關係を分明ならしむることは先づ至難とせねばならぬこと、既に合衆國の需給關係を説明せる項に詳説したる所に屬する。従つて本項に於ても合衆國の場合と同様に、主として其の靜的方面より小麥の需給狀態を略説するに止めたいと思ふ。而して此に言ふ靜的小麥需給の何たるやも亦合衆國の場合と同段である。(第二章第二節第七項参照)

#### (イ) 供給

加奈陀に於て近年の小麥生産高が常に其の國內消費量に超過することは、此に論ずる迄もなく前に掲げた諸表によつても知り得らるゝと考へる。而して年の豊凶なるによつて其の産出高に種々甚だしき亂高下を來すこと、並びに其の所以に就ても既に説明した所に屬するが、最近十五ヶ年の統計を基礎とすれば最低産額は一億五千萬ブツシエルにして最高は四億七千萬ブツシエルであり、大凶作なりと稱せられた、一九一八、一九一九、並びに一九二四の三年度に於てすらも、夫々一億九千萬ブツシエルを下つたことなく、殊に一九二四年度の如きは其の前年度に比し約二億ブツシエルの大減收を示せるにも拘らず、尙二億六千有餘萬ブツシエルの生産高を有し、優に國內消費の數倍に達してゐる。然し毎年度の此の收穫せられた總量を全部該年度の供給總量に加算することに



は稍々異論を生ずる餘地を存する。其の一例を示せば、通例收穫高として政府或ひは當路者によつて發表せらるゝものは、品質の可否は勿論、其の他の事情を全然考慮せず、只農民が小麥なりとして刈込みたるものゝ総計に外ならない。従つて其を精撰の場合當然幾分の減少を來すべく、或ひは品質極めて粗悪にして到底最下等品としても一般に取引せられざるものをも生ずることゝなるであらう。是此に此等の不純物、粗悪品を控除せる純實收高を算定する必要がある所以に外ならない。

一九一〇年以降加奈陀政府の發表せる統計表の示す所に準據するに精撰減り(Loss in cleaning)は平均總生産高の三分三厘であり、品質劣悪にして到底最下等品にも屬せしむることを得ざるもの三分六厘に該當する。従つて右兩者の合計額たる六分九厘は當然總生産高より控除せらるゝことゝなり、其の殘高を以て初めて該年度の供給量の一要素をなすべきである。而して該純生産高に同年度間の輸入小麥總量(小麥粉をも加算せるもの)、並びに前年度よりの持越高の總計を合算せるものが純供給量の總量を示す。

次に供給總量の一因子をなす、外麥輸入數量は最近の例に徴するに大林五十萬ブツシエルを突破するが如きは、極めて稀であり、先づ累年の平均を求むるに三十萬ブツシエル程度として大過ない。故に其の總供給量に及ぼす影響は九牛の一毛にも如かぬ。然るに他面其の持越高に至つては大いに趣を異にするものがある。通例加奈陀の持越高は概略千五百萬ブツシエル内外なりと稱する者少なからざるも、此の如きは全く與すべからざる説と言はねばならぬ。何となれば若し總供給高が毎年略々一定の數量を示すが如き場合は、特別な事情の惹起せられざる

限り、次年度へ持越さるゝ小麥量は大略定量とすること、必ずしも不都合ではないが、加奈陀に於ては既に屢々繰返して説明せるが如く、供給量の大部分を占むる累年生産高が年を異にするに従つて、著しき高低あるが故に、次年度へ持越さるゝものに重大なる變化を來すべきことは敢て識者を待たすしても明らかに認められねばならぬことであるからである。

其の適例として一九一六、一九一七兩年度の同國の小麥需給状態を見るに生産高は夫々二億六千二百萬ブツシエル、二億三千三百萬ブツシエルであつて精撰減り(Loss in cleaning)品質劣悪にして商品となし得ざるもの(Umno-ehantable grain)の兩者を控除し、更に同年度の輸出總量を引き去れば、殘餘高は三千萬ブツシエルに達することなく同年度の輸入量をも加算するも一九一六年度に於ては僅かに二千七百萬ブツシエル、一九一七年度には二千九百萬ブツシエルであつて如何でか此の如き僅少な數量を以て一ヶ年の國內食用消費並びに次年度の種子用に當て得べきや。或ひは論者の言へるが如く年々前年度よりの持越高として千五百萬ブツシエル内外のものありとするも、之れを以て消費に當てることは許されない。其の理由は此に述ぶる迄もなく該年度末には必然相當分量の持超を要するからで、換言すれば相當量の持越は絶對的に必要欠くべからざるものであり、此の次年度への持越分をも消費するが如きは特殊の事情のない限り考へ得られないからである。

由是觀之加奈陀の累年持越高を千五百萬ブツシエルの定量とせば、右兩年度の如く全く不合理なる結果を來すも、實は持越高は一定の數量を示には非ずして、一九一五年度が未曾有の豐作なりし爲め、輸出其他一切の消費



を控除するも尙優に一億ブツシル内外の持越ありしによるもので、爲めに一九一六年度、一九一七年度の兩年に亘つて輸出量は該年度の全生産高に殆ど肉迫せるにも拘らず、易々として内地消費量、種子用を補給するところが出来たのである。即ち右の例に依つて觀るも加奈陀に於ける持越高は決して一定の數量を保持するものでなく、各年度の收穫高に高低あれば又従つて同様に著しく異同を示すものとせねばならない。而して他面持越高と稱せらるゝもの意義は極めて漠然たるものにして、國を異にするによつて其の内容も異同あるを免れない。若し正確なる意義に於ける持越高を示さんとせば各種倉庫年度末現在高、公私穀倉年度末現在高、農民保有高、製粉會社手持高、並びに汽車汽船等の交通機關によつて運送中のもの、更に一步を進めては年度末小麥製品現在高を小麥に換算せるものをも含むものとせねばならぬ。

然るに實際問題として持越高を算出するに當つて、右に列擧せる各項目に亘つて詳細に其の現在高を正確に調査することは其の性質上殆ど不可能に屬することであり、政府當局の發表せるもの、如きも主として公私穀倉並びに農民保有高を推定合算せるものに過ぎない。従つて其の數量は常に小量に過ぎざるの憾あるは當然とせねばならぬ。即ち次の如くである。(Monthly Bulletin of Agricultural Statistics, April, 1924.)

一九二〇年度	九、八四八、〇〇〇 ブツシユル
一九二一年度	七、八五六、〇〇〇 "
一九二二年度	一六、〇一三、〇〇〇 "

一九二三年度

八、九三二、〇〇〇 "

他にも加奈陀の年度末に於ける持越高を推算すること、北米合衆國農務省の調査の如きのもあるが、右に掲げたものが政府當局の發表せるもので、最も信するに足るものとするも其の各年度に於ける持越高に多大の相違あるを以て其の小麥持越高を年々略一定數量なりと見ることは大なる誤謬とせねばならない。故に年によつて高低常ならざること此の如き持越高を推算するに當つては、専ら歸納的に前年度の純總供給高より輸出量、國內消費量、種子用等の需要合算高を控除したる殘餘を以て求むるの外途はないこととなる。此くて得られたる持越高は次年度に於ける純生産高、輸入高と共に總供給量を構成するものである。

## (ロ) 需 要

需要は之れを大別して四項目となすことに就ては合衆國の場合と同様である。即ち國內食用消費、種子雜用、海外輸出並びに次年度への持越高に外ならない。右の内次年度への持越高は理論上需要高と稱することを得ざるも一面如何なる國に於ても其の主要食糧品たる小麥の如きものには常に相當の豫備的保有が必要なるのみならず他面需給のバランスを均衡ならしむる爲めに、總供給量より食用消費、種子用、輸出量を控除せる殘存高を便宜上需要高に加算したるに過ぎないものである。故に持越高は供給、需要の兩項に共通に關係を有する特殊の項目と見ることも出来る。而して此等の各種需要項目に就て一々詳細なる數量を算出することは總供給量の各因子に従つて其の數量を求むるよりは遙かに困難なる事情の存するものがあるが、其の概數を求むること、必ずしも至難



の業とするに足らぬ。食糧として國內に於て消費せらるゝ數量は調査する者を異にするによつて異同あるも、製粉高其の他各種の事情を參酌して一人當り約四、七ブツシエルの消費に當り之れを合衆國の農務省、加奈陀政府當局の發表せるものと比するに殆ど合致する。或ひは五、六ブツシエルの消費に當ると稱する者あるも、此の如きは人口の増加率並びに小麥價の高低、其の他の食糧品の需供關係如何によつて幾分の伸縮ある場合の一結果を捕へたもので、必しも正確なるものとなし得ざるべく寧ろ久しきに亘つて加奈陀當局者乃至は北米合衆國の權威者の調査になる前者を以つて推算の基礎とするを安全と信ずる。即ち年平均一人當りの小麥純食用消費を四、七ブツシエルとすれば全國民の年食用消費量は現在約四千二百萬ブツシエル内外と見て大差なかるべく、次に種子消費は各年度の小麦作付反別數の増減によつて高低あるべきは勿論であり、又播種の失敗に終れる場合、再播種を要すること往々あるが故に、常に作付反別にのみ立脚し得ないことは勿論ではあるが此等百般の事情を綜合して、噫當り一、七六ブツシエルの種子消費あるものとせねばならない。従つて最近の如く加奈陀の小麥作付反別數が二千二百萬匁を上下する場合は約四千萬ブツシエルの種子用小麦を必要とすることとなる。

種子用小麦需要に亞いで所謂雜用小麦と稱せらるゝものは主として家畜飼養料に用ひらるゝものであつて、此に特に問題視する程のものではないが、一九二〇、一九二一の兩年の如く小麦の大豐作なりし年、又従つて價格低廉なる時には、其の量二千五百萬ブツシエルの大きに及んだこともある。然し此の如きは寧ろ例外であつて平年に於ては收穫高の二分程度に止まる。

此くて右に説明せる國內食糧消費、種子用、雜用は純然たる國內消費量であつて最近年々約九千萬ブツシエル程度に當る。勿論一九一四年以前、並びに其の後兩三年間の如きは未だ作付反別が千萬匁乃至千五百萬匁であつて、現在に比し數百萬匁少なりしが故に、種子量が僅少なる量にて足りたると、人口も亦今日の大をなしてなかつた爲めに、國內純消費量は五千萬ブツシエル内外に過ぎなかつたことは此に論ずる迄もなく當然である。而して此等の國內消費量を總供給量より控除せる殘餘は即ち同年度の輸出量と次年度への持越高の合算せるものなることは次表に示す如くである。小麦輸出量の説明並びに其の他小麦輸出に關するものは後章詳説する所に屬する。

加奈陀小麦供給表 (單位千ブツシエル)

年 度	實 收 高	精 撰 減 粗 惡 品	純 生 産 高	輸 入 高	總 供 給 高
一九一〇年	一四九、九九	一〇、三四九	一三九、六五〇	三、六	一四〇、〇五
一九一一年	二五、九八	一四、八九三	一〇一、一〇	三	一〇一、一三九
一九一二年	一九九、三三	三、七四七	一九五、五八	八七	一九六、四六
一九一三年	二〇六、七五	一四、五三	一九二、二二	三七	一九二、六六
一九一四年	一五八、三六	一五、〇	一四三、三六	五、〇	一四八、三六



年 度	種子用高	輸出高	消費高	雑用高	總需要高
一九一五年	四三六、七四六	二九、四四五	五九七、三〇一	三三	五九七、六六八
一九一六年	二六三、七八一	一八、三三一	二四四、六五〇	二六六	二四四、九一六
一九一七年	三三三、七四三	一六、一三八	二二七、六一四	三五四	二二七、九六八
一九一八年	一八九、三〇一	一三、〇六一	一七六、二四〇	三三	一七六、五七七
一九一九年	一九三、二六〇	一三、三五五	一九九、九五	一五七	一九〇、〇六一
一九二〇年	二六三、一九	一七、三六〇	二四五、八九	二四四	二四六、〇七三
一九二一年	三〇〇、八五八	二〇、七五八	二八〇、一〇〇	四三	二八〇、六三五
一九二二年	三九九、七八六	二七、五八五	三二二、一〇一	四〇五	三二七、五〇六
一九二三年	四七四、一九九	三三、七二〇	四四一、四七九	四七二	四四一、九五二

加奈陀小麦需要表

(單位千ブッシェル)

年 度	種子用高	輸出高	消費高	雑用高	總需要高
一九一〇年	一九、四三三	五七、八七八	三三、五〇九	二、七九三	一一三、六三三
一九一一年	一九、五五六	七九、三八九	三三、八七一	四、〇一〇	一三六、八二八
一九一二年	一九、三五四	一一〇、五七九	三四、六二六	三、九〇九	一六八、四五六

一九一三年	一九、三六六	一三九、七八三	三五、七七八	三、六四六	一九八、一九三
一九一四年	一八、一二七	九〇、〇三三	三六、一五六	二、八四六	一四八、一四一
一九一五年	二六、五九二	一八三、四九七	三六、九五三	七、九四六	二五四、九八七
一九一六年	二七、〇五一	二九、六七〇	三七、七六七	四、八九三	二八九、三八〇
一九一七年	二五、九七〇	一九、五五六	三八、四四七	四、三五二	二五九、三七五
一九一八年	三〇、五四三	七九、〇三八	三九、一四三	三、五三四	一五二、二四八
一九一九年	三二、五六二	一一三、九八一	三九、八四九	三、五九八	一八八、九八八
一九二〇年	三三、〇八八	一五三、五二六	四〇、五六八	四、九一六	二二二、〇八八
一九二一年	四〇、九三九	一六六、二〇三	四一、三〇六	五、六〇二	二五四、〇五〇
一九二二年	三九、四六四	二五三、四九六	四二、一四四	七、四四四	三四五、五四八
一九二三年	三九、九〇〇	二三八、一一三	四二、八四七	八、八八九	三三九、六八九

(註) 各年度の持越高は正確なる數字を求むるに途なきが故に省略した。

従つて往々總需要高が總供給高を越過することあるも一つに持越高を度外視せる

必然の結果で右諸計算の數字上の誤謬には外す。



北米合衆國、加奈陀の兩國に亞いで我が國の小麥輸入に就て重要にして看過し得ざる地位を占むるものは濠州とせねばならぬ。殊に近來種々の事情よりして濠州小麥が合衆國のものよりは遙かに痛切に我國に於て需要せられてゐることは否定し得ない事實である。勿論小麥生産額の點よりすれば北米合衆國、加奈陀に遠く及ばないのみならず、他の小麥大生産國たる露西亞、印度、アルゼンチン、佛蘭西、伊太利、支那等にも追従することさへ許されぬ状態であつて、只スペイン等と共に幸じて一億乃至一億五六千萬ブツシエルの生産高を有してゐるに過ぎない。然し其の如何に小麥大生産國たるにもせよ露西亞(現在)、印度、支那、佛蘭西、の如きは其の國內消費量も亦多額に上つて輸出豫力を生ずるが如きは、先づ極めて稀であつて反つて莫大の輸入を斷行して不足額を補足せねばならぬ有様であるから、到底年々略一定量の小麥輸出なる現象は期待し得ない。従つて我國の如く莫大の外麥を輸入する立場にあるものに對しては其の數億の生産高も直接的には何等の痛痒も感じないこと、なる。

反之濠州は其の小麥生産額こそは前記諸國に比して少量なるにもせよ、國內消費量が僅少なる爲め濠州が往々週期的に襲はるゝ小麥不作の年を除いては、大体收穫小麥高の過半は輸出し得るものと見て差支ない。其の過剰小麥が世界各國の小麥不足國に積送せらるゝに當つて、我國へも相當多量に輸出せらるゝとせば小麥供給の關係よりして我が國が濠州と密接不可離の關係に立つ所以を知ることが出来ると思ふ。

然し小麥生産過剩國、換言すれば小麥輸出國としては大戰前の露西亞の如きは寧ろ濠州に比して遙かに樞要なる地位を占めてゐた。又現にアルゼンチンも見逃すべからざるものではあるが、此等は皆主として對歐輸出を目的とするものであつて我が國の立場よりすれば、將來は知らず先づ過去現在に於て無關係と言はなければならぬ。其の理由は此に論ずるまでもなく、此等の諸國が地理上我國を去ること遠隔の地にあつて獨り小麥運送費、保険料其の他雜費を多額に要するのみならず、迅速機敏を第一の要件とする商取引に於て運送日数を多分に要するとは時に或ひは好機を逸し、加之甚だしき危険に曝さるゝ虞あるが故に比較的近距离にある諸國に對するが如く圓滑なる取引を希ふことは困難なるに由る。更に一面我が國の製粉業者の立場よりすれば合衆國、加奈陀、或ひは濠州の小麥に對しては相當の經驗を有するが故に何等の不安なくして此れを購入することも出来るのであるがアルゼンチン小麥の如きに至つては未だ嘗つて製粉原料として連續的に購入した經驗に乏しい爲めに果して豫期の結果を得るや否やに就て甚しい不安を伴ふものである。是アルゼンチン小麥が我國に輸入せられざる第二の理由とせねばならぬ。

尤も此の如きは直接彼我の間に小麥の取引の起らざる所以であるが、若し一度近隣諸國の小麥が不作を來し、或ひは交通、通信機關並びに商取引の設備が大いに改善せらるゝに於ては、近き將來に此等諸地方との取引が行はるゝに至るべきことあるは、今俄かに否定することは出来ない。只だ乍然近き將來に小麥生産地帯に異常の變動を惹起して從來の事情と其の趣を大いに異にするか、或ひは前記の如き交通、通信機關が長足の大進歩をなし彼我の



取引が迅速容易に行はるゝに至るまでは我國がアルゼンチン、露西亞等の小麥を直接に而も永續して多量に輸入することは先づ無いと考へられる。

此くて益々濠州が假令其の生産額は必ずしも巨大ならずとするも、我が小麥輸入關係に於ては樞要缺くべからざる地位を占めつゝあり、又將來も同様であると豫想する所以に外ならない。又従つて合衆國、加奈陀に亞いで此に濠州小麥に一瞥を加へる必要を生ずるのである。

### 第一項 濠洲に於ける小麥生産狀況

濠洲が歐洲先進諸國の注意を著しく惹くに至つたのは、正に一八五一年ニュー・サウス・ウェールズ州のマーレー河の上流地方に當るバサーストに於ける金鑛發見に其の端を發する。

由來金鑛其の他貴重鑛産物の發見と未開地の開發は影の形に添ふが如く離すべからざる關係に立つ。加奈陀北部がユーコン地方の金鑛發見により、南アフリカの今日の盛況も亦等しく大金鑛の發見による等皆其の轍を一にして居る。此くて濠洲も亦金鑛發見以來、其の開墾上に顯著なる一紀元を劃した事は何人も否定し得ない所であらう。何となれば鑛山業の發達はやがて人口の増加を促し、各種産業の勃興を招くことは極めて明らかなことであるからである。若し彼の金鑛にして其の發見なかりせば、濠洲の開發程度は恐らく數百年遅れたのであらうと言へる者あるは必しも不當の言ではないと信ずる。今日濠洲に於ける各産業は皆直接間接に金鑛發見と一大關係を有するとせねばならぬ。

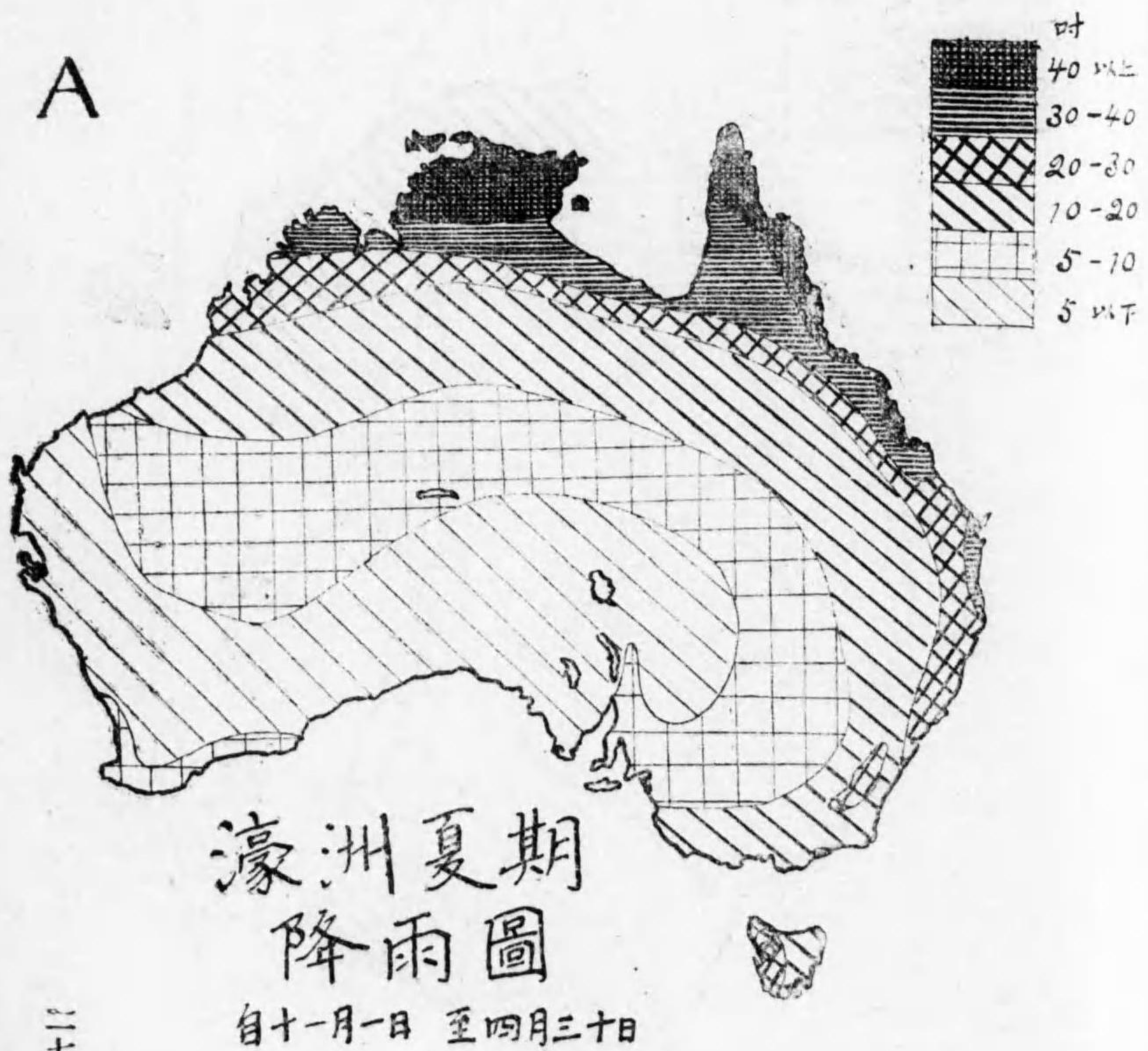
今我々の研究せんとする小麥栽培に就ても亦然りと言はざるを得ない。勿論十八世紀の中葉、濠州が英國探検家に依つて幾分づゝなりとも開拓されつゝあつた事は否定し得ないが、其の範圍は極めて極限せられた一小部分に過ぎずして十九世紀の當初に於てさへ濠州は全く不毛の地として一般に一顧だにされなかつた事は衆目の皆一致する所である。乍然此の故を以て當時に同地農業が全然行はれなかつたとするのは早計で、早きは一七八八年代から假令極く僅少なりしにもせよ、小麥其の他の穀類が收穫された事實があり、其の栽培も専ら白人農業者に依つて行はれた。而して其の農耕地は専らニュー・サウス・ウェールズ州の東部海岸地方即ちオーストラリア・アルプス並びにブルー山系以東に限られてゐたのである。一七九七年代の記録によれば該農耕地中小麥の作付段別は三、三六一エーカーに及び十五年後なる一八〇八年代には約倍加して六、八七七エーカーに達し、獨りニュー・サウス・ウェールズの東部海岸のみならず、ヴィクトリア、クイーンズランド、サウス・オーストラリア等の沃肥の地にも徐々に移植せらるゝに至つた。然し其の作付反別増加の程度は寧ろ極めて微々たるもので此に特筆すべき程のものでないことは言ふを待たぬ。其の一例として一八五〇年には全濠洲の農耕地積が僅かに五四三、一九〇エーカーに過ぎなかつたに依つても知り得らるゝであらう。

元來濠州は氣候、風土の關係よりして必ずしも農耕地に最適なりと言ふことは出來ない。寧ろ其の大部分は不毛の地として價値なきものであらう。只だ稍々有望なるものとしては東部海岸地方、マーレー川流域並びに西部海岸地方に過ぎなかつた。此れ當時濠州が農業地として進歩の遅々たりし所以であり又従つて勞働力、資本金も

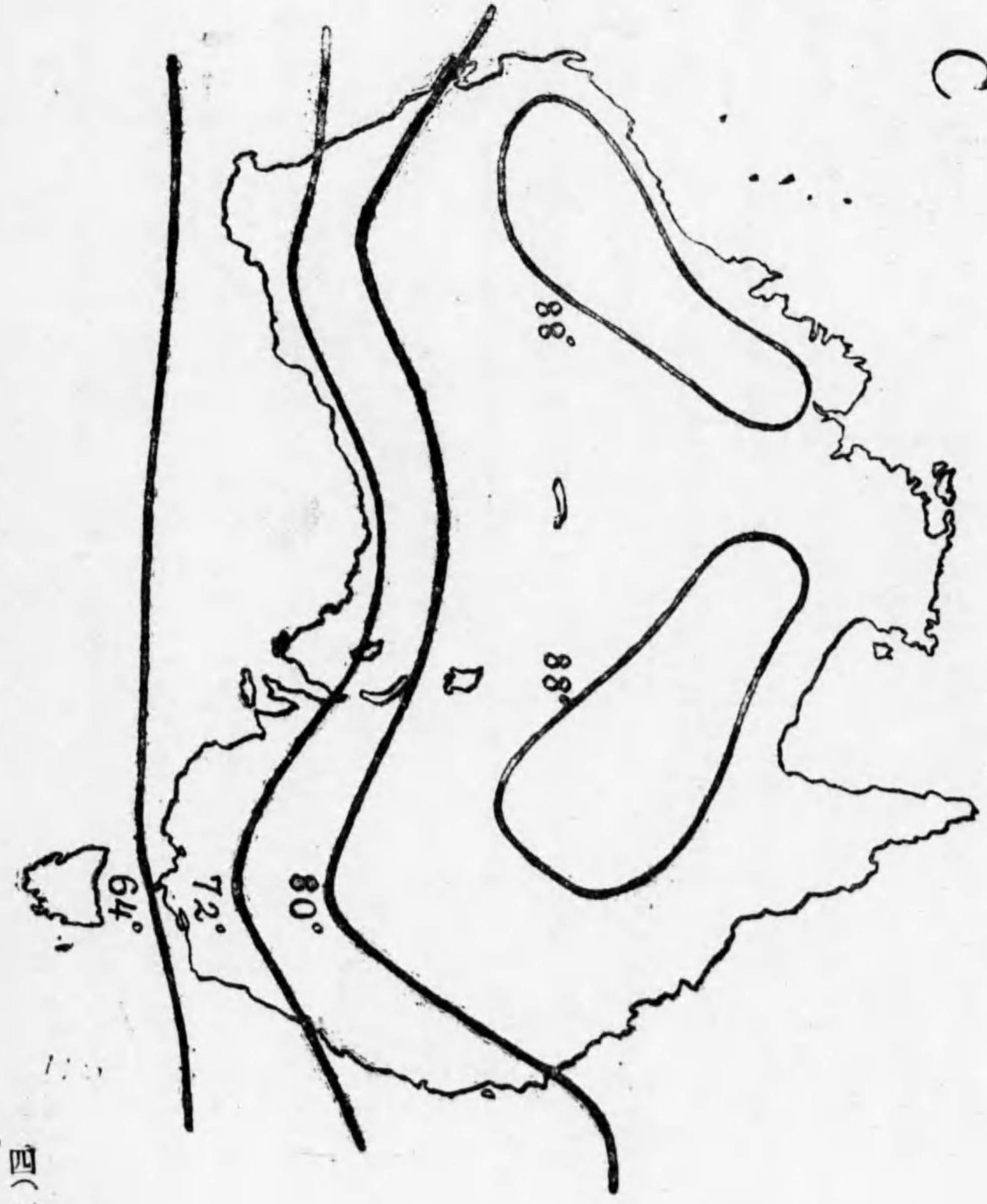


意の如く集中しなかつた理由である。然るに一八五一年の金鑛発見は此に全世界の注意を一時に集攬した。歐洲人殊に英國人は先を争つて此の地に殺到して採鑛に従事することとなり、此くて住民の増加は此に農業大發展の基石を置くに至つたものである。論者或ひは濠洲に於ける金鑛発見を以て農耕地の大減少を來し農業發達上に一大障碍を爲せりとするは偏見にして一顧の價値なきものと言はざるを得ない。彼の農耕地が金鑛発見の次年度に激減せるは全く一時的の現象であつて、其の理由の一に農夫が鑛夫に早變りをした事も數へらるゝであらうが、其の最も根本的なるものは濠洲獨特の旱魃により稍々廣大なる農耕地が放棄せられたに依るもので、一八五三年度よりは従前通り五十數萬エーカーの耕地が耕耘されたにも明らかである。以來其の甚大なる耕地の増加は前記の如く金鑛発見の餘波なることは今や何人も一点の疑を挟む事を許されない。

次に濠洲の氣候、風土、地味の状態を略説し小麥栽培の沿革に進むこととする。濠洲は其の地積二、九七四五、一八平方哩に當り東西二千四百哩、南北二千哩に達し北半は熱帶地方に屬するが故に氣候炎熱にして、小麥栽培地としては極めて不適當なるも、南半は溫帶地方に屬するが故に其の栽培には一見適當するかの外觀を呈してゐる。然し同南半は或ひは其の特有なる旱魃に襲はるゝこと多きのみならず、又往々小麥開花期、結實期、收穫期に當つて豪雨を齎すことあるを考慮すれば、其の小麥栽培に全く適合する地方は比較的小範圍に限られて一二の有利なる事情に依つて直ちに小麥栽培好適地とするとは出來ない。今濠洲の氣温、降雨量に就て圖示し以つて其の小麥栽培との關係を明らかにすれば次の如くである。



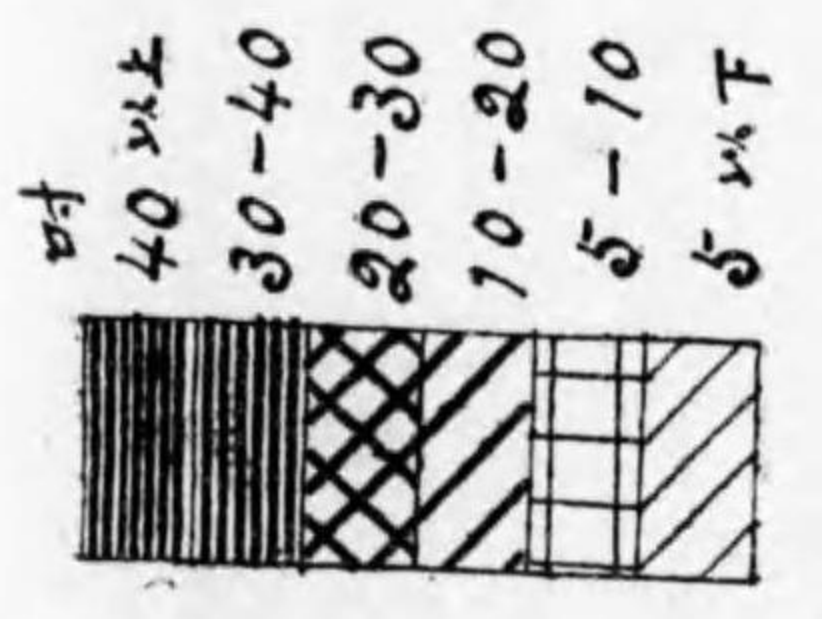




濠洲夏期氣溫線

C

B



濠洲冬期  
降雨圖

自五月一日 至十月三十一日

(1) 圖(1)





既に世人の熟知するが如く、濠洲は概して周邊に丘陵多きが故に内部地方に水雲の浸入するを妨げ、或る特殊の地方を除いては極めて寡雨なること大陸内部の特徴を遺憾なく發揮してゐる。而して冬期（六月—八月）大の半襲はるゝ場合は主として東南部地方に降雨多きことは、B圖に示した通りであるが反之北部、中部、西部南風には降雨量は年平均十吋乃至五吋以下に過ぎない。然るに濠洲に於ては小麦の播種期が五、六月の候を以て最も適當とするは從來の経験によるも明らかであるから、前にも屢々論ぜるが如く小麦播種期の降雨量の適、不適の点より觀察すれば、東南部並びに西南隅の二地方が小麦栽培に適するに過ぎないこととなる。更に同じく播種期の気温を検すれば、C圖の如く北部の大半は五十六度以上であつて此亦小麦栽培に適當なる高温と言はねばならない。従つて播種期の各種條件を考慮すれば北部地方は大部分小麦の栽培には適合せずして、南部のニューサウス・ウェール、ヴィクトリア、サウス・オーストラリア、ウエスト・オーストラリア或ひはニュー・ジージーランドが適合する所以である。更に開花期乃至收穫期（十二月—一月）の天候を標準とすれば、気温の点よりすれば大体に於て濠洲全土必ずしも不可ではなく、往々北米合衆國北部、加奈陀或ひは歐洲東南部の小麦地帯に於て経験さるゝ收穫期の霜害の如きは同濠洲では殆ど問題とするに足らないが、其の降雨量に至つてはA圖に示せるが如く北半は多雨にして年平均四十吋以上に達するものがあるが故に、先づ全然小麦栽培には不適當とせねばならない。只南地方が二十吋乃至十吋の程度で前者に比し遙かに好適と言ひ得る。従つて播種期の気温、降雨量並びに收穫期半の降雨量を參酌して考慮する時、小麦栽培に適合する地方は濠洲の東南部、西南隅即ちクイーンズランドの東南



地方、ニュー・サウス・ウェールズの東部乃至南部地方、ヴィクトリアの全部並びにウエスタン・オウストラリアの西南隅のみで其の他は特に人智の進歩し各種の人工的施設、例へば灌漑溝等が普及せざるまでは未だ廣大なる耕地を得ることは出来ないと思はなければならない。

次に濠洲に於ける小麦栽培上最も重大な悪影響を與へるものとして是非記憶すると要するものは旱魃であらう。若し濠洲農耕地にして著しき減少を示さざるにも拘らず、同年度の農作物收穫高に激減を來せる場合は、先づ大体に於て大旱魃の結果と推定して差支ない程である、殊に内部地方に至れば兩三年間全然降雨なくして謂はゞ焼土をなすもの少なからざるに依つても其の一端を窺ふことが出来る。従つて中部地方一帯は殆ど無人の境をなし農耕の如きは當分夢想だに許されぬ状態に置かれてゐる。獨り中部地方のみならず周邊の諸地方も往々にして乾期打續き土壤を焼き農作物を根本的に損傷することは争はれぬ事實であり、之を小麦栽培に就て見るも一八九四、一八九五、一八九六、一九〇二、一九〇七並びに一九一四の各年度の如きは皆一様に旱魃によつて其の作付段別には別段の變化なかりしにも拘らず、小麦實收高は大減收を來し、平年ならば少なくとも數千萬ブッシェルの輸出餘力あるべき筈なるに一朝にして小麦輸入國となつた例に乏しくない。殊に一九〇二年の如きは大旱魃の結果たる小麦の不足を主として北米合衆國のワシントン、オレゴン等の大平洋岸諸州より仰ぎたるが故に、該地の小麦相場をして狂騰せしめたことは世人の熟知せるところである。

乍然近來諸所に灌漑の施設に専念するものを生じ、或ひは政府當局が自から其の開鑿に従事し、或ひは組合を

組織し又は小規模ながら個人として其の地質的構成が一般に井水によつて相當多量に給水の望あるを利用して、又は河流の利用によつて、更に進んでは貯水設備の完成に努力しつゝあるが故に、其の成就せる曉には往年見たるが如き旱魃の大害は漸次減殺緩和せらるべけれども、未だ其の完備は近い將來に期待することは困難で、依然として旱魃の大害が屢々繰返さるゝことを豫期せねばならぬであらう。

濠洲の小麦栽培に就は右に述べたるが如く、氣候上よりして稍々甚だしい障礙はあるが而も一八五一年の金鏝發見以來人口の増加と共に着々其の作付段別を増加し、終に今日小麦大生産國の一員として天下に其の令名を走らすに至つた経路は、次の統計表によつても明らかとせねばならぬ。

年 度	作 付 段 別	人 口
一八六〇年	六四四、〇〇〇 エーカー	一、一四五、六〇〇
一八七〇年	一、一二三、八〇〇	一、六四七、八〇〇
一八八〇年	三、〇五四、三〇〇	二、二三一、五〇〇
一八九〇年	三、二二八、六〇〇	三、一五一、四〇〇
一九〇〇年	五、六六六、六〇〇	三、七六五、三〇〇
一九一〇年	七、三七二、五〇〇	四、四二五、一〇〇
一九一一年	七、四二八、〇〇〇	



一九一二年	七、三四〇、〇〇〇	
一九一三年	九、二八七、〇〇〇	
一九一四年	九、六五一、〇〇〇	
一九一五年	一二、四八五、〇〇〇	
一九一六年	一一、五三三、〇〇〇	
一九一七年	九、七七四、六五八	
一九一八年	七、九九〇、一六五	
一九一九年	六、四一九、一六〇	
一九二〇年	九、〇七二、一六七	五、四一二、三〇〇
一九二一年	九、七一九、〇四二	
一九二二年	九、七七八、六一〇	
一九二三年	九、四九七、〇〇〇	五、六三五、〇〇〇
一九二四年	一〇、八〇〇、〇〇〇	

以上の如くして一八六〇年代と現在とを比較するに、人口數に於ては約五倍の増加を示せるに他面小麦作付段は僅に十五倍の増加を來してゐる。而して其の増加の趨勢は一九一四年度に至るまで稍々順調で、亂高下を示

してはるないのであるが、一九一五年度乃至一九一六年度に至るや一躍して耕作地積は二百萬噓乃至三百萬噓の大増加を呈した。此の事情に就ては此に詳説する迄もなく前述の合衆國の場合と同様に歐洲大戰亂の勃發に歸因するものであり、殊に濠洲は専ら食糧供給ふて點より聯合國を援助せんとする政治的關係より、政府當局は勿論一般人士も極力小麦栽培を奨励した事に其の第一の理由を求むる事が出来る。他面後章小麦の價格に就て論ずる項にも明らかなるが如く歐洲大戰亂の間接的影響として、小麦の相場は世界的に大暴騰を來し農民の收入を増大せしめ、更に爾後も其の世界的相場は持續すべしとの豫見は益々小麦栽培を刺戟せざるを得ないこととなり、農民が自發的に其の作付段別を増大せるは其の二因であらう。

然るに一九一七年並びに一九一八年度に至るや俄然其の作付反別は再び大戰直前の九百萬噓台に下り、殊に後者の如きは八百萬噓にも達しない有様となつた。當時の小麦相場を見るに必ずしも慘落せるには非ずして一九一六年六月の一ブツシエルに付き一弗五仙を最低として漸次急騰を示し一九一七年の如き濠洲小麦の播種期たる五月の候には既に一ブツシエルに付き三弗に達せんとする有様なりしにも拘らず、同年度より急激に小麦作付段別の減少せるは稍々理解に苦しむ所である。殊に其の前年度たる一九一六年度の世界小麦生産高が不作にして、平年作に及ばること數億ブツシエルの多きをに達せるを見れば、右の如き事情が世界小麦界の影響によるともそのことは出来ない。而して此の點に關しても亦歐洲大戰亂の一餘波は濠洲に特殊なる小麦洪水の一大恐慌を惹起せしめ作付反別の激減となつたのである。即ち歐洲大戰當時濠洲は其の政治的立場よりして必然英本國並びに



聯合國を援助することゝなつたが、其の地理的關係からして數多の軍隊を派遣たるが如きは、不可能な爲め専ら軍需品、就中食糧品の補給なる点で盡力する事に決した。

従つて其の生産する小麥の如きも、此れを中立國其の他の諸國へ輸出する事を禁止して、獨り聯合國のみに供給する態度に出でた。然るに當時戦地、並びに交戦國に於ては、莫大の食糧品を需要して止まなかつた事は言ふ迄もないが、只だ軍需品の輸送の爲めに海運界は大多忙を極め濠洲の小麥を充分に輸送するが如きは不可能な状態にあつたのである。其の結果は彼の有名なる濠洲の小麥野積貯藏となつてあらはれた。當時彼の地にあつた其の野積の光景を目撃した者の談によれば、殆ど測定し得ざる程大量の小麥は山積せられ、而も蜿蜒として數哩にも及んだとさへ極言せられてゐる。

其の言ふ所を全部事實として受け容れない迄も、濠洲が當時如何に莫大の小麥を保有しつゝあつたかの一端を窺ふに充分だと思ふ。殊に一九一七年度の如きは世界を通じて小麥相場は極度に奔騰して、農民の收支經濟は極めて有利なるにも拘らず、濠洲の小麥作付及別が激減せるを見れば其の間の消息を更に裏書きして餘りありと言ふの外はない。此れ濠洲が更に多量の小麥を全然必要とせざるに歸因するものであつて、單に作付反別數の点のみより觀察すれば漸く戦前の常態に復歸したものと見て差支ない。

然るに一九一八年歐洲の大戦亂も漸く終結を告げ平和克復せらるゝや濠洲は益々其の貯藏小麥の處置に困難を感じ殊に長月日の間全く何等の外被もなく野曝とされた小麥は大いに其の品質を下落せしめ、加之一九一七年後

半よりは世界の小麦相場も漸落歩調を辿るやうになつた爲めに、此に農民の小麦生産に對する熱心は大いに弱められ、一九一八年の約八百萬噸に次いで一九一九年には急落して六百萬噸臺に下り、此れを一九一五年度の千二百萬噸に比すれば正に半減するの止むなきに立ち至つたのである。

乍然此の如き事情は所謂反動期に於ける一時的現象であつて、其の儘に放任するもやがて戦前の状態に復歸すべきことは明らかであつたが、政府當局も農民の保護施設には大いに意を用いて其の回復を一日も速かならしめんことに力を盡し、他面終に翌一九二〇年に至れば歐洲大戦後の好景氣と小麦相場の世界的暴騰とは兩々相待つて再び平年の九百萬噸の作付反別數を示すに至つた。

之を要するに濠洲に於ける小麦作付反別數は一時的、變態的の大増減はあつたにもせよ、大体に於て極めて順調に増加を示したものと云はねばならぬであらう。而して今後も尙ほ開發せらるべき沃野の必ずしも僅少なならざるを思へば、相當の程度までは人口の増加乃至は資金の増殖と共に、益々加増を示すべき傾向にあることは否定し得ない顯著なる事實とも見る事が出来る。

以上説明せる所に依つて概略ではあるが濠洲の小麦栽培が如何なる情况にあるやを知り得たと思ふ。従つて更に一步を進め各地方別に其の状态に一瞥を與へることとする。最近數年間に於ける濠洲各州に於ける小麦作付反別は其の政府當局の發表する所に據れば大約次の如き數字を表はしてゐる。



年度(單位噶)	ニューサウス ウェールズ	ヴィクトリア	タイレンス	サウス オーストラリア	ウエスト オーストラリア	タスマニア	フエデラル ケルトリヤ
一九一七—一八年	三、三六、八五六	二、六九、〇三〇	二、七、八二五	二、三三、五六二	一、四九、七六三	二、八二二	五二五
一九一八—一九年	二、五九、六三三	二、二四、九八〇	二、三、六七七	二、一八、八三九	一、一五、一〇九	一、九一七	三
一九一九—二〇年	一、四七、〇三五	一、九八、二六九	四、六、四七六	一、九三、九二五	一、〇五、一八三	二、一、九七	一三
一九二〇—二一年	三、一三、七五五	二、二五、八六五	一、七、三三〇	二、一六、六四四	一、二七、五七五	二、八、二八	六〇三
一九二一—二二年	三、一五、四〇八	二、六二、一八八	一、四、六三〇	二、三三、〇三三	一、三三、三三八	二、七、九六五	五八一
一九二二—二三年	二、九三、一四〇	二、六四、三三四	一、五、三二五	二、一四、一〇六	一、五〇、七七八	三、一、〇〇	

(註) 最近二三年のものは此に摘録するを得ざるもの一般の説く所によれば  
右に示せると大体其の傾向を等ふるものゝ如し。

右の表に據れば作付反別の点に於てはニュー・サウス・ウェールズ (New South Wales) 第一位を占め、ヴィクトリア (Victoria)、サウス・オーストラリア (South Australia)、ウエスト・オーストラリア (West Australia) 此に亞き、クイーンズランド (Queensland) は前四者には未だ遠く及ばない憾がある。而してタスマニア島 (Tasmania) に至つては到底前者と對比すべくもないが、其の全地積が極めて狭隘なるを考慮すれば、寧ろ廣大なる小麦栽培地を有してゐると言つてもよい。然し後にも述ぶるが如く耕地の廣狹が必ずしも小麦生産額を左右するものではないから、次に濠洲全体の小麦生産額の變遷乃至其の特質を論じて、各州別に其の優劣を説くこととする。

濠洲に於ける小麦の移植並びに其の作付反別数の變遷に就ては既に前に詳説したが、其の反面に此等の事項に關連して年々幾何の小麦實收高を擧げつゝあつたかは次に研究せらるべき問題である。只十九世紀の末葉に於て濠洲が小麦栽培上急激なる大發展を遂げたる各年度の實收高は、一々此を求むること極めて困難で準據すべき正確な文献はないが、濠洲政府當局其の他専門家の發表せるものを一八六〇年代より列擧すれば、

年 度	實 收 高
一八六〇年代	五、一五二、〇〇〇 ブッシェル
一八七〇年代	八、九九〇、四〇〇
一八八〇年代	二四、四三四、四〇〇
一八九〇年代	二五、八二八、八〇〇

であつて、最大豊作の時と雖も三千萬ブッシェルを突破するが如きは先づなかつと言つても差支ない。然るに二十世紀に入つてからは年の豊凶に依つて稍々甚だしい差等はあるにしても年實收高が三千万ブッシェル以下に下つたことは、僅かに一九〇二年度及び一九一四年度の小麦大凶作の場合のみであつて、其の他の年度には此の如き例を求むるに難い。即ち次表に示すが如くである。

年 度	實 收 高
一九〇〇—一年度	四九、八七七、〇〇〇 ブッシェル



一九〇一—二年度	三九、七五三、〇〇〇	ブツシエル
一九〇二—三	一二、七六八、〇〇〇	〃
一九〇三—四	七六、四八八、〇〇〇	〃
一九〇四—五	五六、二一五、〇〇〇	〃
一九〇五—六	七〇、六八一、〇〇〇	〃
一九〇六—七	六六、四二一、〇〇〇	〃
一九〇七—八	四四、六五六、〇〇〇	〃
一九〇八—九	六二、五九〇、〇〇〇	〃
一九〇九—一〇	九〇、四一四、〇〇〇	〃
一九一〇—一一	九八、一〇九、〇〇〇	〃
一九一一—一二	七三、八九四、〇〇〇	〃
一九一二—一三	九四、八八〇、〇〇〇	〃
一九一三—一四	一〇六、六〇一、〇〇〇	〃
一九一四—一五	二五、六七七、〇〇〇	〃
一九一五—一六	一八四、七〇九、〇〇〇	〃

一九一六—一七年度	一五七、二二四、〇〇〇	ブツシエル
一九一七—一八	一一八、三四九、〇〇〇	〃
一九一八—一九	七五、六三八、〇〇〇	〃
一九一九—二〇	四五、九七六、〇〇〇	〃
一九二〇—二一	一四五、八七四、〇〇〇	〃
一九二一—二二	一二九、〇八九、〇〇〇	〃
一九二二—二三	一〇九、四六〇、〇〇〇	〃
一九二三—二四	一二五、六五四、〇〇〇	〃
一九二四—二五	一六四、〇四一、〇〇〇	〃

右統計表によつても知り得らるゝが如く濠洲に於ける小麦生産高は逐年着々として増加を示してゐると言つても差支ない。只だ其の増加率が必ずしも作付反別と相並行するには非ずして、時に或ひは甚だしい亂高下のあつたことは否定することの出来ない事實である。是先きに濠洲の氣候を詳論せる所に述べたるが如く、濠洲に特有なる早魃、乃至は收穫期に於ける暴雨に歸因するものであつて、此の點前節に説いた北米合衆國、加奈陀と稍々趣を異にしてゐるところであらう。殊に一九〇二年度、一九一四年度、一九一八年度並びに一九一九年度の如きは右の事情に由る小麦收穫大激減の代表的標本とも稱することが出来る。



然るが故に豫め年々生産さるべき小麦數量を測定することは極めて困難なることに屬するのみならず、過去の事實に就いてさへ其の收穫數量の變動甚だしきに一驚を喫する程である。乍ら過去數十年の長きに亘つて早魃乃至は豪雨の爲めに著しい打撃を受けたる年次を仔細に觀察すれば、茲に極めて興味多き一事實を發見することが出来る。即ち早魃、豪雨に依る不作は必ずしも確定的には非ざるにせよ、稍々週期的に循環することに外ならない。實例に依つて説明するに最近約三十年間に於て著しい不作なりし年次は大略一八九五、一八九六、一九〇二、一九〇七、一九一四、一九一九の五回であつて其各不作なりし年度の間隔は四年乃至六年に該當する。換言すれば濠洲に於ては過去の事實を基礎とすれば四年乃至六年毎に一回の小麦不作の不祥事を豫想しなければならぬと云ふ。併し前にも述べたが如く早魃の災害に備ふるに人工的灌漑施設を以つてすること大いに進むに至れば、其の不作に襲はるゝ「プロバビリティー」が大いに減少さるゝことは識者を俟ずして明らかな事であらうが、現在の灌漑設備を以つて全く早魃の害を除去するに足るとは考へ得られないから、今後と雖も早魃、又は豪雨の小麦收穫高に及ばず影響に對しては甚大の注意を拂はねばならないことは勿論である。

次に右小麦の生産高は既に作付反別に就て記述せる各地方の小麦實收高の合算せるものであることは言ふ迄もないが、其の詳細を濠洲政府當局の發表せる表に依つて州別に示せば左の通りである。

年度(單位ブツシエル)	ニューサウスウェールズ	ヴィクトリア	クイーンズランド	サウスオーストラリア	ウエストオーストラリア	タスマニア	フエデラルキャピタルデトリリー
一九一七年度	三七七、〇六三	三七、七七、五五一	一、〇三五、二六八	二八、六六、五九四	九、三〇三、七六七	二五三、三三二	七、三七四

一九一八	一八、三四、六二〇	二五、三九、八七一	一〇四、五〇九	三三、九六、九五	八、八四五、三六七	一八六、五七〇	三六〇
一九一九	四、三七、三〇九	一四、八八、八六〇	三二、六三八	一四、九〇、四三三	一一、三三、九五〇	二二、五八九	八三三
一九二〇	五五、六〇、九三三	三九、四六、八二五	三、七〇七、三五七	三三、三五八、九一四	一一、二四八、〇八〇	五五、八七四	一四、〇〇四
一九二一	四三、七五九、三九八	四三、八六七、五九六	三、〇三五、七六六	二四、九四六、五五五	一三、九〇四、七三二	五七、七二八	七、六二二
一九二二	二八、五九四、〇〇〇	三五、六九七、三〇〇	一、八七七、八三六	二八、七八四、七六七	一四、〇三三、七三三	四四、〇〇〇	
一九二三	三三、三〇〇、〇〇〇	三五、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	三五、〇〇〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	(暫定)
一九二四	五九、七五五、〇〇〇	四七、三三三、〇〇〇	二、七三三、〇〇〇	三三、〇〇〇、〇〇〇	二二、九三三、〇〇〇	三六、七〇〇	

同表によるも明らかなるが如くヴィクトリア州は其の小麥作付反別數に於てこそ第二位で在るが其の收穫高の點よりすれば比較上第一の地位を辱しめぬものと言ふことが出来、ニュー・サウス・ウェールズ州はヴィクトリア州と殆ど勢力伯仲の間にはあるが、其の作付反別數が後者より優る點を見れば當然第二位に置かるべきであらう。是氣候、風土の關係よりして墮當りの收穫率がヴィクトリア州に及ばざるに由ると言ふの外はない。而して今後とも特別の事情の惹起せられざる限り、此の趨勢は持續するものと見て大過ないと思ふ。其の他の州にあつては作付反別の前二者に比して狹隘なるのみならず、其の收穫率の如きも下位にあるが爲めに、其の生産高が遙かに少量なることは必然であらう。只「タスマニア」島の如きは氣温、降雨の狀況が極めて好適なるものがあるが故に、其の收穫率が他の何れの州にも優れるものあるは蓋し當然で只地域の狹隘なるを憾みとする。



由來濠洲は今此に論ずる迄もなく小麥栽培の沿革極めて淺きのみならず、氣候上の障碍も前述の如く多々あるに依つて適當りの收穫率の多きを期待することは出来得ないのである。即ち一九一三年度より一九二二年度に至る十年間の平均小麥收穫率は、四ブツシエルであつて此を州別に示すに其の第一位を占むるものは、タスマニア島の、一八、三四ブツシエルで此に亞いではフエテラル・キャピタル・テリトリの、一四、九六ブツシエルであり、クイーンズランド、ヴィクトリア、ニュー・サウス・ウェールズ、は夫々一三、一八ブツシエル、一二、八二ブツシエル、一一、六二ブツシエルを示し、以上の五地方は共に全濠洲の小麥平均收穫率以上に達してゐるが、サウス・オーストラリア、ウエスト・オーストラリアの二州は平均數量にも及ばず、前者は一〇、五九ブツシエル後者は九、一一ブツシエルに過ぎない。而して其の最近の收穫率を州別に表示すれば、

濠洲州別小麥收穫率 (單位 ブツシエル)

年 度	ニュー・サウス・ウェールズ	ヴィクトリア	クイーンズランド	サウス・オーストラリア	ウエスト・オーストラリア	タスマニア	フエテラル・キャピタル・テリトリ	オーストラリア平均
一九一七年度	一一、三三	一四、一〇	八、一〇	一一、一八	七、四四	一一、五七	一四、三三	一一、七五
一九一八年度	七、六〇	一一、四〇	八、八三	一〇、九二	七、七三	一五、六六	一〇、〇〇	九、四七
一九一九年度	二、九八	七、七五	六、七一	七、七七	一〇、七七	一八、五八	五、八五	七、二六
一九二〇年度	一七、九	一七、一九	二〇、九	一五、八〇	九、六〇	二〇、一	二二、三	一六、〇八
一九二一年度	一三、元	一六、八〇	一八、七	一〇、四六	一〇、四	二〇、六三	一四、〇七	一三、一八
一九二一三年平均	二、六三	二、八二	二、八二	一〇、五九	九、一一	一八、三四	一四、九六	一一、四〇

であつて、同表は獨り州別並びに全濠洲の適當りの收穫率を示すのみならず、年を異にするに依り或ひは所を同ふせざるに依つて如何に其の收穫率に亂高下を來すやを如實に示すものであり、殊に一九一九年度の早魃が如何なる程度に小麥栽培を害したかを明示して遺憾ないと思ふ。

第二項 濠洲に於ける小麥の需給

濠洲に於ては既に前項に於て詳説せるが如く、早魃其の他の障碍の爲めに小麥生産高が激減せざる限り、大部分の收穫小麥は餘剰として、海外諸國の需要に應ずることが出来ると斷言して差支ない。本章第一節の末尾にも列擧せるが如く濠洲住民の一人當り小麥消費量は、他の諸國に比し決して僅少には非ざるも、其の人口が極めて稀薄にして一九二三年度の政府當局の調査報告に據れば、僅かに五、六三五、〇〇〇人に過ぎずして、震災前の我東京市民の約二倍半にも及ばない状態である。従つて如何に其の一人當りの消費量が多大なるにもせよ、總消費量は言ふに足らぬこととなる。殊に其の人口増加の程度と小麥作付反別増加の趨勢とを考慮すれば、今後も尙ほ久しきに亘つて小麥生産過剩國としての地位を確保するものと見て大過ないと考へる。即ち一九〇〇年代に人口は三、七六五、三〇〇人であつて現今に至るまで、約二十有五年の間に漸く五割五分の増加を示してゐるに反して、小麥作付反別数は殆ど倍加の状態なるを思へば、右の事情を一層明瞭ならしむるものであらう。只だ先にも述べ



たるが如く一九〇二年度、或ひは一九一四年度の如き大凶作に際しては、少なからざる外國小麥の輸入を企て、以つて内國の消費に當てねばならないが、謂はば此の如きは全くの例外的事實であつて、先づ大体に於て小麥生産高が遙かに内國小麥消費高に超過するのを以つて常態とする。以下段落を分つて需給に一瞥を與へることとする。

(A) 供給

濠洲の小麥供給の九分九厘までが其の生産するものなることは、同國が通例小麥生産過剩國なるに依つても知らるゝ如く全く當然の事である。此等自國産の小麥の外に毎年多少の輸入(小麥粉)がない理ではないが、此に問題とする程のものではない。従つて供給小麥總額は専ら同年度の生産額に前年度の持越高を合算せるものとして差支ない。而して其の持越高に就ては、次の需要の段落にも述ぶるが如く小麥作の豊凶如何に依りて著しい異同はあるが概略千萬ブッシェル乃至二千萬ブッシェルであり、毎年度の生産高に就ては既に再三論述せるが如く作柄の良、不良に依つて甚だしい高低あるが故に、其の數量を正確に斷言することは出来ないが、便宜上最近五ヶ年間の平均高産を求めれば一一一、二〇七、二三九ブッシェルに當つて此を現在の作付反別數並びに其の收穫率と對照するも殆き相一致してゐる。而して其の生産高中よりは當然精撰減(Loss in cleaning)並びに品質粗惡の爲め食用に供し得ないとされてゐる Unmarketable Wheat の七、七八四、五〇六ブッシェルを差引が故に實際に商品として取引の目的たるものは約一〇三、三二二、七三三ブッシェルに當る。従つて濠洲に於ては小麥總供給量は持越高、收穫高を合せて平年にて約一億乃至一億二千萬ブッシェル内外とすることが出来るやう。

(B) 需要

小麥の需要は此を食用消費、輸出、種子用並びに持越高の四者に大別することが出来る。而して其の累年の食用に供せらるゝ數量は大休三千万ブッシェル以内であつて同國政府當局の發表せる所に據れば左の如くである。

年 度	一人當り食用消費量	總食用消費量
一九〇〇年度	五、四八ブッシェル	二〇、〇六九、〇四九ブッシェル
一九一〇年度	五、四〇	二四、五八五、七八三
一九一五年度	四、三〇	一一、三八八、五〇〇
一九一六年度	五、八六	二八、八二五、九〇〇
一九一七年度	六、〇四	三〇、〇九四、四五〇
一九一八年度	五、四八	二七、八二四、五五〇
一九一九年度	四、九八	二六、三九六、五〇〇
一九二〇年度	五、二五	二八、四二四、四〇〇
一九二一年度	四、九九	二七、四七三、五〇〇

右の統計表を基礎として一人當りの食用消費の平均をとれば略ぼ五、三三ブッシェルに該當し、更に同平均消



費量に立脚して最近の總食用消費量を推算すれば約三〇、〇三四、五五〇ブツシエルとなる。

次に種子用小麥として毎年使用さるゝものは、年に依つて多少の差異を示すは必然であるが、一九一二年度より一九二二年度に至る十ヶ年の平均に依れば一噓に付き〇、九一八ブツシエルであつて、今假に濠洲の小麥作付反別数を千萬噓と假定すれば總種子量は九、一八〇、〇〇〇ブツシエルを算することゝなる。其の他雜用として家畜其の他の飼育料に使用さるゝものも年々五百萬ブツシエルを下らないことは事實であるが、此には通例品質極めて粗悪にして到底小麥として一般に取引されないもの、即ち所謂 Unmerchantable Wines を主として充當すが故に此に需要量として考慮する必要は先づない。

此くて濠洲内部に於ける年々の純消費量は大約四千五百萬ブツシエルを超過することは全くないと言つて何等の不都合もない。而して次年度へ持越さるゝ小麥數量は必ずしも一定してはるないが、通例該年度の實收高の約一割内外であるから大体一千萬乃至二千萬ブツシエル程度であり、如何に豊作の場合と雖も二千萬ブツシエルを超過すること多大なるが如きは考へ得られないことである。勿論特殊の事情のあること彼の歐洲大亂中の如きは當然別問題であつて、或ひは其の持越高が莫大の數量に達せるを以つて右述べたる事實を否定することは出来なす。

以上の各需要項目の合算は僅かに五千萬ブツシエル乃至六千萬ブツシエルであつて、平年の總供給高の漸く半分に過ぎずして、殘餘の半數は當然海外の需要に應ずべく輸出せらるるものである。今左に最近十數年間の小麥

純輸出量(小麥粉をも含む)を列擧すれば、(濠洲政府發表)

一九一一年度	六三、二一三、〇〇〇	ブツシエル
一九一二年度	四〇、三一六、〇〇〇	〃
一九一三年度	五三、〇九九、〇〇〇	〃
一九一四年度	五、〇二二、〇〇〇	〃
一九一五年度	二九、七三七、〇〇〇	〃
一九一六年度	六八、六二一、〇〇〇	〃
一九一七年度	四一、六八五、〇〇〇	〃
一九一八年度	六八、七三一、〇〇〇	〃
一九一九年度	一〇八、三五六、〇〇〇	〃
一九二〇年度	八八、二七三、〇〇〇	〃
一九二一年度	一一七、九三二、〇〇〇	〃

であつて右十一ヶ年の平均純輸出量を計算すれば約六千二百萬ブツシエルに該當し、前述の推算と全く符合することゝなる。即ち濠洲の小麥作付反別数にして異常の變化のない限り、而も作柄が可もなく亦不可もない場合は、年々六千數百萬ブツシエルの過剩を來し當然輸出し得るものとする事が出来る。而して一九二四、一九二



五兩年度の如く、小麥大豐作に際しては優に一億ブッシェル内外の輸出餘力を生ずることは又此に言ふ迄もないこととせねばならぬ。

### 第五節 アルゼンチン、露西亞、印度

前三節に於て稍々長きに亘つて北米合衆國、加奈陀並びに濠洲の三箇國の小麥生産状態、需給情況を比較的詳細に研究したが、其の理由は既に説明せるが如く、此等の諸國が獨り其の小麥生産上共に一方の雄たるが故のみには非ずして、我が國が常に其の消費する小麥に不足を告げ、必然諸外國より輸入せざるを得ざる立場にあり、而も前記三國が交通上よりは勿論、其の他百般の商取引に關し極めて好都合の地位にあるからである。然るに之に反してアルゼンチン、露西亞、印度並びにルーマニアの如きは、其の小麥生産高に於ては共に斯界の重鎮として重要視せらるゝ立場にはあるが、此を我が國の不足小麥補供の点より觀察すれば、何れも遙かに前記三國には及ばない。現在に於ては殆ど全く直接の關係がないと言つても不可ない程である。具体的に論ずればアルゼンチン露西亞、ルーマニアの如きは假令如何に巨額の輸出餘力を有するにしても其の相去ること極めて遠隔なる爲め、或ひは其に附隨して生ずる數多の障礙の爲め、此を我が國に輸入せんとするが如きは、萬止むを得ない事情のない限り全く考へ得られない事であり、印度の如きも能く年々三億有餘萬ブッシェルの小麥生産高を有するにもせよ、其の大半が同國內の消費に充當せられ、對外輸出餘力は最大に見積るも數千萬ブッシェルを出でざるのみな

らず、其の過剰小麥の大部分は、金融其の他の商取引の關係上、主として英本國に積送せらるゝに於ては、我が國への主要なる小麥供給國とは考へ得られない。加之其の我國を去ること海路五千哩以上の多きに達するを見れば尙更のこととせねばならぬ。

右述べたるが如き理由よりして、我が國は近き將來にアルゼンチン、露西亞、ルーマニア、印度より直接多量に小麥の供給を仰ぐ事は望み得ないと言ふの外はない。従つて以下右諸國の小麥生産状態を述ぶるに當つても大略其の外割に一瞥を加ふるに止めたいと思ふ。

### 第一項 アルゼンチン

現在アルゼンチンが小麥生産過剰國として、又従つて年々多量の小麥を輸出するを以て斯界に重きをなすつゝあることは言ふまでもないことであるが、其の今日の名聲を博するに到つた経路を辿れば極めて短日月の間にあることに一驚を喫する程であらう。此の點、前述の加奈陀と相類似するものであつて、歐米に於ても世界の小麦に就て著名なる學者並びに實際家も皆等しく、將來小麦の生産額に於て又其の輸出餘力に於て兩者共に世界に冠絶し、戦前の露西亞乃至は現在の合衆國の地位を奪ふものとの豫想を下してゐる。

惟ふに小麦栽培に適合する廣大無邊の土地と、適當なる氣候、風土並びに人口の稀薄なるに依つて國內消費の比較的僅少なるが爲め其の生産されたる小麦の大半を海外需要國に輸送し得ること、更に其の小麥生産過剰國と



して著名となつたのが十九世紀の末葉乃至二十世紀の當初よりなるとの事情は殆ど全く加奈陀及びアルゼンチンに共通なる事實と言はざるを得ない。

然るに加奈陀に於ては、近來年々少なくとも三億プツシエル内外多きは五億プツシエルにも垂んとする小麦生産状態なるに反し、アルゼンチンが豊作に際しても未だ二億プツシエルを突破すること極めて稀なるを見れば、何等かアルゼンチンの小麦栽培法に就て、又は其の他の点に關して加奈陀に遠く及ばないものがあると思ふべきでない。今其の主要なる原因とも考へらるべきものに説明を加へ、順次同國の天候、土壤、交通状態及び其等の小麦作付状態に及ぼす影響に就て言及したいと思ふ。

顧るにアルゼンチンに小麦が初めて移植せられたのは十八世紀の中葉に屬して、天候、土壤、其の他の關係よりして大いに其の栽培の進展を見るべかりし状態にあつたにも拘らず、此に唯一の障礙が而も其の當初にあつた事を否定することが出来ない。即ち當時アルゼンチンには既に大いに牧畜業が進歩の域に達して、小麦栽培に適當なるべき地面は所謂 *Great Cattle Kings* に分有せられ而も其の牧畜業者は殆ど全く農耕なることに期待を持たざるが如き態度を持してゐたのみならず、其の牧場が幾分なりとも農耕地に變化することを極度に嫌つてゐた事實すらあつたのである。

是同國が四圍の事情の小麦栽培に適合するにも拘らず其發展を見る事が出来なかつた最も重大な理由の一に數へねばならない。従つて今日より僅かに四十年前以前に於ては同國の小麦生産額は其の内地消費高にも達しな

い二千五百萬プツシエル乃至三千萬プツシエルに過ぎなかつたのである。而して障礙の第二に數へらるべきものは農耕制度の拙劣なると、農業労働者の無智、不節操であらう。アルゼンチンが新開國なるの理由よりして一般に労働力に缺乏せることは加奈陀、濠洲と何等撰ぶ所はないが、殊に同國は農耕には必要欠くべからざる勤勉着實にして、而も刻苦して尙倦まざる農業労働者に全く缺けてゐたと言はなければならぬ。此の点合衆國並びに加奈陀の開墾當時のものとは其の素質に於て全く雲泥の差あつたものと見る事が出来る。即ち當時アルゼンチンに労働者として移住せるものは、全く農耕に何等の經驗を有せざるものか、然からずんば行商、靴工にして自活し得ざる、謂はば無頼の徒が一攫千金を夢み、又は小成に安じて直ちに故山に歸らすとする無氣力の者のみを網羅したとも稱し得らるゝであらう。而して彼等の中にはスペイン、露西亞其他歐洲諸國からの移民もあつたが概ね過半は伊太利人であり、其の生活程度は極度に低く又従つて其の労働能率の低いことは言ふ迄もない。而も彼等は如何なる辛苦を経ても一定の土地に永く住居を構へ、其の農耕地をも所有せんとするが如き希望は毛頭ないのみならず、一定の農場又は其の他に僅かに一ヶ年と繼續して労働に従事するものすら極めて稀なのである。甚だしきに至れば一ヶ年に數度其の雇主を變更し、其の曉に僅かの貯蓄を得れば直ちに歸國するを殆ど常例としてゐる。

此の如き伊太利移民の移動甚だしい原因としては一には伊太利に於て冬期間職を失へる者が出稼的にアルゼンチンに渡航するが如きことも考慮せねばならぬであらうが、此を他の新開地の移民状態と比較して稍々感慨の深



いものあるを禁じ得ない。右の事情を最も雄辯に証明する一事實は一九〇〇年北米合衆國に於て國勢調査を斷行せる時、農業労働者として移住せる者の内三分の二は多少に拘らず其の耕す地面を購入して自己の所有に屬せしめ、營々とて其の奮闘を続け長く定住するの覺悟を示し、僅かに三分一が所謂小作人として地主の耕地で労働に従事してゐるに過ぎざるに反してアルゼンチンに於ては當時移民の大半は小作人で、自己の所有に懸る土地に農耕を營む者は三分の一にも足らぬ有様であり現在も尙其の域を脱してゐない。此に依るも如何にアルゼンチン移民の質の拙悪なるやの一端を窺ふに足ると思ふ。更に此の小作農耕法に關連して、彼等移民が無智にして救ふべからざるものあるのみならず、延いては小麦其他の農産物の産額が着々増加せざる一大缺點がある。即ち小作人が其の地主に對して地代を納付するに最も合理的なものも現金拂であらねばならぬにも拘らずアルゼンチンの小作の支拂ふ地代は九割五分まで、*Milano* であり英語の所謂 *Share System* であつて小作人は其の家族と共に地主より貸與せられたる土地に小麦其他の栽培に従事するが、他面地主は殆ど自由勝手に其の作物を雜穀商に賣り拂ひ、其の手取金の一部乃至は農作物、其他の現品を小作人に給與するに過ぎないのである。従つて小作人が如何に刻苦勉勵するも謂はば其は水の泡で利益の殆ど全部は地主に奪取し去られて、辛じて己が生活を保ち得るに過ぎないのである。而も小作人は其の小作制度を改革するの智と勇とを缺き、而して無智にも又半ば自暴自棄となつて其の業に熱心を缺く事となるのである。是アルゼンチンの小麦生産高、換言すれば收穫率が永く停滞して上進せざる重大な一因であらう。反之 *Arundatario* 英語の *Cash System* による地代支拂方法は僅か

に五%を占むるに過ぎない有様であり今後と雖も尙ほ當分は後者の合理的な制度に改革さるゝとも思はれない。右の事實はアルゼンチンが小麦生産の点よりして常に加奈陀其他の新進國と伍を共にすることの出来ない第二の因とも言ふことが出来やう。

其の第三因とも稱すべきは同じく農耕制度の拙劣なることに屬するが耕地を其の能力以上に求むる傾向のあること此である。通例合衆國、加奈陀並びに濠洲の如き新開國に於ては、獨り小麦栽培のみならず他種農作物の栽培に於ても事情の許す限りに於ては大農法を有利とするのみならず、労働力の關係より必然に然かあるべき筈ながら、他面アルゼンチンに於ては其の一人當りの耕地の廣大なる點こそは稍前者に酷似するも、其の主旨に至つては全く趣を異にしてゐる。既に前述せるが如く移民の小作人は何等の方針もなく、只だ全く一時的の賭事の如き考へを以つて小麦栽培に従事する者の多い關係よりして其の借り入るゝ地積の如きも大略三百噓内外で、主として家族のみの労働力に依つて其の耕作に従事するものである。嘗つて同國政府が此等小作人の耕作地平均段別を調査せる結果によれば、二百四十七噓の廣さに達し、中には一家族を以つて四百噓以上を耕作せんとする無謀の小作人をさへ生ずる有様であつた。勿論機械力其他文明の利器を應用するに於ては、何等怪むに足らない事ではあるが、寧ろ原始的な農耕法に依り而も其の經驗に淺い者が此くも廣大なる耕地を一家族を以つて耕耘せんとするが如きは全く暴も甚だしいと言はねばならぬ。而して其の結果毎年廣大の耕地が一畝をも加へられずして擱置さるゝ所は決して乏しくはない。



嘗つてアルゼンチンの四大小麦生産地方たる Buenos Aires, Santa Fe, Cordoba, Entre Rio の小麦栽培者の  
耕地面積を調査せるものに依れば、

一二四噺以下の耕地を有するもの	一三、七八六戸
一二五—二四七 噺の耕地を有するもの	八、六九〇
二四八—四九四	八、六四二
四九五—七四一	二、〇九一
七四二—九八八	四七九
九八九—一、二三五	一八七
一、二三六—一、四八三	九〇
一、四八四—一、七三〇	三七
一、七三一—一、九七七	一七
一、九七八—二、二二四	一五
二、二二五—二、四七一	五
二、四七二噺以上の耕地を有するもの	二八

であつて其の農民が如何に耕地の廣大なるを望むやの一端を知るに足ると思ふ。

又若し彼等小作人の間に自治、協調乃至は自助の念に富む者あれば近代式の科學的なる大農法を採用すること  
も出来るのであらうが、今の状態にして彼等に此の如きものを望むことは木に縁つて魚を求むるより尙困難な事  
であらう。其の小麥栽培に際しても種子の選擇、耕耘の入念、耕地の手入の如きことは殆ど全く等閑に附せられ  
收穫に際して成績不良なるが如き事あれば、何等の未練もなく借地を放棄して他地方に移住するを日常の茶飯事  
の如く考へてゐる。

然し右の如き事情は獨り無智にして節操なき移民小作人間の小麦栽培に對する態度を述べたに過ぎないが、近  
來英國人又は米國人に依つて經營せらるゝ大農場では大いに科學的大農法を採用し、種子の選擇、耕地の整理其  
の他も合衆國、加奈陀に比して遜色ないものがある。而して此等の大農法に依つて生産せらるゝ小麦量は先づ同  
國全産額の二割五分乃至三割五分に達し今後も益々此の種の農場の經營せらるゝ傾向にあることは大いに賀すべ  
きことであらう。殊に以前は所謂 *Cattle Kings* が其の牧場の一噺と雖も小麦栽培に使用することを望まなかつ  
たものさへも漸く其の不利なるを悟つて、小麦栽培に多大の注意と興味を抱くに至つたことは、従前のアルゼン  
チンに對して一大光明を投じたものと言つても過言ではないと信ずる。

アルゼンチンの小麦栽培の發展に障礙となつた最後のものは交通機關の不備とせねばならぬであらう。勿論現  
在は鐵道の延長二萬二千哩有余に達し他の南米諸國の總合計せるものより長く、更に河川を利用することも甚だ  
多いが、其の國土の廣大なるに對比すれば此れを以ても未だ満足すべきものではない。何となれば氣候、土壤其



他の關係よりして當然小麦栽培地たるべきものも未だ全く未開のまゝに放置せらるゝは一に其の鐵道網の不備によると言はねばならぬからである。況んや以前未だ鐵道網の發達せざる時に於ておやと言はねばならぬ。然し此の點は獨りアルゼンチンのみならず他の何れの新開地にも經驗せられた所であるから今此に更に論述するのを避けたいと思ふ。又小麦栽培地と鐵道停車場との交通連絡機關の如きも主として二輪又は四輪の騾馬車、牛車又は馬車で尙小麦大生産國として改良の餘地多々あると言つてもよい。

今念の爲めに右に擧げた諸障礙中圖示し得らるゝ牧畜業の全土を蔽へると、鐵道網とを示せば次の如きものがある。

亞爾然丁  
牧羊圖



亞爾然丁  
鐵道分佈圖





以上述べたるが如く種々雑多の障碍ありしにも拘らず、アルゼンチンは依然小麥栽培地として地の利を得てると言はねばならぬ理由が多々あることは否定し得ない事實である。

其の第一に數へらるべきは全く地理的關係で濠洲と共に南半球に位し、其の小麥收穫の時期が北半球の各小麥地帯に於ける收穫が終了したる約三ヶ月後に當り國際的小麥の需給關係より極めて好都合なるのみならず、アルゼンチン自身よりも利益の大なるものがあることである。

其の前者の適例としては一九〇七年度或ひは一九一七年度にアルゼンチン以外の小麥生産國に於ては稍々甚だしい不作なりし爲めに、小麥價の如きも騰貴を示し一般に生活の脅威を惹起したが右各年度末より翌年度に亘つてアルゼンチンに於ては大豐作なりし爲め、小麥價暴騰の氣勢を稍々防止するを得て世界一般の生活を大いに安易ならしめたが如きであり、其の後者の例としては世界一般の小麥供給が需要に及ばざるが如き事情の明らかとなつた場合に、同國は徐ろに其の小麥收穫に着手し輸出するものであるから同國全体よりして國富を増加するは勿論一般農民も著しく利益せらるゝこととなり一九〇八年、一九一五年、一九一七年、一九二〇年の各年度に於て又最近は一九二五年度の上半期の如き皆然りと云はねばならぬ。

其の第二に數へらるゝものは同じく地理的關係であるが同國が小麥栽培に最も適合する温帯に屬することであらう。即ちアルゼンチンは其の北部地方の一部は熱帯に又他の一部が準熱帯とも稱すべき地方に位して、既に再三述べたるが如く小麥栽培地としては全く不適當ではあるが、南緯三十度乃至三十二度以南は五十二三度附近に至

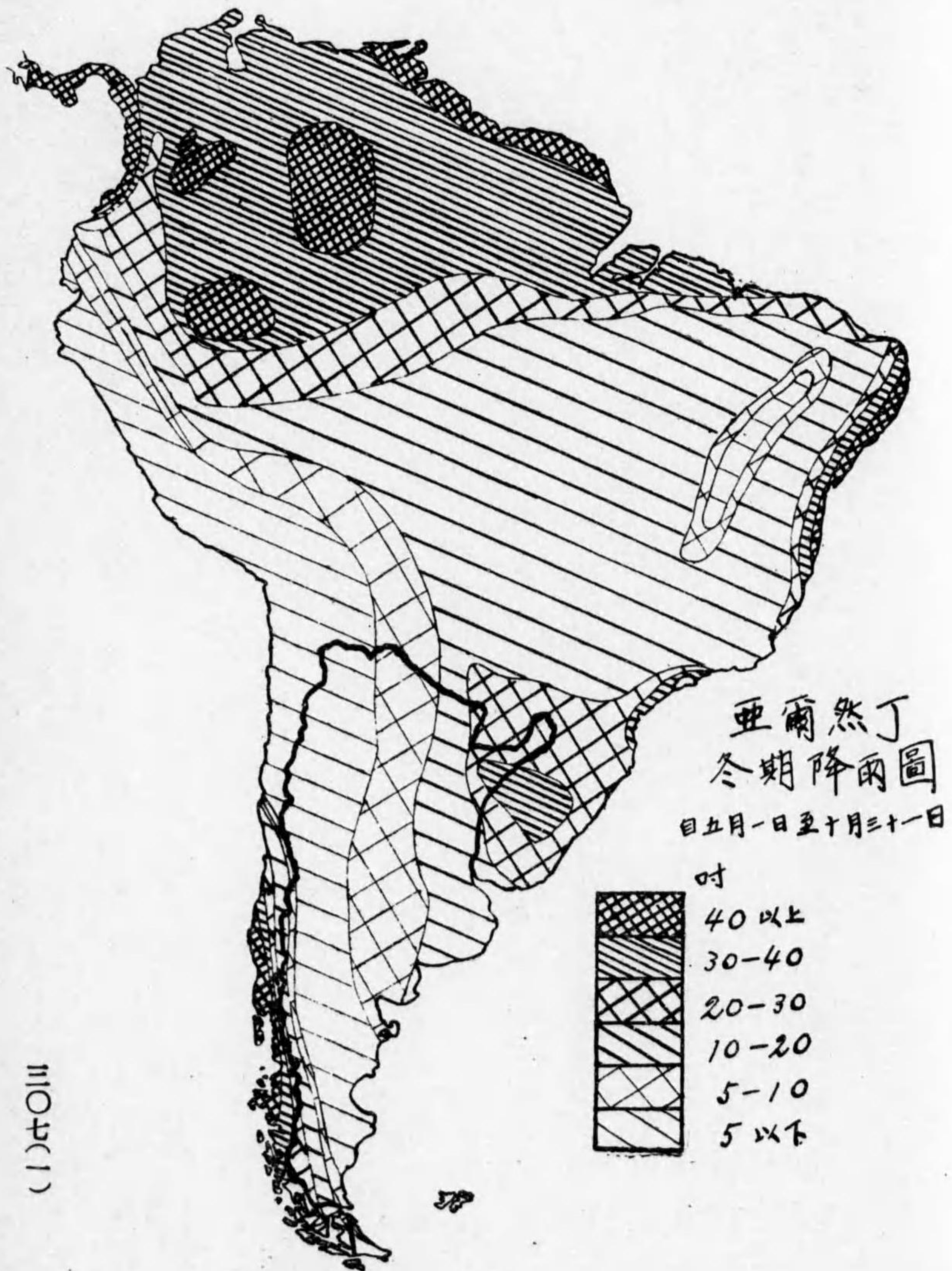
るまで約南北千四百哩の間は小麥栽培地として氣温の關係よりして先づ適當し、就中ブエノスアイレス (Buenos Aires)・コルドバ (Cordoba)・サンタフェ (Santa Fe) 並びにアントリオ (Entre Rio) の四州の如きは全く理想に近いと言つても不可ないと思ふ。具体的に説明すれば此等諸州の北部に當る所は恰も合衆國のオクラホマ州の北境と全く相類似する。而して後者は北半球に位する關係より北進するに従つて漸次熱帯地方に遠ざかり、小麥栽培地として令名高きカンサス、ネブラスカの諸州、更に進んでは所謂春蒔小麥地帯を形成し、其の延長は深く加奈陀の内部にまで達してゐる。他面アルゼンチンは南半球の而も熱帯地方以南に位するが故に合衆國、加奈陀の場合とは正反對に南進するに従つて氣温は低落し小麥栽培に適當なる事は敢えて説明する程のこともない。

今北亞米利加洲の小麥分布の状態に一瞥を加ふれば、既に詳説せるが如く、氣温の点よりして其の最も理想的なるは北緯三十二度に當るオクラホマ州北部以北より遠く北緯五十二三度に該當する加奈陀のエドモンド (Edmond) プリンス・アルバート (Prince Albert) 附近に亘る一帯の地域とせねばならぬであらう。従つて此に又アルゼンチンに於ても大体氣温を中心點とすれば南緯三十二度附近たるサンタフェ市 (City of Santa Fe) 附近以南より南緯五十二三度附近即ちマゼラン海峡 (The Strait of Magellan) を超へて Archipago of Tierra Del Fuego を含む一帯の地域に小麥栽培が可能なるべきであらう。勿論氣温の如きは必ずしも緯度の高低によつてのみ定めらるべきものではなく海流、地形等の關係も大いに關與するものではあるが、南米の南半の氣温状態は北米よりも四期を通じて遙かに温和にして而も小麥成長初期の平均温度が六十八度を超過せざる事實よりすれ

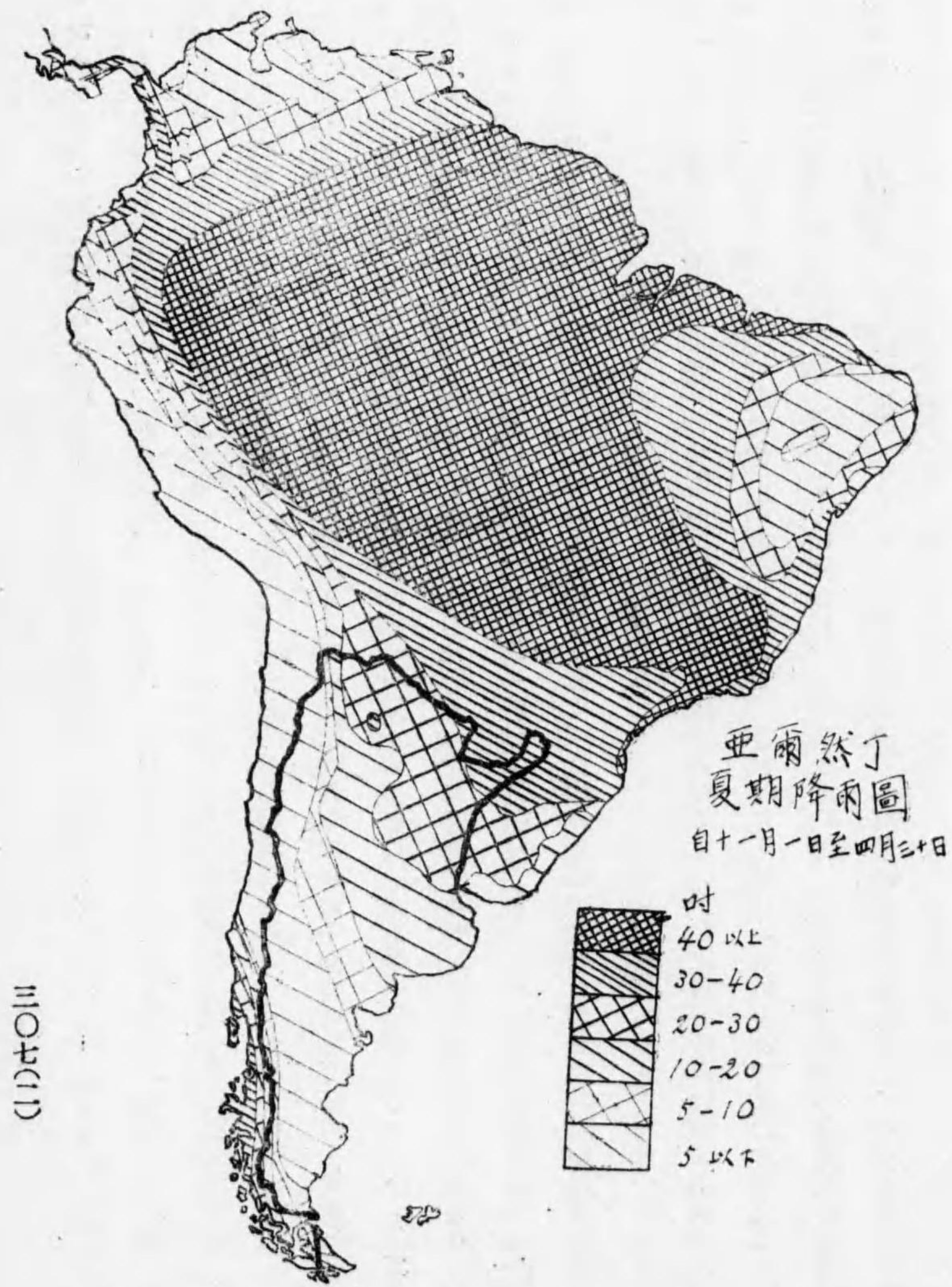


ば右に述べたる地域が気温の點よりして小麦栽培に適合すると斷言せる事は寧ろ當然である。今日現に同國小麦の分布状態を見るに正しく概ね右の範圍内にあるに依つても知らるゝ所であらう。又此を同國の小麦栽培の沿革に求むるも十九世紀の末葉に小麦栽培者がサンタフェ市以北に小麦を移植せんと再三試みたものではあるが全然失敗に歸し一九〇〇年代以後は専ら南進の方針に依つて今日の名聲を博するに至つたことは既に世人熟知せる處に屬する。只此に一言注意すべきは、右の如く気温のみに着眼すればアルゼンチンは恐らく當代隨一の小麦生産國として斯界に最重要の地位を占むる事は必定であるが、同國が現在の小麦生産状況を以つてしては未だ合衆國、加奈陀に及ぼさるもの多々ある事實よりして他に何等かの缺陷あることを認識しない理にはいかない。其の缺陷が農耕制度の拙悪、交通機關の不備、牧畜業の盛大なるに歸因して所謂 Great Cattle Kings が小麦栽培に興味を持たない事に就ては一言した所に屬するが其の最も重大なるものは降雨状態と言はねばならぬであらう。勿論現在アルゼンチンが年々二億ブツシエル内外の小麦を生産するは一つには気温の好適なるにもよるであらうが一つには降雨の度宜しきによるものと言ふことも出来ぬ理ではない。

然し若し同國に於ける降雨状態が更に一層小麦栽培上有利に置かれるならば終にアルゼンチンは一躍加奈陀乃至は合衆國と其の覇を争ふ事となつたであらうと思ふ。従つて今左に同國の降雨状態が一面にはアルゼンチンをして今日の如く小麦大生産國たらしむるに至つた理由と、他面には同國が加奈陀、合衆國に及ばざるものあるも一つに懸つて其の降雨状態にあることに説明を加へたいと思ふ。







亞爾然丁  
夏期降雨圖  
自十一月一日至四月三十日

时
40 以上
30-40
20-30
10-20
5-10
5 以下

1104(11)



アルゼンチンは南半球に位するが故に我國より見れば春夏秋冬の四期は全く相反し九月、十月、十一月は春、十二月、一月、二月は夏、三月、四月、五月は秋、六月、七月、八月は冬に當る。而して既に述べたるが如く小麦收穫期は夏期たる十一月下旬より翌一月下旬に及ぶものであるから、其の播種期は冬時小麦に於ては五月、六月の晩秋乃至初冬の候であり、春時小麦ならば八月下旬乃至九月であらねばならぬ。

然るに第一章に於て詳論せるが如く小麦は其の性質として發芽當時乃至成長期の初期に於ては稍々多量の水分を必要とするのである。但し年平均降雨量が三十吋乃至四十吋以上の多きに達する事の禁物なることは此に再び述ぶる迄もない。而して前圖に示せるが如く五月乃至十月に至る六ヶ月間のアルゼンチンの降雨状態を見るに大体三分することが出来、略西徑六十二三度以東は全部年平均一〇吋—二〇吋であり、アンデス山系に沿ふて南北に一貫する地方、即ち西徑六十六七度以西は全部五吋以下に屬し、此の兩地帯に挟まれ幾分瓢箪形をなす地帯は五吋以上十吋である。従つて此等の降雨量を標準とすれば、主として小麦栽培に最適なるものは第一の地帯であり、第二、第三地帯は前者に比し遙かに劣等の地位にあると斷するの外ない。加之後者の兩地帯は本項の當初に述べたるが如く、交通機關の不備、其の他の理由よりするも小麦栽培に不利なるものがあるが故に當分は同地帯から小麦の多大なる産出高を期待することは全く出来ない。只今後交通状態、農業に必要なべき各種の施設が農民の増加並びに其の教養と共に達成せらるゝならば相當の程度まで一部分は冬時小麦地として他の一部は春時小麦地として開拓さるゝこと必ずしも不可能ではないであらう。

以上述べた各種の事情を綜合するに現在アルゼンチンに於て小麦栽培地として優秀の地位を占むるものはエントルリオ、ブエノスアイレス、サンタフェ、コルドバの四州を中心とする一帯の地であり、其餘波はラパンパ州 (La Pampa) の東部、東北隅、サンルイス州 (San Luis) の東部並びにサンシヤマン州 (San Juan) ナリオジャ州 (La Rioja)、カタマルカ州 (Catamarca)、サンチャゴデルエステロ州 (Santiago Del Estero) に及び而して同國の南部に位する諸州並びに其の邊境の諸州は全く小麦の生産のないこと次頁に圖示する如くである。

此に只一言是非注意するを要するは同國は概略、乾期、雨期の兩期に大別せられ乾期は通例四月に始まり九月に終り、雨期は十月より翌年三月末に至るものである。従つて比較的多雨なるを理想とする播種期、發芽期、成長期には寡雨であり、反之開花期、乳種期乃至は收穫期に至れば理想としては寡雨なるを最上とするにも拘らず、恰も雨期に當るが故に、前述せるが如く小麦栽培上の第一要件とも稱せらるべき Dry Summer Rainy Winter とは全く相反すること前掲、A、B、の二表によるも明らかである。故に萬一同國の小麦開花期乃至收穫期に著しい降雨ある時は當然小麦の産出高に大影響を及ぼすべく、從來の経験によるも往々其の害ありしことは此に一例証するまでもないことであらう。更に此のアルゼンチンの Dry Winter Rainy Summer の天候は獨り小麦栽培上のみならず、他の農耕にも不便多いものがある。即ち寡雨なる冬期間は先きにも一言せるが如く氣候概して溫和なるが爲め各種の雜草類も枯死するに至らず、只雨なき爲めに一時其の成長を中止してゐるが、次いで多雨



亞爾然丁  
小麦作付分布圖



にして而も氣温高き夏期が到來するに依つて必然大いに繁茂し、其の結果小麦の作柄に一大打撃を與へるは勿論收穫せられたるもの品質も下落せざるを得ない。

右の雑草の害と共に忘るべからざるは熱風の被害と、虫害の二者を擧ぐることが出来る。熱風は恰も合衆國のカンサス州又はミネソタ州に間々襲來するものと同様に十一月、十二月の候に北方より襲ふものであつて爲めに、開花期乃至收穫期にある小麦が甚大な打撃を受けた事は一再に止まらない。次に虫害、病害として特に同國に特有なものを擧げることは出来ないが、唯だ一つ所謂蝗蟲の害に就ては一言する必要があると思ふ。其の蝗蟲は俗にアンデス山系蝗蟲(Andes Mountains Locusts)と稱せらるゝものであつて、既に説明した合衆國のレッドリヴァーの谿谷を襲來して小麦に大害を與へた Rocky Mountains Locusts と共に小麦虫害中では有名なるものに屬してゐる。其の發生地に就ては種々の議論が行はれてゐるがアルゼンチンの北部に位するボリヴィヤ(Bolivia)の南方乃至はブラジル(Brazil)西部で通例シャコ地方(Territory of Chaco)と稱せられてゐる一帶の地とする最も多數説としてゐる。然し蝗蟲の性質として比較的溫暖にして寡雨なる砂地に産卵するものであるから右述べた、地方にも大いに發生すべき理由があるが、尙ほアルゼンチンのメンドザ(Mendoza)、サンジュアン(San Juan)地方にも發生すべき可能性に富むことは否定出来ないことで一九二四年の如きは十月末より十一月に亘つて右地方が寡雨なりし爲め蝗蟲は其の食物に窮して其の東方なる小麦地帯に襲來した程である。而して同國を襲ふ蝗蟲は大別して二種とすることが出来、一つは羽を有して自由に飛涉するものであり(Langosta Volante)と稱



せられ、一つは羽を有することなく匍這するもので (*Tangosta Saltona*) と呼ばれるものである。其の *Tangosta Volante* たる *Tangosta Saltona* たるを問はず、一度發生すれば概ね大群をなして飛涉又は匍這するものであつて、其の状況は寧ろ凄い程で、一八七五年合衆國カンサス州を襲へるもの、如きは巾百呎深さ六吋乃至七吋に及んで堂々農耕地に押寄せたと言はれてゐる。アルゼンチンに於ても一八八九年より一八九七年の間に約三億四千七百萬噐の耕地が蝗害を蒙り其の驅除費に年々政府の補助せるもの、みにても四百萬圓以上に達し、一九〇一年以來は従前の如き大害は免れてゐるが尙年々相當の被害は覺悟せねばならない。

而して *Tangosta Saltona* は其の發生後概ね七週間位は生存するもので其の間の匍這距離は三十哩を出ずることは稀であるが *Tangosta Volante* に至れば一日平均二十哩内外の飛涉力を有し、若し順風に乘するが如きことあれば優に二百哩乃至三百哩に達するものである。其の如何に農作物の一大脅威となるかを窺ふに足ると思ふ。

以上の如くして概略ではあるがアルゼンチンが小麦栽培上如何なる地位を占むるものであるかを知り得たと思ふ。次いで其の作付反別並びに生産額の變遷を記述し、各地方毎に其の生産さるゝ小麦の特質を述べることとする。アルゼンチンは今より四十有餘年前迄は小麦栽培上特筆すべきものゝないことは、既に頭初に説明せる所に屬する。而して十九世紀の末葉より同國が小麦生産地として稍著名となつて以來の經過を左に表示すれば、

年 度 作 付 反 別 生 産 高

一八九二—三年度	?	三九、三一九、〇〇〇	ブツシエル
一八九五—六年度	?	五九、一六四、〇〇〇	〃
一九〇〇—一年度	六、七九六、〇〇〇	九九、〇七五、〇〇〇	〃
一九〇五—六年度	?	一五〇、七四五、〇〇〇	〃
一九一〇—一一年度	一四、五一四、〇〇〇	一四五、九八一、〇〇〇	〃
一九一一—二二年度	一五、七三七、〇〇〇	一六六、一九〇、〇〇〇	〃
一九一二—三三年度	一六、五六〇、〇〇〇	一八七、三九一、〇〇〇	〃
一九一三—四四年度	一六、二四三、〇〇〇	一一三、九〇四、〇〇〇	〃
一九一四—五五年度	一五、四七一、〇〇〇	一六八、四六八、〇〇〇	〃
一九一五—一六年度	一六、四二〇、〇〇〇	一八四、一五八、〇〇〇	〃
一九一六—一七年度	一六、〇八九、〇〇〇	八〇、一一五、〇〇〇	〃
一九一七—一八年度	一七、八七五、〇〇〇	一八四、〇〇〇、〇〇〇	〃
一九一八—一九年度	一六、九七六、〇〇〇	一七一、五九一、〇〇〇	〃
一九一九—二〇年度	一四、九五七、〇〇〇	二二四、一四三、〇〇〇	〃
一九二〇—二二年度	一四、八一七、〇〇〇	一六九、七五六、〇〇〇	〃



一九二一—二二年度	一三、九二七、〇〇〇 噸	一八〇、六四一、〇〇〇	フツシエル
一九二二—二三年度	一六、〇六二、〇〇〇	一八九、〇四六、〇〇〇	〃
一九二三—二四年度	一七、二一六、〇〇〇	二五九、三三四、〇〇〇	〃
一九二四—二五年度	一七、五四五、〇〇〇	一九一、四七三、〇〇〇	〃

であつて作付反別數に於て千萬噸、生産高に於て一億フツシエルを超過したのは何れも二十世紀に入つてからのことに屬してゐる。其の後作付段別數、生産高も逐年漸増の趨勢は保つてゐるが、既に述べたるが如く小麥栽培の大進展を妨ぐる種々の事情あつたが爲めに到底加奈陀の如く短日月に一大進捗を見ることは出来なかつた、又今後共に幾分づゝの増加は期待し得らるゝにしても其の程度は漸進的であつて一躍して加奈陀乃至合衆國と對等の地位を占むるが如きことは困難であらう。

従つて同國は其の小麥生産額の點よりすれば遠き將來は知らず、現在小麥生産過剩國中漸く濠洲の上位にあつて合衆國、加奈陀、印度に亞いで第四位を占むるに止まり、小麥輸出餘力の點よりすれば合衆國、加奈陀に次いで第三位を占めてゐると言ふことが出来る。然し若し露西亞が現在の小麥生産不足の状態より回復して再び歐洲大戰前の小麥生産過剩國に變じ、其の輸出量の如きも數億に達するが如きことあればアルゼンチンは其の地位を更に下落せしめらるゝことゝなるが、其の輸出餘力なる點に於ては當分其の地位を保持するであらう。

殊に小麥の國際的需給關係に立脚すればアルゼンチンの小麥輸出餘力が、通例假令合衆國、加奈陀に及ばない

にしても全く缺くべからざる樞要なものとせねばならないことは前記の通りである。従つてアルゼンチンの小麥に就ては吾國の如く直接には左程重大な關係を有せざるものも常に甚大な注意を怠つてはならないと信ずる。

以上の如くにして大体アルゼンチン國に於ける小麥栽培の沿革並びに其の現況の概様を知り得たと思ふ。次いで其の播種の時期は、同國の小麥が殆ど全部冬時小麥たる關係よりして晩秋の候即ち五月頃からであり八月の中旬に及ぶものもある。其の北部地方が南部地方に比して播種期概して早きは此に言ふ迄もないことである。播種の方法としては英米人等の經營するものにあつては機械力を應用すること大であり、必ずしも合衆國、加奈陀の播種法と逕庭あるを聞かないが其の他の移民農耕者等のものは先きにも其の農耕制度を論ぜる場合に既に述べたるが如く未だ原始的方法の域を脱してゐない。然し今後時日の經過すると共に一般農民の覺醒に依つて大いに改善せらるべきは必ずしも期待し得ない事ではない。

其の收穫は概ね十一月下旬乃至十二月上旬より開始されて翌年一月に及ぶもので、北部地方が南部地方に比して其の刈込の早かるべきは播種時期の關係上當然であり、又收穫方法は耕耘播種の方法に於けると同様、此れを合衆國、加奈陀と比すべくもないがこれも漸次改良さるゝであらう。

然し現在では稍々收穫機械の如きものも其の規模の大小巧拙は別として約八割は Binder を使用し麥束となすことは合衆國に於ける小麥收穫の場合に説明せると同様である。嘗つて北米合衆國農務省の一特派員が同國の Binder 使用状況を視察せる時の報告に據れば、未だ大いに改良の餘地があり半歳の長きに亘つて苦心慘憺せる



ものも僅かに其の刈取に際して其の無智、未熟より不測の被害を蒙つてゐることは牧擧に暇ない程であることである。Binder を使用せざる所には Header を使用し殊にサンタフェ州の如きは其の代表的のものであるが、刈取の時期、其の他の操作は前者と同様で先づ不良と言はねばならない。殊に稍々異様に感ずるは刈込が終了してから脱穀を終るまでに長日月を要すること、十二月又は一月に刈込まれたもので脱穀が三月下旬に初めて行はるゝものさへある。此れ先きにも述べたるが如く同國の小麥栽培者が其の能力以上に廣大なる耕地を占有し收穫期の繁忙なる時期に際しても勞働力を他に求むることを努めて避くるに歸因するものである。爲めに麥束又は麥穗として野天に堆積さるゝものが、住々にして降雨の爲めに大害を蒙ることは明らかなことであつて合衆國或ひは加奈陀に於て播種期、收穫期其の他繁忙なるべき時期には多數の勞働者を雇入るゝことにより、一面出費は多きを加ふるも、其の結果能率は大いに増進して終局其の出費の如きは優に償ふて尙餘りあるものに比して、遙にか其の農業經營法が拙劣であると言はねばならない。

扱て此くて收穫せられた小麥は其の栽培地が廣大なる關係より同一種に屬することを望み得ないことは他の小麥大生産國と全然同一である。以下アルゼンチン小麥品質種類に付いて一瞥を與へ、需給關係を説明することとする。

同國小麥の種類は此れを商業取引上よりも區別することが出来、又其の移植するに當つて原産地を異にせるによつても分別さるゝ。其の前者に屬する區別法としてはロサフェ種 (Rosafé)・バルソー種 (Barusso)・バリル種 (Baril) の如き又其の後者に屬するものとしてはルソー種 (Russo)・ハンガロー種 (Hungaro) の如きものがある。然し今は此等の各項目に就て詳説するを避けて最も一般的なる地方別の分類法に就いて論じたいと思ふ。即ち同國小麥生産地域は概略此を三地帯に分割することが出来る。換言すればロサリオ (Rosario)・フエノス・アイレス (Buenos Aires)・ヌートンランカ (Bahia Blanca) の三港市を中心とする各地方に外ならない。

第一の小麥栽培地に該當するものはロサリオ市に接する一圓の地であつて、該小麥地帯はラプラタ河 (Rio de la Plata) の上流に當る巴拉ナ河 (R. Parana) と六十度の徑線との交叉點より始まり南西方に擴大してサラド河 (R. Salado) の下流地一帯に亘り、更に南はロサリオ市、西はコルドバ高地 (Cordon de la Cordoba or Sierra de Cordoba) に至る地方一帯であつて、其の産出に懸る小麥は主としてロサフェ (Rosafé) と稱せらる。ロサフェ小麥は恰も加奈陀のマニトバ小麥と相類似する點多く赤小麥にして粒は幾分細く、硬軟の度は先づ中位にあり含有グルーテンは多量にして、製粉上最も重要な原料の一として有名である。即ち此より得らるべき小麥粉は其の純白なる點に於て其の香りの優良なる點に於て全く世界第一の稱がある。然し此に一言注意すべきは通例 Plate Wheat と稱せられてゐるものは勿論ラプラタ河流域に産出さるゝもので、此に説明せる Rosafé 種をも混淆して呼ばるゝことあり、近來 Plate Wheat の品質下落し俗に「Foxy」と稱せらるゝことあるも、此を以つて直ちにロサフェ種の品質が低落せりと見るは大なる誤である。

第二の小麥栽培地は右のロサフェ種産地の南部に當つてフエノス・アイレスの殆ど全州並びにパンパス州



(Pampas)の東側一帯の地でありバルレッタ種(Barieta)を生産する。バルレッタは其の始め伊太利より移植せるものであつて、赤小麦に屬し其の栽培地域は必しも右の如く一定のものではなく寧ろ全國的と謂ふことが出来る。只比較的北部地方に適しブエノスアイレス州、パンバス州東側に栽培されると言ふに過ぎない。而して其の質合衆國の硬質冬蒔小麦たる Turkey Red に類してゐるが、Turkey Red に比しては幾分軟きことは否定出来ない。其のグルーテン含有量の多きことは製粉上重要視されること勿論である。

第三小麦地帯はブノエスアイレス州の南方に位するヴェンタナ高地(Cordon de la Ventana or Sierra Ventana)以南よりリオネグロ州(Rio Negro)のネグロ河(Rio Negro)の北方に至る一帯の地であつて、バルソー種を生産せらる。パヒアブランカは其の輸出港にあたる。バルソー種はバルレッタ種と、先きに一言したルソー種(Russ)の雜種であつて、赤色硬質小麦に屬し合衆國の北部ミネソタ州、加奈陀のマニトバ小麦と相對するものである。而して其の製粉上の諸條件より觀察すれば、同種は合衆國、加奈陀は勿論其の他の諸國の何れの原料小麦よりも一頭地を抜いて優秀なものとされてゐる。

要之アルゼンチン小麦は大體に於て製粉用原料としては優良なものであつて而も其の價格が他の小麦大生産地のものに比して高からざるのみならず、製粉に際して其の配合宜ろしきを得ればパン用小麦粉に最も適當するの理由よりして大いに珍重さるゝものに屬する。然るに此にアルゼンチン小麦の唯一の缺點とも考へらるべきものは其の比較的多量の雜物を包含することである。其の優良品たる小麦には此に特筆すべき程のこともないが、

中等品乃至下級品に至つては篩屑、桴、燕麥、大麦其の他の雜物を相當多量に含み、製粉に當つて豫期以上の精撰損失(Cleaning Loss)を招くことがある。

以上略述した三種類の小麦の外に尚アントルリオ、サンタフェ、コルドバ、サルタ(Salta)州等の極く北部に偏せる地方には黄色デュラム小麦(Yellow Durum)と俗に呼ばるゝ硬質小麦を生産してゐる。其の最も主要なるものはサルドーム(Saldome)、カンティール(Candial)であるが、何れも其の生産額は少量であつて、此れを海外に輸出するが如きは企て得ない。主としてマカロニー(Macaroni)製造又はセモリナ(Semolina)製造の原料とされ其の製品は全部内地の消費に當られてゐる。又従つて其の詳細を研究する必要もないと思ふ。

アルゼンチンが其の生産する小麦に就て斯界に雄たる地位にあることは一つは其の生産額の比較的多量なることにもよるべく、又其の品質が製粉上主要なるにもよるであらう。然し生産額の点よりすれば合衆國、加奈陀には言ふ迄もなく印度、支那にも及ばず、其の品質の點よりするも製粉上優良種に屬すると稱せらるゝに止まつて、其の雜物を含有することの多い缺點を有する。然るにも拘らずアルゼンチンが世界小麦界の一方の重鎮たるは抑も何故ぞや。惟ふに既に述べたるが如く同國が小麦其の物以外に地理上、其他の各般の好事情を享有しつゝあるからであらうが、其の最も重大なものは其の小麦需給關係に於て生産小麦の大部分が餘剰分として諸外國の需要に應じ得るからである。今此の小麦需給關係と對外輸出餘力に一瞥を加へ同國が小麦を中心とする國際的關係に於て如何なる地位にあるかを明らかにしたいと思ふ。



其の供給高たる小麦生産高は前述せる通り年の豊凶如何に依つて五千萬ブツシエル内外の差異を來すことあるにしても、最近數ヶ年の成績に據れば大略二億ブツシエル内外を示してゐる。勿論一九一六年度の如く其の收穫高が僅かに八千萬ブツシエルに過ぎないこともあるが、此の如きは最近二十數ヶ年間に他に例を求むることが出來ない。

却つて近來其の小麦作付反別は漸次増加せんとするの趨勢にあり、又農耕状態も漸次改善されんとするの狀態明らかなるを考慮すれば、今後は特別の事情の惹起せられざる限り一九一六年度の如く大激減を豫想することは出來ない。又假令不幸にして僅かに八千萬ブツシエル内外の大凶作に會するとしても後に述ぶるが如く其の國內需要には充分應じ尙ほ幾分の餘裕を示すであらう。即ち最近の同國の内地消費小麦量は四千五百二十萬ブツシエルであつて他に種子用、雜用として大約二千萬ブツシエルを控除するを要するから先づ總需要量は六千五百萬ブツシエル内外に過ぎない。此の外に次年度への持越高をも計算に加ふべきではあるが、其の前年度よりの持越高と先づ決濟するものとして必ずしも大過なかるべきであるから、眞實の需要量は右の數量を出でないであらう。然るに其の生産額が近年二億ブツシエル内外なるより推算すれば先づ其の差額たる一億數千萬ブツシエルは年々海外へ輸出し得る餘力とせねばならぬ。而して同國政府の發表せる最近二十有余年の輸出高は全然右の推算を裏書するものである。

アルゼンチン小麦年度別輸出量、

一九一一年度	八九、九八六、〇〇〇	ブツシエル
一九一二年度	一〇三、二五三、〇〇〇	〃
一九一三年度	一〇九、六三四、〇〇〇	〃
一九一四年度	三九、二七八、〇〇〇	〃
一九一五年度	九八、一五五、〇〇〇	〃
一九一六年度	九一、六二五、〇〇〇	〃
一九一七年度	四〇、〇四三、〇〇〇	〃
一九一八年度	一一九、〇二六、〇〇〇	〃
一九一九年度	一三七、三五一、〇〇〇	〃
一九二〇年度	一八四、六〇〇、〇〇〇	〃
一九二一年度	六二、五一二、〇〇〇	〃
一九二二年度	一三七、七六四、〇〇〇	〃
一九二三年度	一三七、七〇五、〇〇〇	〃
一九二四年度	一六五、三〇四、〇〇〇	〃

此の輸出量の莫大なることこそアルゼンチンが世界小麦界に重きをなす所以である。而も其の收穫は北半球に



於て刈取りたる後約半年を經過せる時に開始せらるゝが爲めに世界の小麦需給關係を調節し得る地位にあり濠洲と共に益々重要視せらるゝ所以である。

## 第二項 露西亞

歐洲大戰亂突發以前には露西亞が歐洲に於ける殆んゞ唯一の穀倉であつたことは此に述べる迄もない事で各種の穀類は大麥、小麥、裸麥たると黑麥、燕麥たるとを問はず皆其の生産高は世界に冠絶して多きは夫々全世界生産高の約半額、少なくとも一割五分を占めてゐたことは、其の廣大無邊の優良耕地と全人口の約九割を占むる農民の數に依つても肯定することが出来ると思ふ。今此に述べんとする同國の小麥にのみ就いて見るも其の栽培地積は歐露亞露の二大洲に跨り、而も彼の地味の肥沃なるを以て名ある黒土帯を占め、加之天候其の他の自然的條件も概して有利なるものあつたが爲めに古くから同地には小麥の栽培行はれ獨り其の生産額が他の諸國に比して壓倒的に多額なるのみならず、品質の点よりするも假令農耕法其の他の事情よりして雜物を含有すること多き等の非難すべきものあるにしても小麥其のものは製粉上先づ高級品と見ることが出来た。爲めに稍々古くから同國が諸外國に對して小麥供給者の立場にあり、其の生産額の如きも漸を追ふて増加する趨勢を辿つて止まなかつたのである。即ち二十世紀の初葉に於て平年既に五億ブツシエル内外の生産高を算せるが、大戰亂直前に至つては通例七億乃至八億ブツシエルに達した。就中一九一三年度の如き小麥大豐作に際しては優に十億ブツシエルを突破して

北米合衆國と共に世界小麦界の雙璧たるを失はなかつた。更に其の輸出餘力の點よりするも年々一億五千萬ブツシエル乃至二億七八千萬ブツシエルに及び能く歐洲諸國へ供給して其の穀倉たるの名を辱めなかつたのである。

然るに歐洲大戰亂の勃發するに及んで露西亞も亦此に關係し、國民をして安じて其の農耕に従事するを妨けたるのみならず、他面一九一七年に至つては其の經濟組織、農耕制度に重大なる影響を與へた政治的大革命は惹起せられ、一般に庶民は其の堵に安ずるを得ずして同國唯一の大産業とも言ふべき農業は一時的なるにもせよ、又昔日の盛況を見ることが出来なくなつた。而して此の危急存亡の秋に當つて更に一層同國の農業を萎縮せしめたものは往々にして同國の農耕地帯を襲ふ彼の有名なる大凶作の痛棒であつたとせねばならない。

此の如く殆き連続的に露國の農業界を襲ふた不祥事は、最早露西亞を以つて従前の如き歐洲の穀倉たるの實を奪ひ去つたのみならず、飢餓に瀕せる農民は各所に夥しき數に達し、莫大の穀類を諸外國に仰がざるを得ざること一九二五年の當初の如くなつたのである。

尤も露西亞は戦前の農業極盛時代にあつてさへ一面多量の穀類が諸外國に輸出さるゝにも拘らず、他面往々にして惹起せらるゝ凶作に禍された同國各所の農民が餓死せんとするの慘狀を呈したことは決して稀ではなく其の歴史を緝くも隨所に其の事實を發見するに苦しまない程である。従つて戦後同國諸地方が農作物大凶作の爲めに數多の窮民を出せしことを以つて露西亞獨特の一現象であつて必ずしも驚くの必要はないと説くものもあるが、其の説には全く與することが出来なと思ふ。何となれば最近の露西亞の農業界は戦前ものものと大いに其の趣を



異にして同國全体として、其の生産穀類數量を以つてしては到底内國需要に應じ得ず、止むなく不足分を北米合衆國、加奈陀に求めたものであり、實際問題としては従前の如く穀類を諸外國に供給するが如きことは夢想だも許されぬ現況にあるものと見るのが最も適當であらう。

勿論一九一七年の政變以來他種産業に對すると同様に政府は其の農業組織にも一大改革を斷行して農作物の取引の如きものも主として政府が管理するか又は絶大なる干渉權を有し、殊に對外取引に就ては専ら政府の獨占する處であるから、不足を告げつゝある穀類をも強ひて輸出するの態度に出で、金融上其の對外信用の維持に専念し爲めに國民の一部が飢餓に直面すと雖も其の救助に意を用ふる暇ない事もあり、又今後とても此の如く苦肉の策を弄することなきを保証する理には行かない。従つて露西亞が其生産せる穀類數量に餘利を來し、對外輸出餘力を有すと稱せらるゝことあるも、此を以つて直ちに同國が再び戦前の農業状態に回復したと看做すことは早計と言ふの外はない。具体的に其の一例を示せば一九二四年度の末葉に當つて露西亞はオデッサ港(Odessa)より相當多量の小麦を英佛に供給したことは争はれぬ事實であつたにも拘らず、越へて翌一九二五年二月並びに三月に至つてからは北米合衆國並びに加奈陀より夥しい小麦粉を輸入するの止むなきに至つたことは未だ世人の記憶に新たな事に屬する。

要するに近き將來に異常なる事件の突發して同國の農業界に一大影響を與へざる限り、今後一兩年の中に俄かに戦前の盛況を來すべしとは考へ得られないことであり當分は徐々として其の回復を待つより外に途はないと信ずる。但し其の回復の時期如何は一つに懸つて國民全体の雙肩にあるが更に同國政府當路者の指導にもあると言はねばならぬ。然るに此の点に關しては概して政府當局が其の農業回復を以て最も重要な國是となし専心其の經營に留意して農民の指導を怠らざるものあるのと、次に述べるが如く同國の農耕地が極めて肥沃てふ天然の利を得て居るが爲に、案外其の復舊が進捗するに非ずやと考へらるゝ点も多々あることは事實とも言へる。其の一例とし大戦勃發當時と最近數年間の農耕地並びに主要穀類の收穫高を比較すれば其の間の事情を雄辯に語つてゐるものではなからうか。

露西亞穀類作付反別及び收穫高(一九一六—一九二四年度)

地方別	一九一六年度	一九二二年度	一九二三年度	一九二四年度
西歐部露	● 三、七〇三、七五〇 〇〇〇	● 二六、九八八、八〇〇 〇〇〇	● 三〇、五五五、一一〇 〇〇〇	● 三三、一五五、三六〇 〇〇〇
東歐部露	● 七、七三三、三〇〇 〇〇〇	● 七、五八八、三〇〇 〇〇〇	● 七、四三三、〇〇〇 〇〇〇	● 八、一七三、七七一〇 〇〇〇
東南部露	● 二、三三三、三三〇 〇〇〇	● 二、三三三、三三〇 〇〇〇	● 一、六三三、三六〇 〇〇〇	● 一、六三三、三六〇 〇〇〇



地方別	一九一六年度	一九二二年度	一九二三年度	一九二四年度
キルギス	● 二、三六、二〇〇 ○ 九、六〇、〇〇〇	● 五、七六、一七〇 ○ 四一、七〇、〇〇〇	● 五、一五、一〇〇 ○ 三六、七〇、〇〇〇	● 五、六四、八〇〇 ○ 三九、三〇、〇〇〇
西利亞比	● 三、八〇、二五〇 ○ 一五、三三〇、〇〇〇	● 一〇、八四、五二〇 ○ 三三、五〇、〇〇〇	● 三、〇七、二二〇 ○ 一〇、一〇〇、〇〇〇	● 三、九三、七五〇 ○ 一五、三三〇、〇〇〇
ウクライナ	● 五、六三、七一〇 ○ 六五、三三〇、〇〇〇	● 三、四三、二九〇 ○ 五九、七〇、〇〇〇	● 五、八〇、七六〇 ○ 五七、一〇〇、〇〇〇	● 五、二七、三〇〇 ○ 四八、三〇〇、〇〇〇
合計	● 三三、〇三、三〇〇 ○ 二、三三、一〇、〇〇〇	● 一八、四三、三七〇 ○ 一、九一〇、五〇、〇〇〇	● 一六、八〇、三〇〇 ○ 一、八二一、一〇、〇〇〇	● 二〇、九三、九〇〇 ○ 一、五八六、五〇、〇〇〇

(註) 一、同表は Commercial Year Book of the Soviet Union, 1925 より摘録せるものにして、各年度共にターキスタン (Turkestan)、トランスコーカシヤ (Transcaucasia)、並びに極東の三地方は統計材料を得るに途なきが爲めに控除せり。

(註) 二、單位は露西亞固有のデシヤチン (Desiatine)、プーゾ (Pood) を夫々 1 Desiatine=27 Acres, 1 Pood=0.6 Bushel とし、ヘーカー (Acre)、ブッシェル (Bushel) に換算せり。表中右側の●印は噎にて示せる作付反別数にして、左側は收穫量のブッシェル数なり。

即ち前表に示せるが如く開戦當時に於ける露西亞の全穀類作付段別数は約二億三千三百萬ヘーカーなりしものが戦後の一九二二年代に至つては約七千五百萬ヘーカーの大減少を示して一億五千八百萬ヘーカー餘を算するに過ぎなかつた。然るに以來月日を重ねるに従つて其の穀類作付段別数は着々と復舊の途を辿り一九二三、一九二四の兩年度の如き夫々前年度に比して三千萬ヘーカー、千六百萬ヘーカーを増加し、現在に於ては開戦當時に比して僅かに三千萬ヘーカー足らずの減少を示してゐるに過ぎずして、其回復力の旺盛なるには一驚を喫する程と言ふことが出来る。只だ最も遺憾なりと考へらるゝものは近來作付段別の増加せるにも拘らず穀類生産高の増加が之に伴はずして却つて一九二四年度の如きは激減せる事實である。然し此の如きは一には天候、其他の天然力に支配されて止むを得ないものであり、二には彼の一九一七年の大革命以來農耕組織乃至制度に大變化を來し、所謂過渡期にあるが爲めに成績の見るべきものがないに歸因するものであつて、今後時日の経過と共に漸次良結果を擧ぐる事となるであらう。

獨り此の如く農耕地、農作物の増減のみならず、其他同國の農業に關係する各般の事項は研究上多大の興味あることは疑ひないが、此に論及するを避けて同國の小麥作にのみ一瞥を加へるに止めん。小麥がライ麥と共に同國の最重要なる農産物たることは言ふ迄もないことで、同國穀類の約半額は此の兩者が占め、ライ麥は作付反



別、生産高共に同國の穀類中第一位を占め、小麥が第二位なること開戦當時に於ても現在に於ても何等變りはない。即ち次表の如し。

(單位、千フツシエル、括弧内は頭書穀類耕地の全穀類耕地に對するパーセンテージ)

	一九一六年度	一九二二年度	一九二三年度	一九二四年度
ライ麥	{ (二五、六) 六六二、三四〇 }	(三二、六) 六六四、八〇〇	(三三、一) 六四四、〇四〇	(三二、〇) 六二四、〇〇〇
小麥	{ (二八、〇) 六六四、九二〇 }	(一五、四) 三二〇、四〇〇	(一七、三) 三一五、二二〇	(二〇、五) 三二八、七四〇
大麥	{ (二〇、七) 三〇九、八四〇 }	(五、七) 一四〇、一〇〇	(八、二) 一五六、六〇〇	(七、六) 一二一、二〇〇
燕麥	{ (一八、一) 四八〇、〇六〇 }	(一一、八) 二七〇、二四〇	(一三、一) 二七三、二四〇	(一三、九) 二六〇、〇四〇
黑麥	{ (一一、一) 四三、〇二〇 }	(三、一) 四六、二〇〇	(三、三) 四九、〇二〇	(三、一) 四一、八八〇

	一九一六年度	一九二二年度	一九二三年度	一九二四年度
稷	{ (三、四) 八〇、〇四〇 }	(一〇、三) 一五二、四六〇	(七、五) 一三二、四八〇	(五、七) 六八、二八〇
玉蜀黍	{ (一、一) 二八、五〇〇 }	(三、九) 二六、四〇〇	(一一、一) 二六、一六〇	(一、九) 三〇、〇六〇
其他	{ (一〇、九) 四三、六〇〇 }	(一六、一) 九九、九六〇	(一一、一) 八四、四八〇	(一五、三) 六三、四八〇

(註) 同表は Commercial Year Book of the Soviet Union, 1925. に據る。

但しターキスタン、トランスコーカシヤ、極東の三地方は表中に含まれず。

以上の表に依るも小麥栽培が露國の農業界に於て最も重要な位置を占めてゐることの一端を窺ふことが出来たと思ふが、此の如く同國に小麥栽培が旺盛を極むる所以のものは一つに懸つて其の天然の利に據るものとなければならない。此の点北米合衆國乃至加奈陀と酷似するものあるは、夙に一部の農學者の間にも稱へられた所に屬する。就中歐露の小麥地帯は北米合衆國の小麥地帯と各種の事情相類し、西比利亞の小地麥帯たるべき地方が加奈陀の夫と全く符合するものあるは興味深い事實であつて、小麥大生産地としての北米合衆國、加奈陀の



特質は直ちに之れを歐、亞に跨がる露西亞にも適用することが出来る。(正田貞一郎氏著『我國の食糧問題と西比利亞の開発』参照)

今少しく具体的に其の地質、天候等を略説して、同國が小麥栽培上理想的なる所以を示し度いと思ふ。先づ地質を立脚点とするに同國は大略二者に區別することが出来る。一は黒土帯 (Chernozium or Black Soil region) であり、他は黒土帯に非ざる地帯 (Non-chernozium or non-Black Soil region) である。

前者は四%乃至一六%の有機物を含有して數吋より四呎の深さに達し、歐露に於てはホルヒニヤ (Volhynia) 及びベッサラビヤ (Bessarabia) より北東方に進みウファ (Ufa) 乃至エカテリンブルグ (Ekaterinburg) に至る線以南の各地方に當つてゐる。而して同地帯は更に派生的に一部はコーカサス地方 (Caucasus) に延び更に他面、一部はウラル山系を超えて遙かに亞細亞露西亞に浸入して彼のキルギス原 (Kirghiz Plain) と稱せらるゝものを形成する。此の露西亞の黒土帯は地味の肥沃なる点よりするも、其の廣大なる點よりするも、先づ世界に冠絶するものと言ふも差支なく、小麥栽培には全く理想的なる地帯である。後者たる Non-Black Soil region は粘土質、岩石質の土壤よりなり、前者の如く有機物を含まず、農耕上肥沃の土地とすることは出来ない。同地帯は主として露西亞の北部乃至北西部地方であつて、従來の經驗上小麥栽培地としては必ずしも重要視すべきものでないことは勿論である。

以上の兩者の外に尙同國內の土質は或ひは鹽分を含むこと多いカスピアン海 (Caspian Sea) 沿岸の土地、歐

露南部の河岸、又は黒海、カスピアン海附近たる中央亞細亞の砂地、極く北西部に當る沼地等もあるが此等は共に農耕に不適當なることは勿論であるから此に其の詳細を述べる必要はないと思ふ。

露西亞が歐、亞の二大洲に跨つて小麥栽培上最も有利なる黒土帯を有すること大なるは、先づ同國が小麥生産國として世界に重きを爲す第一要素を具備するものであるが、次に氣温、降雨量の點よりするも概して有利の地位にあることは次の如くである。露西亞は其の歐露たるを問はず、其の極北部は氣温の點よりして農耕に適するの望まないとは言ふまでもないが、南半は大略農耕に最適なるか、又多少の非難すべきものあるとしても其は特筆大書すべきものではない。只亞細亞露西亞に至つては北部の寒冷なる地方と、南部の暑氣稍々甚だしい地方とを除けば必ずしも農耕に不適當ではないこと彼のキルギス平原の如くではあるが、海洋を去つて遠く大陸の中部に位するが爲めに稍々甚だしい寒暑の差あるの不利なるは認めざるを得ない。

其の降雨量に至つては歐露にあつては大略年平均六吋乃至二十四吋であり多雨と言ふよりは寧ろ寡雨なるものに屬し往々其の寡雨の爲めに禍さるゝは、南東部又は南部と言ひ得べくヴォルガ河 (Volga) 下流地方は此に當る。従來の經驗に依れば歐露に於て、早魃の爲め農作物の被害夥しき數に達せる時は主として同地方の寡雨に由來するものと見て先づ誤ない程である。其他の地方は、年平均にして十五吋内外であり小麥栽培には理想的と言ふことが出来やう。他面亞露にあつて四季を通じて最も寡雨なるは北緯五十度以南であつて若し此の地方に農耕を企てんとすれば必ずや灌溉の設備を要する。現在アラル湖 (Aral) に注入するシル河 (Sira)、ムム河



(Amu)の上流地方の如きは灌漑に依つて僅に農業に従事するものもあるが、此に特に述ぶる程のものではない。反之北緯五十度以北は冬期間は概ね年平均の降雨量五吋以下であるが、夏期に至れば大体年平均十吋乃至二十吋に達するが故に、同地方の如く主として中春より初秋に亘つてのみ農耕に従事する所では先づ理想的の降雨状態と言ふことが出来る。就中小麥栽培の點よりすれば、春蒔小麥地帯として非難すべき何物もない。而して極東地方も夏期の降雨量は或る一部を除いては概ね十吋乃至二十吋であり、此亦小麥地帯として有望なること勿論である。(正田貞一郎氏著『我國の食糧問題と西比利亞の開発』参照) 具体的に其の主要都市の年平均の降雨量を示せば、トムスク市(Tomsk)にあつては二十吋、イルクツク市(Irkutsk)では十七吋、ヤークツク市(Yakutsk)にあつては十四吋である。

要之亞露にあつては北緯五十五度の線を中心とする一帯の地は、農耕上最適の降雨量あり其の南北に進むに従つて降雨量は減少することとなる。以上略説せるが如く露西亞の地質、氣候は實に廣大なる地積に亘つて農耕を可能ならしめ、就中小麥栽培上より觀察すれば先きにも一言せるが如く北米合衆國、加奈陀と共に全く世界の第一位に位する最適の地とせなければならぬ。

今左に同國の小麥作付反別並びに小麥實收高の比較的最近のものを年度別に示し簡単に解説を加へることとする。

年 度	小麥作付反別	小麥實收高
一八九五年度	四二、二三三、〇〇〇	四一三、三四一、〇〇〇
一八九六年度	四五、八六九、〇〇〇	四二二、〇三八、〇〇〇
一八九七年度	四六、七三三、〇〇〇	三四〇、一七一、〇〇〇
一八九八年度	四七、〇一九、〇〇〇	四五九、二八九、〇〇〇
一八九九年度	四九、七四三、〇〇〇	四五四、一四五、〇〇〇
一九〇〇年度	五二、三二三、〇〇〇	四二二、九九四、〇〇〇
一九〇一年度	五四、三〇六、〇〇〇	四二七、七八一、〇〇〇
一九〇二年度	五五、一一二、〇〇〇	六〇七、三七〇、〇〇〇
一九〇三年度	五七、二二一、〇〇〇	六一一、四五九、〇〇〇
一九〇四年度	五九、一八六、〇〇〇	六六六、七五二、〇〇〇
一九〇五年度	未詳	六三六、二八五、〇〇〇
一九〇六年度	〃	五〇六、四〇〇、〇〇〇
一九〇七年度	〃	五一一、〇〇〇、〇〇〇
一九〇八年度	〃	五六六、〇〇〇、〇〇〇



年 度

小麦作付段別

小麦實收高

三三四

一九〇九年度	未 詳	七八三、〇〇〇、〇〇〇
一九一〇年度	未 詳	七七五、〇〇〇、〇〇〇
一九一一年度	八〇、〇八六、〇〇〇	五六三、四八五、〇〇〇
一九一二年度	七八、一〇九、〇〇〇	八〇一、四九七、〇〇〇
一九一三年度	八二、六八〇、〇〇〇	一、〇二七、六六二、〇〇〇
一九一四年度	八三、八六二、〇〇〇	八三三、六三九、〇〇〇
一九一五年度	未 詳	八二六、八〇三、〇〇〇
一九一六年度	未 詳	六六四、九二〇、〇〇〇
一九一七年度	未 詳	四〇四、〇〇〇、〇〇〇
一九二〇年度	△三六、三五三、八〇〇	△二五五、六三三、五八〇
一九二一年度	△三六、三五三、八〇〇	△二五五、六三三、五八〇
一九二二年度	◇二四、三九七、一〇〇	◇三二〇、四〇〇、〇〇〇
一九二三年度	◇三一、六六二、九九五	◇三二一、一三〇、〇〇〇
	△三三、九九四、八〇〇	△三三一、一六〇、八三三

年 度

小麦作付反別

小麦實收高

一九二四年度	◇四一、九九三、四九二	◇三二八、七四〇、〇〇〇
	△四一、七二六、八〇〇	△三三〇、九一七、八七九

(註) 一、一八九五より一九〇四年に至る十ヶ年の統計表は Dondlinger の Book of Wh at による。

(註) 二、一九〇五年より一九一四年に至る十ヶ年の統計表は合衆國農務省の發表せるものによる。

(Miller's Almanack 参照)

(註) 三、一九一五年度は全露西亞七十三地方の内主要なる四十六地方の生産高にして其の他は不明。

(Miller's Almanack 参照)

(註) 四、一九一七年度の小麦生産高は全露七十三地方の内七十一地方のもの。

(Miller's Almanack 参照)

(註) 五、◇印は Commercial Year Book of the Soviet Union, 1925 によりターキスタン、トラン  
スカウカシヤ、極東地方を除外す。

(註) 六、△印は International Crop Report and Agricultural Statistics に據り歐露、シベリヤ、キ  
ルギシヤ以外を除外す。

右にも表示せるが如く十九世紀末葉に於ける露西亞の小麦作付段別数は四千万噸乃至五千萬噸であつて、年々  
遞増する傾向を示し、又其の小麦生産高も時に豊凶の可成甚だしいものあつたにもせよ概ね四億數千萬ブッシェ



ルを維持し、作付反別漸増と共に將來益々其の生産額が増すべきを豫想されてゐた。果せるかな二十世紀に入つてより數年を出でずして其の作付反別數は六千萬噐内外に達し又其の生産小麥數量も六億五六千萬の多きに及んで北米合衆國と第一位を争ふことゝなつたのである。其の後一九〇五年より一九一〇年に至る六ケ年間の同國小麥作付反別數は準據するに足るべき統計材料は不幸にして求むることを得ないが、世界小麥界の最高權威の一たる北米合衆國の Miller's Almanack に記載せる收穫量を見るに、其の生産高は此の間に著しく増加して、一九〇九、一九一〇の兩年度の如きは夫々八億ブッシェルに垂んとするより考慮するに、其の作付反別數も亦大體増加の趨勢にあつたものと言ひ得らるべく、一九一〇年の如きは恐らく其の作付反別數は八千萬噐内外に達したものと信ぜらるゝ。何となれば一九一一年以降大戰勃發當時の一九一四年度迄の全露西亞小麥作付反別は僅に八千萬噐を超過せること右の表に依るも知らるゝが如くであるからである。而して右大戰前の生産額も一九一一年の如く天候の不順なるに依つて作柄の極めて不良なりし年を除けば皆八億ブッシェル以上に及び、就中一九一三年度の如きは既に一言せるが如く、其の數量は十億ブッシェルを突破して其の作付段別の廣大なる点よりしても亦其の小麥生産高の莫大なりし点よりしても、到底北米合衆國の如きも此に追従することを許さず、露西亞は獨り各小麥生産國中一頭高く地を抜き全く黄金時代にあつたと言ふことが出来る。

此の時に當つて不幸にも歐洲の大戰亂は突發し、露國も亦其の渦中に投ぜらるゝことゝなつて以來は國民は其の殆き唯一の産業とも言ふべき農耕に従事することを許されず、農耕地は漸次頽廢に歸し、以來戰亂の長日月に亘るに依つて其の度は益々加はり、就中一九一七年度の政治的大革命に加ふるに同國を襲へる數次の大凶作は、終に露西亞をして小麥生産國としての昔日の名聲を失墜し、往年世界の穀倉とまで謳歌され年々莫大の輸出を行ひしものも一朝にして其の生産額は内國消費高をも満たすを得ず海外より輸入するの止むなき悲境を現出するに至つたのである。

乍然歐洲大戰亂勃發當時の一九一五年度に於ては末だ戰禍が國內に浸潤するに至らず農耕状態も概して良好であり、加之天候其の他の自然的條件も極めて有利なるものがあつたが爲めに、該年度の小麥作付反別も略々前年度の八千萬噐と大差なかりしものゝ如く、其の生産高も歐露四十六州のみにも八億ブッシェル以上に達して、更に亞細亞露西亞、其の他を合算すれば全露西亞の生産高は僅に九億を突破したものと見て差支ないと信ずる。露西亞が此く多額の小麥生産額を得たるは歐洲大亂突發以來現今に至るまで獨り同年度のみであつて其後は戰亂が意外に擴大して長日月を経過するも其の終息を告げざると、又漸くにして戰禍止めば又政治的大革命起つて、一時國內の一切の産業組織を根底より覆し、加之類次の大飢饉は萬般の農作物、就中小麥の生産額を急激に減少せしめて殆き昔日の儂をなからしめた。

由來露西亞には戰前と雖も正確にして信ずるに足べき統計資料に乏しく、就中其の農作物に關する統計材料は極めて杜撰其の真相を捕捉するには世人の皆等しく困惑した所であるが、殊に大戰以來は極めて最近のものを除いて従前の如き杜撰なる統計材料すらも此を得るに途なく、以下説明するものも時に或ひは事實と符合せざる結果



を生ずやも知れざれども今暫く斯界の權威者たるローマの國際農業協會 (International Institute of Agriculture, Rome)、北米合衆國の小麥年鑑 (Miller's Almanac and Year Book)、並びに最近露西亞の各般の事情を稍々鮮明ならしめた一九二五年度露西亞商業年鑑 (Commercial Year Book of the Soviet Union, 1925.) に記載せる統計材料を取捨選擇して論を進め度いと思ふ。

一九一五年同國が莫大の小麥を産出した事は既に述べた通りであるが、翌一九一六年に至るや先づ戰禍に歸因して小麥作付段別は其の前年度に比し約二千萬噸を減じて六千五百萬噸となり、其の小麥生産額も前年度より約二億プツシエルの大減少を示して約六億五千萬プツシエルとなり、其の體恰も十九世末葉の同國の小麥栽培状態に退歩したと言はねばならない。(一九一六年度の統計は Commercial Year Book of the Soviet Union, 1925. に據るもので Turkistan, Transcaucasia, Far East を除外する)

以來此の小麥栽培不振の傾は益々甚だしきを加へ、一九一七年には二地方を除く全露の小麥收穫高は辛じて四億プツシエル台(小麥年鑑に據る)を保ち、其の最も沈滞せるは一九二二年であり全小麥作付反別は二千五百萬噸にも及ばず、其の生産高は僅かに三億二千萬プツシエルを示したに過ぎない。(前掲ソビエツト聯邦商業年鑑に據る)此の如く小麥作付反別數並びに其の收穫量の激減せることは十九世紀の末葉以來全くないことであつて、此を十年前の同國の黄金時代に比すれば作付反別數收穫高共に僅かに其の三割に過ぎないこととなつたのである。

其の後漸く國政の改新せられて政府當局者が農業の振興に全力を傾注するに及んで、一九二三、一九二四の兩年度には小麥作付反別は夫々三千三百萬噸、四千二百萬噸を算へて急速に舊態に回復するの曙光は認められたのであるが天候の不順に歸因して小麥實收高は此に比例して増加せず、兩年共に一九二二年度に比して五百萬プツシエル乃至百萬プツシエルの増加を示して三億二千萬プツシエル餘の生産高を得たるに過ぎない。

然し先きにも論ぜるが如く同國が小麥栽培地として、最も理想的なる廣大の土地を有し、現に小麥耕地として耕耘せられたものが八千萬噸以上に達せるのみならず、他に更に廣大なる耕地を中央亞細亞、西部西比利亞並びに東部西比利亞に求め得べき望み多大なるものとすれば、今後一般國民の努力乃至は爲政者の盡力に依つて早晚戰前の状態に回復し得るは言ふ迄もなく、更に一步を進めて世界最大の小麥耕作地を有するに至るべきは今より豫測して殆ど大過なかるべく、現在其の傾向の明らかに認めらるゝものあるより判するに益々此く信じて疑を挟む餘地はないと思ふ。此の露西亞が小麥大生産國として再び昔日の盛況を呈するや否やは獨り露西亞自身の利益と重大なる關係あるのみならず、其の全世界の小麥に及ぼす影響は更に一層刮目に價するものあると信ずる。

以上述べたるが如く露西亞は大戦突發以來各種の事情よりして其の小麥栽培の事業は著しく萎縮した事は否定出来ないが、先づ世界何れの國に比するも小麥栽培地としては何等遜色ないことが明らかにされたと思ふ。只同國が小麥栽培上唯一の缺点とも稱せらるゝものは、其の農耕法が原始的にして粗雑拙劣なることである。其の



必然の結果として收穫されたる小麥に挾雜物を含むこと多量に及び其の主要なるものは *Cocks, Wild-buck* -wheat, *Wild rape, Rye, Barley, Dirt and Stones*, とされてゐる。勿論何れの國の小麥と雖も挾雜物なきものは皆無であるが、其分量の多き点に於ては先づ露西亞小麥の右に出ずるものは稀とされてゐる。従つて小麥そのもの品質は後にも述ぶるが如く極めて優良なるものあるにも拘らず、其の名聲の加奈陀マニトバ小麥、合衆國のカンサス小麥、アルゼンチンのバルソー小麥、バルレツタ小麥に及ばないものあるは一つに此の雜物過多の理由によるものとせねばならない。而して此の挾雜物の他に比して過多なるが如きは、近來長足の進歩發展を遂げた製粉機械を以つてすれば、必ずしも最上級の非難を與へる程のこともないが、露西亞の農耕組織の粗放拙劣なるより生ずる最も恐るべき結果は其の收穫率が極めて下位にあることに指を屈しなければならぬであらう。

前表に示せる累年の同國の小麥作付反別數並びに其の收穫高に依つても判斷し得らるゝが如く、同國の小麥收穫率は戦前、戦後を間は非常に極めて下位にあることは一驚を喫する程である。即ち戦前、戦後を通じて一箇當りの收穫率は冬時、春時兩小麥を平均して辛じて十ブツシエルを保つてゐるに過ぎない。而して此れを冬時小麥、春時小麥の兩種に區別して論ずれば、露西亞に於ても他の諸國に於けると同様に冬時小麥は春時小麥に比して收穫率遙かに高く、平年作の場合には前者は一箇當り一四ブツシエル内外なるに反して後者は九ブツシエルを出す事は稀とせねばならぬ。故に冬時小麥の作付反別が春時小麥の其に比して多き時は當然其の收穫高も多額に

昇るべきであるが、同國は北米合衆國に於ける場合と全然反對に冬時小麥は以下説明するが如く全小麥の約三分の一に過ぎずして他は全部春時小麥なるが爲めに、其の生産高も作付反別數の廣大なるに比して下位にあるは素より當然と言はなければならぬ、然し先きにも述べたるが如く同國が小麥栽培上數々の優越點を有するより判斷すれば、將來其の農耕組織が進歩改良せらるゝに従つて收穫率の如きも必然上昇して、其の小麥生産高も更に一段と多きを加ふることゝなるであらう。

次に露西亞の小麥は此れを大別して冬時、春時の兩種に分ち得ることは其の地理上の位置よりして當然である。而して冬時小麥はアジマ (*Azima*) と稱せられ春時小麥はギルカ (*Girka*) と呼ばれて、前者は主として歐露の南部地方なる氣候温暖なる地方に栽培せられ、北部地方乃至西比利亞等の氣温の低き處には殆ど全部後者のギルカ種が栽培さるゝ。此の兩者の小麥生産高の比は先きに一言せる如く前者の一に對して後者は二に當る。亞細亞露西亞に屬する地域に於て九分九厘までギルカ小麥たることは其の地理的關係よりして一點疑義の挾む餘地はないが、此を歐露に就て戦前のもとの最近のものを示せば次の如くである。

年 度	冬時小麥收穫量	春時小麥收穫量
一九〇八年度	一四七、二〇〇、〇〇〇 ブツシエル	四二〇、〇〇〇、〇〇〇 ブツシエル
一九〇九年度	二〇六、四〇〇、〇〇〇	五七四、四〇〇、〇〇〇



年 度	冬蒔小麦收穫量	春蒔小麦收穫量
一九一〇年度	二七八,四〇〇,〇〇〇	ブツシユル
一九一一年度	一八四,二〇八,〇〇〇	〃
一九二二年度	二三七,五九二,〇〇〇	〃
一九一三年度	二七二,一六二,四〇〇	〃
一九一四年度	二二二,七四四,〇〇〇	〃
		五五四,四〇〇,〇〇〇
		ブツシユル
		〃
		三二二,〇〇〇,〇〇〇
		〃
		四八〇,八〇〇,〇〇〇
		〃
		六五八,二四〇,〇〇〇
		〃
		五三五,三九二,〇〇〇
		〃

右は戦前の冬、春、兩種小麦の生産額であつて、一九一一年度の春蒔小麦の大凶作なりしを除けば此の兩者の比は一對二よりは寧ろ一對三なりと斷じて大過ない程である。而して其の最近のものをローマの國際農業協會の發表せるものに依つて見るに一九二四年度に於て冬蒔小麦作付反別數が一、五八三、五〇〇隱なるに對して春蒔二一、六四五、三〇〇隱に當り、其の比は正に一對二の間にある。此くて露西亞に於て春蒔小麦たるギルカ(Gilka)種が他に比して遙かに優越の地位にある事は今後同國の西比利亞開發が進捗するにつれて益々確保されるものと斷言するに憚らない。

翻つて同國産の小麦の品質に一瞥を與ふるに概して強力品乃至粘力品なりと稱することが出来る。換言すれば北米合衆國、加奈陀の Strong Wheat にも比敵するものであらう。南部露西亞のものは概ね赤色小麦に屬して細身なるか、稍々細粒なるを普通とし硬軟の點よりすれば中間に位するものである。之を製粉の原料とする

場合其の小麦粉は色澤、粘力共に良好の部に屬することは一般に認められてゐる事實であるが、之れをパンに製するに當つては最高級のアジマ小麦を除いては尙北米合衆國の強力品には及ばないものがあるとされてゐる。露西亞南部の小麦の品質の優良なることは右の事情によつても明らかではあるが、唯其の製粉行程には細心の注意が必要である。其の所以は一つは該小麦に比較的多量の挾雜物を含むが故に其の除去が絶對的に欠くべからざるものなることと、一つは同地産小麦は概して水分を吸収すること遅い爲めに、就中組織強靱にしき重きものは更に一層其の甚だしいものがあるが故に、製粉上の所謂ダンピング(Dumpling)乃至コンティシヨニング(Conting)には他種小麦と同程度に行ふことに依つて不測の惡結果を惹起する虞多きことである。

等しく南部に位するもクリミヤ半島(Crimea)地方に栽培する小麦は其の品質露西亞小麦の自肩たるもので通例同半島の西海岸に在るユーバトリアン市(Eupatorian)の名稱を其の儘冠せられて海外に輸出するものも當る。此のユーバトリアン種は其の粒狀概して大であり穀皮は極めて薄く、其の強力品たる點に於て正に世界の第一位を辱しめぬものであり、加之露西亞小麦に特有なる挾雜物を含むこと全くなく、製粉原料としては理想的なるものに屬する。

他面北部地方に生産する小麦は其の品質大體南部のものと同大差なしと言ひ得るも、其の大部分はギルカ小麦に屬するが故に、前者に比して更に一段と強力品の多きことは勿論であつて、又挾雜物を含むことも比較的少なく、就中亞細亞露西亞即ち西比利亞地方より生産するものは、加奈陀春蒔小麦に類して製粉上更に一層珍重さ



るゝことは言ふまでもない。

要之露西亞小麥は其の品質の點より論ずれば、北米合衆國、加奈陀の春蒔小麥に比敵するものであつて、必ずしも運庭あるを知らない。其の挾雜物を含むこと多きと、其の製粉行程上に細心の注意を要するとの非難は認めらるにしても露西亞小麥は其の下級品と雖も能く粘力を保有して、合衆國乃至加奈陀の下級品の如く假令グルーテンの分量は相當量ありとするも其の質が上級品と雲泥の差あるものに比すれば、同小麥は此の點に於て一步を抜ん出てるものとせねばならない。故に製粉業者にして其の設備の完全なるものに對しては該小麥は殊に優良品なりと斷ずることが出来る。

以上大別せるもの内にも、取引に際して種々の名稱を附して類別さるゝことあるが故に、其の概略を説明すれば次の如くである。

サクソンスカ種 (Saxonska) は露西亞小麥中に於ても極めて優秀なるものに屬して、其の強力品なる點に於て又製粉上歩合の有利なる點に於て珍重さるゝもので、諸外國の需要も多く主として北部諸港より輸出さるゝものに當る。然し近來露西亞一帶に小麥栽培の不振よりして海外市場に此の種を見ざるは寧ろ當然と言はねばならぬ。

ウルカ種 (Ulka) は主として南部地方に生産さるゝ赤色小麥であつて、粘力は中位を占め近來稍々多量に輸出さるゝものとして名あるも其の品質必ずしも優良なりと斷ずることは出来ない。

クバンカ種 (Kubanka) は一種のデュラム (Durum) に類屬するものなるも、其の最強力品なる點に於て他と異なる。製粉に際しても其の過分に強靱なるより困難を感じらるゝものであり、可成長時間のコンディショニング (Conditioning) を必要とし、其の製粉せられたものは幾分黄色を帯びて歩合も低率たるを免れぬ傾はあるが大型パンを製造するに從來珍重されたるものに屬する。

マカロニー種 (Macaroni) は所謂デュラム種の異名であつて、同國に於て主として歐露の南東部に生産せられ、其の質強靱にして製粉上困難を感じコンディショニングに細心の注意を要することクバンカと略々同様なるも、其の粘力に至つては寧ろ低級品である。此が主としてマカロニー製造の原料として使用さるゝは此に述べらるゝでないこと、若し同種の價格が他種小麥と大差なきに至ればパン用小麥としても必ずしも價値なきものではないが、現在概して同種が高價なるが爲めにマカロニー製造以外に需要さるゝ事は僅少である。而して露西亞産のマカロニー小麥が主として伊太利、佛蘭西に輸出さるゝことも又説明の限りではない。

最後に同國の小麥需給の關係に一瞥を加ふるに同國は既に説明せるが如く、從來各種の統計材料に乏しきが故に假令苦心の結果、其の供給數量の概數は之れを求め得たりとするも、其の需要の數量を得ることは全く困難なる事に屬する。其の一例を示せば需要の最大部分を占むべき國內食用消費量の推定の如きであつて、或ひは研究者を異にするに従つて重大なる相違を來してゐる。一面同國の食用消費量を五億五六千萬程度とするものあるも反面に露西亞國民が其の生活程度の低級にして白パンを食用に供することなく主として黒パンを使用するが故に、



ライ麦の消費量こそは巨額に達すべけれども、小麦消費量は比較的少量にて足り年々五億ブッシェル以上に達するが如きは、其の生産額、輸出額を對比するに依つても、其の誤謬なるを知るに十分なりとするものも亦多い。今公平の立場にあつて此の兩者の説を吟味するに、其の後者の推測が眞理に近いものあるを否定し得ない。殊に其の生産額、輸出額の兩者を具体的に比較研究すれば如實に其の實相を捕へることが出来ると思ふ。即ち生産額より輸出額を控除して國內の各種消費乃至保有に歸屬せしめられたものの數量を示せば次表の如くである。而して大戦勃發以後の各種統計にして信するに足るものは殆ど皆無なる爲に便宜上戦前のものを摘録することとする。

年 度	生 産 額	輸 出 額	残 高
一九〇七年度	五一一、〇〇〇、〇〇〇	六〇、七三六、〇〇〇	四五〇、二六四、〇〇〇
一九〇八年度	五六六、〇〇〇、〇〇〇	九六、六〇八、〇〇〇	四六九、三九二、〇〇〇
一九〇九年度	七八三、〇〇〇、〇〇〇	二二二、七九二、〇〇〇	五六〇、二〇八、〇〇〇
一九一〇年度	七七五、〇〇〇、〇〇〇	二二三、七七六、〇〇〇	四四一、二二四、〇〇〇
一九一一年度	五六三、四八五、〇〇〇	七九、五六八、〇〇〇	四八三、九一七、〇〇〇
一九一二年度	八〇一、四九七、〇〇〇	九九、六九〇、四〇〇	七〇一、八〇六、六〇〇
一九一三年度	一、〇二七、六六二、〇〇〇	一六五、九二八、四〇〇	八六一、七三三、六〇〇

(註) 生産額は頭書の年度の七月乃至九月下旬に收穫されたるもので、輸出は頭書の年度の八月一日より翌年度の七月三十一日に至る一ケ年である。従つて残

高は頭書の年度八月一日より翌七月三十一日に至るまでの國內消費に當てらるべき數量を示す。

右の表に依るも露西亞國內に於ける一ケ年の國內全消費高は前年度よりの持越高を過大視するも而も尙ほ五億五千萬ブッシェルを突破することは先づ稀とせねばならないであらう。只一九一二年度(一九一二年八月—一九一三年七月)及び一九一三年度(一九一三年八月—一九一四年七月)の兩年度には生産額より右期間の輸出額を控除せるに尙ほ七億乃至八億ブッシェルの殘餘を生じたる爲め此れを以て直ちに露西亞の國內消費量は常に七八億ブッシェルに當るとするは看過し得ざる重大なる誤解である。何となれば一九一二年、一九一三年の兩年度は獨り露西亞小麦が大豐作なりしのみならず、全世界の小麦産額も四億乃至六億ブッシェルの大豐作であり、又従つて小麦の如きも一ブッシェルに付き一弗以上に出するが如きは稀で、平均して九十仙台を保ち、甚だしきに至つては八十仙にも低落せる状態なりしが故に、一面露西亞國民にして從來黒パンを常食に供せるものも、俄かに白パンを用ふるもの多きを加へ、他面外國小麦を輸入する立場にあつた諸國も各小麦大生産國よりの供給潤澤なりしが爲め露西亞のみより之れを求むる必要なく、此に其の當然の結果として露西亞の對外輸出量は比較的減少し其の反面國內に於て異常に其の消費を刺戟したるに歸着するからである。



故に此の如き異例に属すべき年度を除外すれば露西亞國內の需要總量が五億内外なりと斷ずること眞理に近かるべく、又北米合衆國農務省の調査なるものも右の事情を裏書きするものと言つてよい。即ち合衆國政府の調査に依れば平年に於て露西亞國民の小麥食用消費量は一人當り年二、七六ブツシエルで其の亞露、歐露の全人口を一三五、五一九、〇〇〇人とすれば其の總食用消費高は三七四、〇三二、四四〇ブツシエルに相當し、他に種子用小麥として相當の國內需要あるも夫は作付反別數の廣狹如何に依つて稍々甚だしい差異を生ずべく、此れも亦説明の便宜上戰前數年（一九〇七—一九一四）の平均を求むれば大略七千五百萬噐（現在は四千萬噐餘）と見る場合に、露西亞全土に於て適當の種子量は平均一、五ブツシエル乃至一、八ブツシエルに該當するが故に其の全量は年に一億千萬ブツシエル内外と見ることが出来る。（現在は六千五百萬ブツシエル内外に過ぎない。）従つて前にも説明せるが如く年々缺くべからざる次年度への持越高は多少の差こそあれ前年度よりの持越高と相殺するものとして、露西亞國內に於ける主要なる需要量は食用消費量と種子用との合算たる四億八千四百萬ブツシエル餘に當り他に雜用として七八千萬ブツシエル内外を見積つて漸く五億五千萬ブツシエル内外の總需要量を示めすこととなる。

右の推算の結果を前掲の生産高より輸出高を控除せる殘高表と對比するに、其の全く符合するを知ることが出来る。而して現在の如く全露の小麥生産高が四億ブツシエルに達せざる場合には假令種子用消費其の他需要數量に多大の減少あるとするも、到底自給自足するを得ずして海外より輸入せざるを得ざる状態にあることに就ても

十分首肯さるゝことと思ふ。

要之露西亞は大戦前に於ては莫大の小麥を海外に輸出する實力を有したるも最近數年間には却つて海外小麥の輸入を仰いで其の需要を辛じて滿す有様となつたと言はねばならない。一九二四年度の如く同國が一面多量の外國小麥を輸入するにも拘らず、他而自國產の小麥の或るものを輸出するの舉に出でたるが如きは、特殊の事情に據るものなることに就ては當初に説明せる所に屬し、而して今後小麥の需給の点より露西亞が如何なる経路を辿るべきやも亦前に屢々言及せるが故に此に重複して解説を加ふる要なかるべく、只比較的近い將來に同國が再び戦前の状態に復歸せんとする曙光の漸く顯著なるものあるを斷言するに止めん。

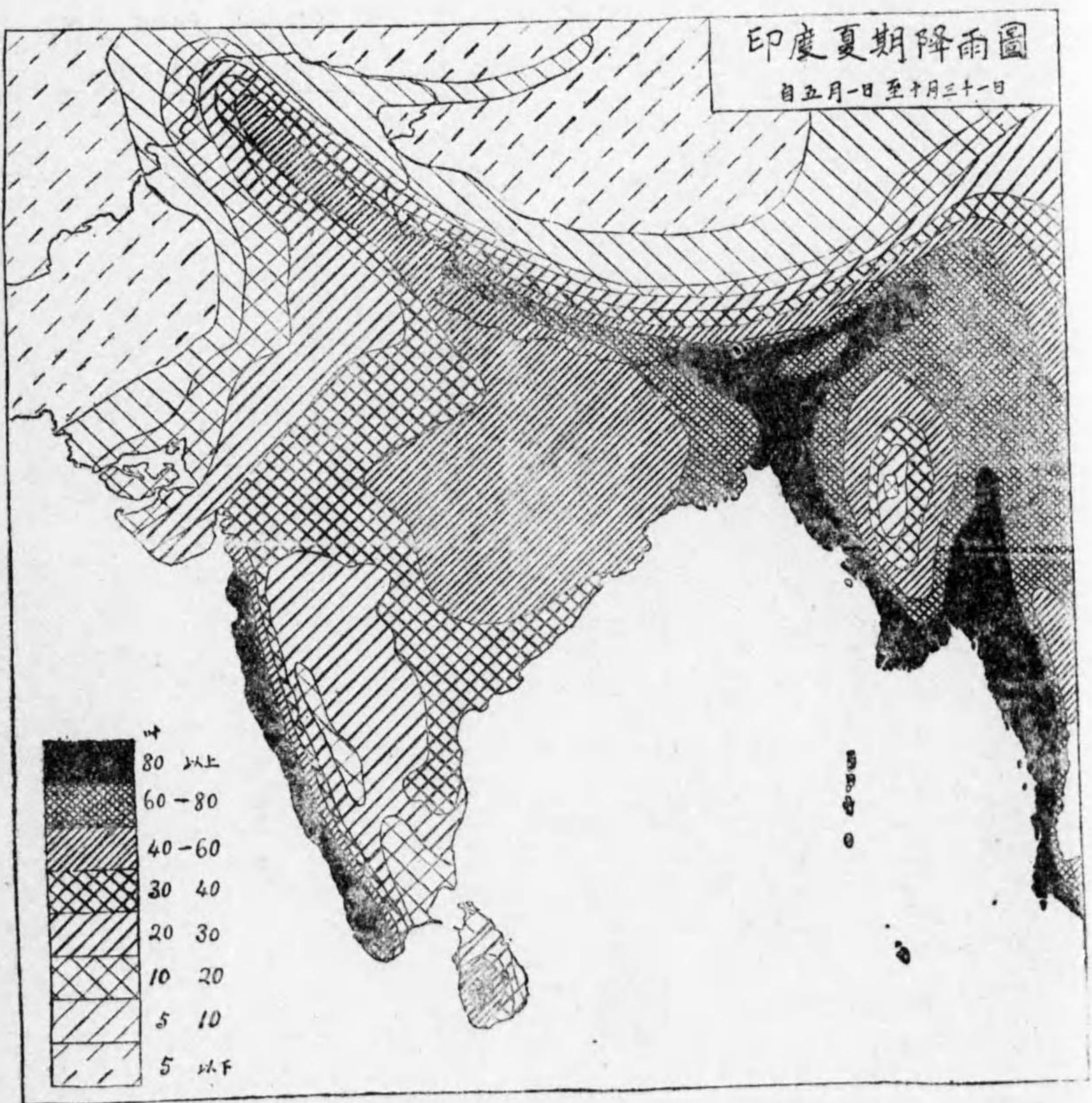
### 第三項 印度

小麥生産高の巨額に昇る點に於て印度も亦大いに注意すべきものである。乍然同國は其の人口の稠密にして又従つて小麥の國內消費量が殆ど其の生産額全量にも達する状態なるが故に國際的小麥の移動乃至世界の小麥需給調節には左程重要な地位を占めてゐないことは現在の露西亞と略々同一と言はねばならない。

惟ふに印度は其の地域が熱帶地方に類屬するが故に小麥栽培上理想的なりと言ふを得ざることは既に第一章並びに其の他に於て言及せる所に屬する。就中其の南部地方は概ね四季を通じて酷熱の地とも稱し得べく Cool Cousson Crop たる小麥の栽培に不適當なるべきは此に論ずる迄もない。獨り以上の如く氣温の關係のみならず其



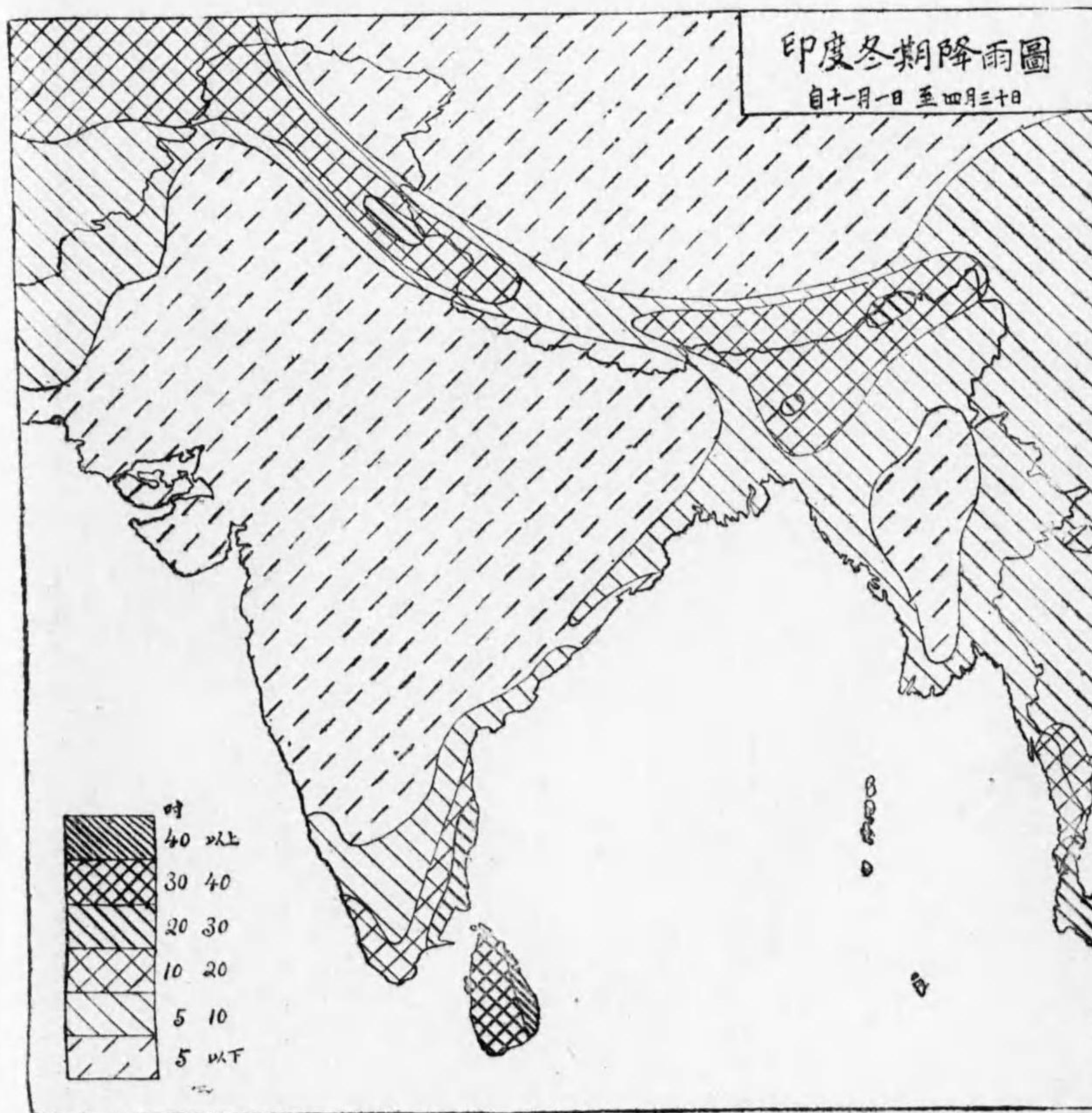
の降雨量の適否なる點よりするも、同國の南部地方は小麦栽培には不合格とせねばならぬ。即ち印度の期節は之れを乾雨の二期に區別せられ、雨期は南西貿易風 (S.W. Monsoon or Wet Monsoon) に依つて惹起せられ概ね五月の候から十月に至る約五ヶ月であり、北部地方に當るヒマラヤ山脈 (Himalaya Mountains) の南側即ちガンジス河 (Ganges) の北東方一帯も雨量多きを以て有名であるが、殊に印度南半はウエスタン・ガウト (Western Ghats) の東側、換言すればデカン高原 (Deccan) の西部に當る一少部分を除いては年平均の降雨量八十吋以上に達するもの多く、最も降雨量少なき所と雖も三十吋を下るものなきを見れば如何に彼の Wet Monsoon の影響を受くることの大なるやを知るに足るべく、他面一度乾期たる冬の時節に達すれば北東貿易風 (N.E. Monsoon or Dry Monsoon) の爲めに印度一圓に渡つて降雨量少なくガンジス河の北部乃至インダス河の上流地方に一〇—二〇吋の降雨あるのみで、南半地方は其の降雨量概ね年平均五吋以下に降るものである。又従つて降雨量の點よりするも印度の南半は小麦栽培には不適當なりと此に斷言するを憚らない。故に印度の小麦栽培地として有望なるべきは氣温の比較的低く、又降雨量も四季を通じて過不足兩極端に走ること稀なるべき北部地方、就中北西部地方とせねばならない。此れを印度の小麦栽培の實際と照合するに全く相合致してゐることは、圖にも示すが如くである。







三五三



三五二



ガンヂス河下流地方の沖積層系の土地は地味肥沃にして気温、降雨の兩者も必ずしも小麥栽培に不適當にはあらずして相當優良なる結果を期待し得るが、同地方一帯は小麥栽培より遙かに有利なる稲作に全土を提供するが故に、現在は勿論將來とても小麥栽培が行はるべしとは考へ得られない。是前掲の圖に同地方が小麥栽培地を殆ど有することのない唯一の理由である。従つて印度小麥が年々數億ブッシェルの産出高を有するも此等は主として北西部地方に限らるゝものである。

次に同國の最近十數ヶ年間の小麥作付反別數並びに其の實收高を示し更に其の主要なる産地に概説を加へるとする。

年 度	作付反別數	收 穫 高
一九一〇—一一年度	三〇、五六五、〇〇〇 噠	三七五、六二九、〇〇〇 ブッシェル
一九一一—一二年度	三一、一四一、〇〇〇 "	三七〇、八四五、〇〇〇 "
一九一二—一三年度	三〇、〇四三、〇〇〇 "	三六七、八四五、〇〇〇 "
一九一三—一四年度	二八、四七五、〇〇〇 "	三二二、〇三二、〇〇〇 "
一九一四—一五年度	三二、四七五、〇〇〇 "	三七六、五八一、〇〇〇 "
一九一五—一六年度	三〇、三二〇、〇〇〇 "	三二三、〇〇八、〇〇〇 "

年 度	作付反別數	收 穫 高
一九一六—一七年度	三二、九四〇、〇〇〇 噠	三七九、二二二、〇〇〇 ブッシェル
一九一七—一八年度	三五、四八七、〇〇〇 "	三七〇、四二一、〇〇〇 "
一九一八—一九年度	二三、七九八、〇〇〇 "	二八〇、四八五、〇〇〇 "
一九一九—二〇年度	二九、九四九、〇〇〇 "	三七七、八八八、〇〇〇 "
一九二〇—二一年度	二五、七八三、〇〇〇 "	二五〇、三五七、〇〇〇 "
一九二一—二二年度	二八、二三四、〇〇〇 "	三六五、三五二、〇〇〇 "
一九二二—二三年度	三〇、八三五、〇〇〇 "	三六九、二六六、〇〇〇 "
一九二三—二四年度	三〇、二〇三、〇〇〇 "	三六四、一四九、〇〇〇 "
一九二四—二五年度	三一、六四五、〇〇〇 "	△三二〇、〇〇〇、〇〇〇 "

△推定

右に示せるが如く印度の小麥作付反別數又従つて其の生産高は最近十數ヶ年間に殆ど何等の増減なく、前者は三千萬噠を中心として、後者は三億五千萬ブツニルを中心として小異動を示してゐるに過ぎない。更に之を十九世の末葉のものと對比するに、其の小麥栽培業の進歩の程度は誠に微々たるものとせねばならない。即ち一九九〇年代には既に其の耕地は二千五百萬噠内外に達して、小麥生産高も二億二千萬ブツニル程度に及び、一九〇



○年を中心として前後二十年間には前者は二千七百萬噸程度に止まり其の生産額も三億ブツシエル内外を示してゐる。而して三十有余年の過去の事實より印度の小麥栽培を評すれば進歩と言はんよりは寧ろ停滞の状態を持續して今日に及んだものとも言へる。此れを北米合衆國、加奈陀乃至アルゼンチン、濠洲等の新開國の小麥栽培の進捗振りと對比すれば天地霄壤も管ならずの一言を以つて盡きてゐると思ふ。是れ一つに同國の氣温、降雨等の自然界の狀況が小麥栽培地域を一部分に局限して、他に進展することを許さないこと右に略記せるが如きものであると、同國が開闢以來時日を閑すること數千年に達して其の人口の如きも數億に及んでゐる關係よりして、苟くも農耕に適するものは殆ど耕耘せられて餘すところなきにも依るものとせねばならない。只後に詳説するが如く北西部地方の稍々乾燥地帯に屬する地方に、或ひは河川を利用し、或ひは新たに運河を開いて灌漑の施設に努力して新たに小麥耕地として幾分の増加を來してはゐるが、未だ之れを以て大勢を支配するに至らざるは尤も當然のこととせねばならぬ。

以上の如くして大体印度に於ける小麥栽培地域並びに其の作付反別數、生産高の變遷も知ることが出來たと思ふ。次に其の如何なる地方が小麥栽培上注意を要するやに就て一言することとする。

既に前掲の圖表に依つても窺ひ得るが如く小麥の主要産地は先づパンジャブ州 (Punjab)、ユーナイテッド・プロヴィンセス (United Provinces)、セントラル・プロヴィンセス (Central Provinces) の三者に指を屈するも不可なかるべく、全印度の小麥作付反別の約八割にも及んでゐる。即ち最近の統計材料によればパンジャブ州は、全

印度小麥作付反別の三割三分に當り、ユーナイテッド・プロヴィンセス、セントラル・プロヴィンセスの兩者は夫々二割二分、二割に該當する。而して此等の三州に就て一九〇一年代の小麥作付反別比例を見るに全小麥耕地二千三百萬噸内外の内夫々三割五分、二割五分、九分を示してパンジャブ、ユーナイテッド・プロヴィンセスの兩者は全印度の小麥耕地が年々幾分づゝなりとも増加せるに對して常に其の三割五分、二割五分の作付反別を占むるを得ずして現在の三割三分、二割二分に相對的に低落せるにも拘らず、セントラル・プロヴィンセスのみは一九〇一年代の九分の地位より年々遂次其の比例を増加して今日の全印度小麥耕地の二割を占むるに至つたのである。謂はば過去二十五ヶ年の間にセントラル・プロヴィンセスは小麥作付反別數を約四百萬噸増加して今日の六百三十萬噸内外となつたもので、一九〇一年代より今日迄に印度の小麥栽培地が約七百萬噸の増加を示してはゐるが其の大部分は右のセントラル・プロヴィンセスの功に歸せねばならない。

右に述べた三州の外に尚ビハール (Bihar)、ボンベイ (Bombay)、シンド (Sind)、ノースウエスト・フロンティア・プロヴィンセス (North-West Frontier Provinces)、セントラル・インディア (Central India)、ラチプタナ (Rajputana)、ヒデラバッド (Hyderabad) 等の諸地方にも全印度小麥の約二割にあたる耕地を有するも僅かにセントラル・インディアを除いては未だ特筆すべき程度のものでないのは勿論、將來大いに期待し得べきやに就ても又疑の多く存するものと言はねばならない。只一言此に注意すべきは小麥生産地としてのベンガル (Bengal) であつて、同州は一九〇一年代には約百五十萬噸の小麥耕地を有し生産額も千八百萬ブツシエルに達してゐるが、同



地が小麦栽培よりは寧ろ稻栽培に適當し又其の利益も遙かにも多き關係より漸次小麦は其の影を潜めて現在は到底昔日の俤のないことである。而して此等の諸州の最近の平年小麦生産高は三億五千萬ブッシェル内外に當つてゐることは既に説明した所に屬するが、往々同國は旱魃の襲ふ所となつて稍々甚だしい打撃を受くることがあり、就中バンジャブ州に於て其の著しきものあるを認める。即ち同地方は前圖に示せるが如く雨期にあつては能く年平均三十吋乃至六十吋の降雨量を有するも、其の乾期に至れば年平均にして二十吋の降雨ある部分は稀で、五吋乃至十吋甚だしきは五吋以下に達するものもある。従つて此に必然水分不足の現象を呈して小麦の立枯れを生ずるは言ふまでもないことである。此の旱魃の害より逃れんとして稍々久しい以前から灌漑の施設行はれ、就中英國政府が該事業に意を用るに至つてよりは數多の堀割が開鑿せられサーヒンド運河 (Sichind Canal) の如く延長實に數百哩に及び、尙其の派生延長を加ふれば數千哩の多きに達するものさへあつて、爲めに旱魃の害を大いに除去し得べく、現在印度が運河、堀割、貯水所其他によつて灌漑さるゝ全面積は約五千萬噐の多きに達し、當然小麦栽培地も絶大の恩恵に浴してゐることは否定出来ないが、決して現在の狀況を以つては満足すべきでなく、其の完璧を將來に期さねばならないと信ずる。

次いで同國の播種、收穫に就ては其の小麦栽培地が主として其の北西部地方に偏すと雖も、然も右の如く各地に派生するが故に此れを一律に定むることは困難であつて、最も主要なるバンジャブ州にては播種は平年概ね九月乃至十月に行はるゝも其の甚だしきに至つては翌年一月に至るものもある。然し此の如きは特殊の事情、具体的に言へば降雨少なく、土地に濕氣なく、播種の不可能なるに依るもので、十一月に至つても尙ほ相當の降雨なき時は先づ同州の小麦は大減少を來すものと見て差支ない。ユーナイテッド・プロヴィンセス、セントラル・プロヴィンセス、セントラル・インディアの諸州は概ね九月より十一月の間に、ボンベール、シンド地方は十月より十二月に播種さるゝものである。勿論七月、八月に早くも播種さるゝ所のあることは、既に第一章に述べた所に屬する。而して其の收穫期は播種期の遅速に應じて、南部地方の二月に始まり、北西部地方の四月下旬乃至五月上旬に終るものである。

此くの如くして收穫せられたる小麦は其の栽培者が主として *Rot* と稱ばるゝ、土着の民であつて農耕法が極めて粗放拙劣なる爲めに品質粗悪と言はねばならない。殊に其の刈取法、脱穀法の不完全なると、脱穀後適當なる貯藏所を有すること極めて稀なるが故に、小麦に土砂の混入すること多く其の他の挾雜物を含有すること亦寧ろ當然とされてゐる。従前此等の不純物が小麦の一割乃至一割二分の多きに達して製粉業者を困惑せしめたることもあるも、近來は漸く其の弊風改まつて、一分乃至五分に過ぎざるに至つた。此は一般對外商取引に於て概ね *Clean Turns* を契約の基礎として二分以上の挾雜物に對しては、規定に従つて値引するか、又は其の取引を拒絶せるに歸因せるものである。

其の種類は多種多様にして一々此に列挙するの煩に耐えないが、取引界に最も重要なべきもの數種に就て略説することとする。従つて其の名稱の如きも主として小麦集散地名又は輸出地の名を以つて表はし、其の固有の



名稱に就て説明するを避けたいと思ふ。

一、カラチ (Karachi or Kurachee) に集散せられ、又は同地より輸出せらるゝ小麦。

(イ) チョイス・ホワイト・カラチ (Choice White Karachi) 種の白小麦に属することは其の名稱の示す通りであるが、往々にして多量の赤小麦を混入してゐることも稀ではない。粒の大きさは中位で、其の組成は極めて強靱で、其の外皮は鈍い光澤を持つてゐる。同種は對外輸出、其他取引界では其の數量の多き点よりして、最も重要な地位を占めてゐるものではあるが、其の悪臭を外皮に有することゝ、爲めに製粉の原料としてウオツシング (Washing)、又はコンデイションング (Conditioning) に注意を缺く場合、其の外皮の悪臭が粉にも傳染する虞あるとの二者の理由よりして必ずしも製粉業者に珍重さるゝものではない。

(ロ) カラチ (Karachi or Kurachee) 種は中位の強力品として、又之を原料として製粉するに當つて、其の歩合が相當優良なるに歸因して重要視さるゝものに属する。が只之より製せる小麦粉が稍々濃厚なる黄色を帯して、漂白を充分に行ふべき必要あることゝ、之をパン製造に用ふる時其の氣胞が粗大であつて優良品となし得ないことゝの缺點あるは皆一般に認めらるゝ所である。尙同種もチョイス・ホワイト・カラチ種と同様に往々にして外皮に悪臭を有することもあるが、ウオツシング並びにコンデイションングに相當の注意を加ふれば何等恐るゝに足らない。而して同種は其の性質として吸水量多く而も徐々に行ふものなるが故に、製粉の場合はウオツシングを二回繰返し更にステーミング (Steaming) を行へば理想的である。殊に同種が混合用として極めて好

都合なる所以の一は比較的價格の安直なることゝ、水分過多の小麦と混合する場合其の過分の水をよく吸収して自然的に自己ダンピングを行ふことゝ、更に一步を進めては其の製粉されたものも固有の水分吸収力を能く發揮して、製パン用として重用視さるゝにある。

(ハ) レッド・カラチ (Red Karachi or Red Kurachee) は赤色小麦に類し粘力は中位にあり、其の數量多きが故に製粉上、混合用として相當需要さるゝものではあるが、製品が黄色を帯び他面幾分澁味を有するが故に其の漂白並びにコンデイションングには相當の注意を要する。

二、カルカッタ (Calcutta) に集散せられ、又は同地より輸出せらるゝ小麦。

(イ) クラブ・カルカッタ一號品 (No.1, Club Calcutta) は白色小麦に属して其の組成の緻密なるより製粉歩合は最も優良なるものに屬し、加之粘力は全國産の小麦中第一を占むる高級品である。

(ロ) クラブ・カルカッタ二號品 (No.2, Club Calcutta) 種も亦優秀小麦に屬し、カラチ小麦に比して遙かに強力品であり配合用としては缺くべからざるものなるも只幾分黄色を帯ぶるの缺點あるは否定出来ない。

三、ボンベイ (Bombay) に集散され、又は同地より輸出せらるゝ小麦。

同地方の代表的なるものはチョイス・ホワイト・ボンベイ (Choice White Bombay) 種であつて水分を含むこと少量にして質強靱なるも、カラチ小麦に比すれば幾分粘力低く又軟かし。然し光澤の秀でたる点並びに歩合の可良なる点に就ては同國産中最上位にある。



四、デリー (Delhi) に集散する小麦、

(イ) 白デリー (White Delhi) は字の示す如く白色小麦に属し、製粉歩合は優良にして製パンに用ひては印度小麦中白眉たるものに當る。其の粘力は必ずしも強からず先づ辛じて中位を占むる程度である。

(ロ) 赤デリー (Red Delhi) 種は赤色小麦にして、前者の白デリーに比せば遙かに強力品なるも之より優良なる製パン用の粉を得ることは困難とされてゐる。

最後に同國の小麦需給關係を瞥見するに從來同國には小麦栽培地域が間々旱魃の襲來するところとなり、其の生産高に高低を來したるが爲めに供給數量に五千萬ブッシェル内外の異同ありしは否定し得ないが、近來灌漑の施設が漸く進捗するにつれて其高低の度も平均せられ大体三億五千萬ブッシェル内外となつてゐるが、反面に其の需要の點よりすれば種子用の四千五百萬ブッシェル、持越高の千五六百萬ブッシェルの兩者には重大なる變動はないが、需要の最大項目たる國內食用消費量は小麦作の豊凶如何に依つて著しき高低を示すもので、通例は一人當り〇、七ブッシェルの程度なるに一九二三年の如き豊作に際しては一ブッシェル以上にも及び其の差の莫大の數に昇るものがある。

乍然大体論よりすれば同國の一ヶ年の食用消費量は其の雜用を加算すると約二億六千萬ブッシェル内外に當り持越高は前年度よりのものと相殺することとして國內總需要は通例三億千萬ブッシェル程度と見て太過ない。従つて其の生産額が右の三億萬ブッシェル以上に達せざれば、全然輸出餘力はないこととなるが、國人の主要食が

小麦には非ずして米なる關係より其の豊作の如き場合は直ちに小麦消費量は激減すること稀ならざるが故に、假令其の生産額が三億に達せざる時にあつても尙ほ能く數千萬ブッシェルの輸出を行ふを得ること一九一八—一九一九年度の如きである。而して右年度は歐洲大亂の結果よりして世界小麦が大暴騰を示せる時に當り、米に比して遙かに割高なりしも其の重要な一因たることは勿論である。

要之印度の小麦需要状態は常に其の小麦作の豊凶てふ原因のみならず、主要食たる米作の如何乃至兩者の價格關係よりして極めて微妙なる移動を惹起し、其の數量を斷定的に論ずることは出来ないが、他に特殊の事情のない限り國內消費量は右の三億ブッシェル内外と見て太過ないと信ずる。

従つて總供給量と總需要量の差は多くも五六千萬ブッシェルであり、其の少なきは辛じて千萬ブッシェル内外に過ぎない。是同國が其の小麦生産數量は莫大の數量を示すも餘剰として海外に輸出し得ざること左表の如きものある所以に外ならない。

年 度	輸出數量 (年度は Crop Year にて四月より翌三月に至る)
一九一〇—一一年度	三八、〇四八、〇〇〇 ブッシェル
一九一一—一二年度	四五、九〇四、〇〇〇 "
一九二一—二二年度	五一、七四八、〇〇〇 "



年 年	輸出數量	
一九一三——一四年度	六三,三九二,〇〇〇	ブツシエル
一九一四——一五年度	四七,〇〇〇,〇〇〇	〃
一九一五——一六年度	二六,五七六,〇〇〇	〃
一九一六——一七年度	一一,一九二,〇〇〇	〃
一九一七——一八年度	二八,一九六,〇〇〇	〃
一九一八——一九年度	四三,六二〇,〇〇〇	〃
一九一九——二〇年度	一九,七三八,〇〇〇	〃
一九二〇——二一年度	三〇三,〇〇〇	〃
一九二一——二二年度	八,三〇〇,〇〇〇	〃
一九二二——二三年度	三,〇一七,〇〇〇	〃
一九二三——二四年度	二二,八二三,〇〇〇	〃

右の如き同國の需給状態は今後と雖も繼續せらるべく、其の輸出餘力の如きも假令減少すればとて増大せしむることは稍々困難なる業に屬するものと考へる。

### 第六節 其の他の諸國

前數節に於て現在世界の六大小麥生産國の概略を説明したが尙他に支那の如く當然小麥大生産國に數へらるべきもので、而も我が國との關係も甚だ密接なるものもある、如何にせん同國には小麥生産に關し何等準據するに足るべき資料なく、又假令斷片的の調査資料は必ずしも皆無にはあらずとするも、其の説く所は研究者を異にするに従つて夫々著しき相違を來し、其の何れが真なるや捕捉し得ざるものがある。其の一例として同國の平均小麥生産額の調査報告を見るに一億ブツシエル内外となすもの、二億乃至三億ブツシエルとなすもの、更に支那政府當局としては六億ブツシエル以上と見積る（民國七年に支那政府農商部の稍々詳細に調査せるものに據れば十億ブツシエルを突破した）等、其の差異の甚大なるに一驚を喫する程である。勿論支那の人口、其の食物に對する嗜好乃至は同國の小麥栽培の沿革を考慮すれば、其の小麥年産額が如何に不作なるにもせよ一億ブツシエル又は二億ブツシエルと言ふは明らかに誤謬なるべけれども果して如何なる程度のものなるやに就ては此を比較的正確に求むるに途はない。従つて又其の栽培状況、需給状態も知るに由なかるべく、支那が相當多量の小麥を生産しつゝあるは常識的に認めるにしても今此に前記六大小麥生産國と同一列に説明し得ざるを遺憾とする。

翻つて前記六大小麥生産國並びに支那以外にも年々多額の小麥を生産する國の十指を以つて屈し得ざるものあるは此に言ふ迄もないことで、就中歐洲の文明諸國の如くパンを以て唯一の主要食糧とするものゝ中には年々數



億ブツシエルの生産高を有するもの佛蘭西、伊太利、スペイン等の如きものさへある。乍然此等の諸國は現在其の人口の過剰なると其の一人當りの小麥消費率の高きとに依つて何れも到底自給自足を保ち得ない状態にあると言はねばならない。

惟ふに此等の歐洲先進國と雖も産業革命以前にあつては何れも其の立國の中樞たるべき産業は農業以外に出でなかつた。勿論商工業を以て其の樞要産業とし國を立てたるもの、必ずしも皆無には非ざるも今日よりして此を見れば未だ規模極めて少にして言ふに足らざるべく、殊に今日の先進文明國は何れも以前農を以つて立國の基礎とせることは此に説明するまでもなく歴史上明らかなることに屬する。従つて當時此等の諸國は其の食糧に關しては原則として自給自足を墨守し、現今の如く國民の主要食糧品を擧げて之を海外に求むるものゝ、又は必ずしも其の全部を外國に求めざるも年々莫大の輸入を行ふに非ざれば國民をして飢餓に瀕せしむるの外途なきが如きものは殆きなしと言ふも過言でないのである。然るに一度産業革命が英國を襲ひ漸次西歐諸國に波及するに及んでは此に其の産業組織に一大變革を來し、商工のみ獨り着々として大進歩を遂げて止まず、反之農業は依然として舊態を脱せざるのみならず商工業の勃興によつて當然惹起せられたる『都市、工業地への人口集中運動』の爲めに漸く振はず、加之人口の増殖益々甚だしきを加ふに至つては從來食糧に關して自給自足を維持し尙幾分の餘剩を生じたるが如き國も皆滔々として之を海外に求めざるを得なくなつた。英獨然り、佛伊亦然り。此を此等の文明諸國の主要食糧品たる小麥に就て見るも現在殆き一として自給自足の程度にあるものなく、英本國の如きは

自國産の小麥數量を以つては辛じて三ヶ月間其の國民を養ふに過ぎず、佛蘭西、獨逸の如きも夫々二ヶ月、四ヶ月分の小麥は全然之を海外に求めねばならない。而して此の如き結果を招きたるものは必ずしも其の小麥生産高の少量なるには非ずして、主として人口の過剰と其の一人當りの消費率の多きに歸因するものであり、佛蘭西の如きは年々三億ブツシエル内外を生産して殆き印度と伯仲の間にあると言ひ得べく、伊太利も亦二億ブツシエル内外を示してアルゼンチンと大差なく獨逸、英本國と雖も夫々一億ブツシエル、六千ブツシエルの生産高を保持するものである。由是觀之も如何に此等の諸國の消費額の多大なるやを暗示するに十分と思ふ。

右述べたるが如き各種の事情を綜合するに此等の諸國が一朝一夕に再び従前の自給自足の状態に復歸するは至難の業なるべく、近來英國其他に歐洲大戰亂以來農業を重要視して其の振興に新たなる運動が開始されつゝあるは之を否定し得ないが、其の効果あるや否やには多大の疑を存する餘地があると信ずる。

従つて近い將來に此等の諸國の小麥生産高が激増して世界の小麦移動に重大なる變化を惹起するが如きは、今俄かに考へ得られざるべく、以下此等諸國の小麥に一瞥を與ふるに當つても専ら需給關係を表示するを主として生産状態其他を詳説するの煩を避け度と思ふ。

## 第一項 英國

英本國に於ける小麦作付反別數は僅かに二百萬畝内外で、加奈陀の十分の一にも達しない状態である。然し其



の生産額は六千萬ブツシエル内外を保つて其の墾當り收穫率の高い點に於ては宇内に嶄然頭角を露してゐる。其の理由は北米合衆國、加奈陀其の他の大生産地の如く粗放的農耕法に依らず、専ら集約的農耕法を採用するにあつて、就中施肥に十分の注意を拂いつゝあることは特筆するに價する。收穫率に就て具体的に説明を加れば北米合衆國、加奈陀は夫々平均一四、一六ブツシエルに過ずして比較的收穫率の優秀なりとせらるゝ獨乙、佛蘭西が各々二五ブツシエル、二〇ブツシエル内外なるに英本國は獨り左の如くである。

年 度	一墾當り收穫率	年 度	一墾當り收穫率
一九〇五年度	三二、九	一九一七年度	三〇、六
一九一〇年度	三〇、五	一九一八年度年	三三、三
一九一一年度	三三、〇	一九一九年度	二九、二
一九二二年度	三九、一	一九二〇年度	二八、七
一九一三年度	三一、七	一九二一年度	三五、四
一九一四年度	三二、八	一九二二年度	三一、一
一九一五年度	三一、七	一九二三年度	三一、四
一九一六年度	二九、一	一九二四年度	三三、五

如何に其の墾當り收穫率が合衆國、加奈陀の二倍以上に達するにしても、作付反別の隘少なることは辛じて年

々六千萬ブツシエル内外の生産高を示すに過ぎない。然るに反面其の一ヶ年の國內總消費量は略二億八千三百万ブツシエルに當るが故に自給自足の如きは夢想だに許されぬことで年々少くとも二億ブツシエル内外は之を海外に求めざるを得ない。此くも莫大の小麥を輸入する點に於ても世界中正に自眉たるもので先きに英本國は其の自國産小麥を以つては三ヶ月も其の國民の食糧に當て得ないと言へるを裏書きして餘あるものと信ずる。最近十數年間に於ける年々の輸入量、自國生産高の詳細は次に示すが如くである。

年 度	作付反別數	收穫高	輸入高
一九一一年度	一九五、〇〇〇 噠	六六、三四〇、〇〇〇	二〇三、三〇七、〇〇〇
一九一二年度	一、七〇、〇〇〇	五九、三一一、〇〇〇	三三九、一六〇、〇〇〇
一九一三年度	一、七九〇、〇〇〇	五八、四六三、〇〇〇	三三六、九九〇、〇〇〇
一九一四年度	一、九〇五、〇〇〇	六三、二〇〇、〇〇〇	三三二、八四四、〇〇〇
一九一五年度	二、三三三、〇〇〇	七六、二二〇、〇〇〇	一八八、八五五、〇〇〇
一九一六年度	二、〇五三、〇〇〇	六二、六六九、〇〇〇	二〇九、二三四、〇〇〇
一九一七年度	二、一〇三、〇〇〇	六六、三三〇、〇〇〇	二〇五、五七七、〇〇〇
一九一八年度	二、七三三、〇〇〇	六九、〇七三、〇〇〇	一七四、九九九、〇〇〇



年 度	作付反別數	收穫高	輸入高
一九一九年度	二,三三〇,〇〇〇 噶	六,三三四,〇〇〇	一七八,〇三三,〇〇〇
一九二〇年度	一,八六一,〇〇〇	五,八三四,〇〇〇	二二〇,七七一,〇〇〇
一九二一年度	二,〇八四,〇〇〇	七,三九五,〇〇〇	一八五,八八〇,〇〇〇
一九二二年度	二,〇七三,〇〇〇	六,五二四九,〇〇〇	二四四,九二〇,〇〇〇
一九二三年度	一,八五〇,〇〇〇	五,八四六一,〇〇〇	二〇七,八四〇,〇〇〇
一九二四年度	一,五九九,〇〇〇	五,二八〇,七〇〇	二二〇,三二七,〇〇〇

第二項 佛 蘭 西

佛蘭西は白耳義と共に歐洲諸文明國中、小麥消費率他に比して極めて高く、其の數は略々三億五千萬ブツシエル以上を示すが故に政府當局も意を此に用ひて常に農民の保護的施設に依つて其の生産増加を企てつゝあるも未だ自給自足の状態には達しない。而して其の小麥作付の地積は全國的であり、氣候、風土又必ずしも小麥栽培に不適當には非ざるも往々にして不順なる天候の爲めに、就中冬期間の悪天候に依つて著しき損害を醸成すること稀ではない。其の播種は概ね晩秋に行はれ、收穫は翌年七八月の候に最も多い。

此に同國の小麥栽培に就いて注目して價するものは一八六八年度以來年によつて多少の移動あるは免れないが、大体に於て小麥作付反別數は漸減の傾向を辿りつゝあるにも拘らず、其の收穫高は反つて加増の趨勢にあることである。換言すれば其の適當收穫率が漸次向上するを示すに外ならない。即ち一八六〇年には其の作付反別數は一七、四四〇、〇〇〇噶ありしも戦前には一六、一六六、〇〇〇噶となり、約百二十萬噶を減少せるにも拘らず其の生産高は反對に増加してゐる。

勿論一九一五年以降兩三年前迄の作付反別數が激減を示せるは決して舊來の趨勢の延長には非ずして、一つに懸つて歐洲大戦争の結果とも言ひ得るが、此の如き戦禍の中にあつて農事に精通せる壯丁が皆軍務に服し農耕上、勞働力の不足は痛感せられたるにも拘らず、其の收穫率は能く従前のもを保持せることは偉とするに足る。其の最近の小麥作付反別、其の他を示せば左表の如くである。

年 度	作付反別數(噶)	收穫高(ブツシエル)	輸入高(ブツシエル)
一九一一年度	一五、八九七、〇〇〇	三、三二一、三三九、〇〇〇	七八、八〇一、〇〇〇
一九一二年度	一六、二三八、〇〇〇	三、三三四、三三三、〇〇〇	二五、二六四、〇〇〇
一九一三年度	一六、一六六、〇〇〇	三、一八九、三七〇、〇〇〇	五六、五七二、〇〇〇
一九一四年度	一四、九七五、〇〇〇	二、八二一、六八九、〇〇〇	六二、二五七、〇〇〇